ヲ以テ敎育シ徒ラニ外形ノ齊一ヲ望ムヘカラサルコト

三、射手ヲシテ恐怖ノ念ヲ起サシメス射撃ノ嗜好心ヲ喚起セシムルコト

第二、据銃及照準ノ演習ニ於テ注意スヘキ條項左ノ如シ

一、射手ノ熟スルニ從ヒ漸次目標距離ヲ延伸スルコト

二、各照尺相當距離ニ設置セル目標ニ對シ各種ノ姿勢ヲ以テ間斷ナク實施スルコト

三、射手ノ視力ヲ强健ナラシムル爲遠大ノ距離ニ在ル目視困難ナル目標ニ對シ屢々演習ヲ行フコト

第三、距離測量ノ正否ハ射撃効力ニ著大ノ影響ヲ及ホスモノトス故ニ射撃術ノ進歩ニ伴ヒ迅速正確ニ距離ヲ測定シ得ルコトニ慣熟セシムヘシ

第二節　射撃豫行演習

其一　照準

第四、照準ハ如何ナル場合ニ在リテモ精密且正確ナルニ非サレハ彈丸ノ命中得テ期スヘカラス

照準ヲ行フニハ距離ニ適當スル照尺ヲ取リ銃ヲ左右ニ傾クルコトナク照準線ヲ正シク照準點ニ指向スルモノトス

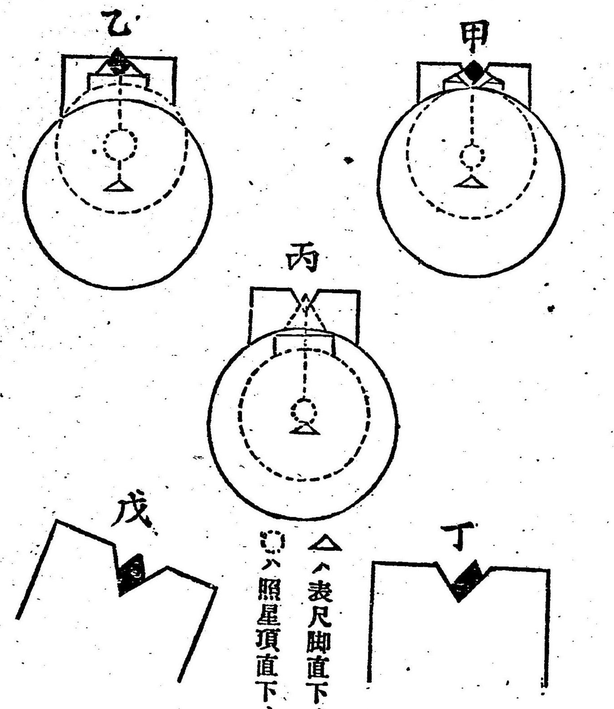
照門ヨリ照星ヲ顯出セシムルノ度ハ常ニ一定ナルヲ要ス即チ照星頂ヲ照門ノ中央ニシテ其兩緣ト水平ナラシムルヲ原則トス

第五、照準ヲ檢スル爲照準鑑査法ヲ行フヲ可トス

其方法左ノ如シ

一、銃ヲ砂囊上ニ置キ白紙ヲ覆ヒタル標的ヲ約十米ノ距離ニ設置シ助手ノ顯出スル鑑査的（中心ニ細孔ヲ穿チタル中徑二珊米ノ黑圓鈑ニシテ細竿ヲ附シタルモノ）ヲ照準セシムルコト

二、照準終レハ助手ハ鉛筆ヲ以テ鑑査的ノ中心ニ印點シタル後少シ



ク之ヲ移轉スルコト

三、射手ハ銃ニ觸ルルコトナク以前ノ照準線ヲ取リ助手ニ暗示シテ鑑査的ヲ動カシ其下際ヲ照準線ノ達スル點ニ導キ再ヒ其中心ニ印點セシムルコト

斯ノ如クスレハ多少離隔セル二點ヲ得ヘシ此離隔ノ大小ハ照準常ニ不變ナルヤ否ヤヲ判スルニ足ルモノニシテ敎官ハ更ニ助手ヲシテ其二點ノ中央ニ鑑査的ノ中孔ヲ一致セシメ射手ノ照準シタル銃ヲ動スコトナク其照準線ハ正シク鑑査的ノ下際ニ導カレタルヤ否ヤヲ點檢スルモノトス若シ二點ニテ不十分ナルトキハ尙一回復行セシメ三點ヲ以テスルヲ可トス

●第六、照準ノ際發生シ易キ諸種ノ照準誤差ハ左ノ如キ結果ヲ來スモノトス

一、照星ノ顯出過高(第一圖乙)ナルトキハ彈著ヲ高カラシメ之ニ反

シ過低(第一圖丙)ナルトキハ彈著ヲ低カラシム

二、照星ノ顯出照門ノ一側ニ偏倚(第一圖丁)スルトキハ其偏倚シタル方向ニ彈著ヲ偏避セシム

三、銃ヲ右或ハ左ニ傾ケテ照準スルトキハ彈著ハ銃ノ傾キタル方向ニ偏避シ且射距離ヲ減縮ス(第一圖戊)

其二　立射、膝射及伏射

第七、据銃ノ際ニ於ケル射撃姿勢ノ良否ハ命中成績ニ關係スルモノトス故ニ此姿勢ニ在リテハ身體ハ凝ルコトナク堅固ニ保持シ自然ノ狀態ニ在ルヲ要ス否ラサレハ銃ノ安靜ヲ得サルノミナラス照準頗ル困難ナリ又被服及裝具ノ身體ニ適合セサレハ銃ノ操作ヲ妨害スルモノトス

第八、立射ノ姿勢ニ在リテ据銃スルニ方リ注意スヘキ要件左ノ如シ

一、兩手ヲ以テ銃口ヲ上クルコトナク體ニ近ク銃ヲ上クルコト

二、主トシテ右手ヲ以テ床尾鈑ヲ肩ノ凹部即チ襟ト肩頭トノ間ニ確實ニ壓著スルコト

三、同時ニ右肘ヲ殆ント肩ト等齊ニスルコト

四、左肘ヲ自然ニ垂下スルコト

五、床尾鈑ヲ壓著スル爲故ラニ肩ヲ上ケ或ハ前ニ出ササルコト

六、既ニ据銃シタル後ハ右手ヲ緩メ又ハ銃ノ位置ヲ動ササルコト

第九、立射ノ姿勢ニ於ケル照準ハ据銃スルト共ニ左眼ヲ閉チ直ニ銃ヲ照準セントスル點ニ指向シ精密ニ照準ス此際頭ハ殆ント自然ノ位置ニ保チ床尾ヲ頰ニ接スヘシ

照準間ハ呼吸ヲ止メ引鐵ヲ壓スヘシ

第十、遠距離ノ照尺ヲ取リテ照準スルトキハ照準線ヲ眼ノ高サニ導ク爲照尺度ノ高上スルニ從ヒ床尾鈑ノ位置ヲ下方ニスルヲ要ス之カ爲漸次右肘ヲ低下シ終ニ體ニ接著シ床尾鈑ヲ內膸ニ當ツルニ至ルモノ

トス然ルトキハ銃把モ亦漸次下方ヨリ一層緊握シ左手ヲ用心鐵ニ近ツケ又射手ノ體格ニ依リ左掌ヲ內方ニ向クルモ妨ナシ然レトモ何レノ場合ニ在リテモ頭ハ殆ント自然ノ位置ニ在ルヲ要ス

第十一、引鐵ノ引方左ノ如シ

一、右手ヲ以テ銃把ヲ緊握スルコト

二、食指ノ第二節ヲ引鐵ニ鉤シ其第一段ヲ壓スルコト

三、徐ニ食指ノ前部二節ヲ曲ケ第二段ヲシテ微弱ノ力ヲ加フレハ意ニ應シ直ニ逆鉤ヲ離脫セシムルカ如クシ遂ニ擊發スルニ至ラシムルコト

食指ノ運動ハ之ヲ臂ニ波及セシムヘカラス故ニ食指ヲ曲クルニ從ヒ右手ヲ以テ漸次強ク銃把ヲ握ルヲ要ス

射手ハ引鐵ヲ壓スル爲力ヲ加フル要領ヲ熟知スルコト緊要ナリ若シ此要領ヲ十分了解セサル者アルトキハ敎官ハ射手ノ食指上ニ自己ノ食指ヲ添ヘテ引鐵ヲ壓シ其引方ヲ知得セシムヘシ又射手ノ此要領ヲ了解シタルヤ否ヤヲ檢知スル爲食指ノ前部第二節ノ運動ニ注意スヘシ之カ爲通常射手ノ左側前ニ位置スルヲ適當トス

第十二、立射ノ姿勢ニ於テ擊發スルニハ据銃シテ照準點ニ正シク照準線ヲ指向シ得タルトキ發引鐵ノ第一段ヲ壓シ照準ヲ始ムルト共ニ漸次引鐵ヲ壓スルモノトス

第十三　發射ノ後ト雖尙瞬時間擊發ノ姿勢ヲ保チ次ニ左眼ヲ開キ徐ニ食指ヲ伸シ銃ヲ構フヘシ是レ射手ノ精神沈著セサルト姿勢動作ノ確實ナラサルトニヨリ生スル過失ヲ矯正センカ爲ナリ

發射ノ瞬間ニ於ケル照準線ト照準點トノ關係ヲ注視シ發射後其照準線ノ達シタル方向ヲ確認シテ、報告セシムルハ極メテ必要ナリ然レトモ若シ之ヲ確認シ能ハサルトキハ其不明ナルコトヲ報告セシムヘシ此敎育法ハ、射手ノ技術ヲ進歩セシムルニ頗ル有益ナルモノトス

第十四　豫行演習ニ於テ据銃、照準及撃發ノ動作ニ熟セルモノト雖實包射撃ニ於テ往々免レサル過失ハ概ネ左ノ如シ

一、照準宜シキニ適シタルトキ急劇ニ引鐵ヲ壓スルコト

二、撃發ノ際右眼ヲ閉チ頭ヲ動カスコト

三、肩ヲ進ムルコト

右ノ過失ハ

一、撃發ノ好機ヲ失センコトヲ顧慮スルコト

二、爆音ニ慣レサルコト

三、反動ニ堪ヘントスルコト

等ヨリ偶然犯スモノニシテ射手ハ勿論教官ト雖之ヲ知ルコト困難ナリ然レトモ不發彈アルトキハ容易ニ發見シ得ルモノトス故ニ之ヲ矯正スルニハ教練射撃ノ際射手ニ知覺セラレサル如クシテ不發彈若クハ實包ヲ裝塡シ或ハ全ク裝塡セサル銃ヲ與ヘテ射撃セシメ

以テ自ラ其過失ヲ悟ラシムヘシ

第十五、膝射ノ姿勢ニ在リテ据銃スルニハ左前臂ヲ左膝上ニ立テ立射ノ如ク行フモノトス其他照準及撃發ノ動作ハ立射ト異ルコトナシ故ニ立射ノ爲ニ說明セル方法ハ膝射ニモ之ヲ適用スルモノトス

第十六、伏射ノ姿勢ニ於ケル据銃法

一、兩肘ヲ支點ト爲スコト

二、左手ハ概ネ立射ニ於ケルカ如クスルコト

三、右手ヲ以テ銃把ヲ稍下方ヨリ握ルコト

四、床尾鈑ヲ鎖骨ニ接セサル如ク壓著スルコト

其他照準及撃發ノ動作ハ立射ト異ルコトナシ

第十七、表尺ノ用法及照準點ノ選定

其三、照尺ノ用法

第十七、表尺ヲ倒シタルトキ其脚ニ在ル照門ハ三百米ニ表尺ヲ起シタルトキ其下部ノ照門ハ四百米ニ、遊標照門ハ表尺ニ刻セル數字ノ距

離ニ表尺上部ノ照門ハ二千米ニ相當ス而シテ四百米及千九百米ノ照尺ヲ取ルニハ遊標ヲ全ク上方ニ移スヘシ

遊標ヲ裝スルニハ右手ノ拇指ト食指トヲ以テ遊標ノ兩端ヲ撮ミ其食指ヲ以テ遊標駐脚ヲ壓シ其上緣ヲ正確ニ表尺上希望ノ分畫ニ裝置シ表尺ヲ起スモノトス

第十八、側方ニ移動スル目標ヲ射擊スルニハ其距離及速度ニ因リ目標ノ運動ニ從ヒツツ其前方ヲ照準スルモノトス

第三節　狹窄射擊

第十九、狹窄射擊ハ射擊ノ動作殊ニ照準及擊發ノ要領ヲ習得シ尙射擊ノ熟練ヲ維持スルニ利アリ

第二十、狹窄射擊ノ施行法ハ教練射擊ニ準ス

第二十一、新兵ニハ教練射擊ヲ開始スル前ニ於テ左表ニ依リ狹窄射擊ヲ施行スヘシ

習會順序	距離	姿勢	彈數	標的
一	一五米	三〇〇米 依托伏姿	五	圖的ヲ十分ノ一ニ縮小シ其圈數ヲ五線トシ1ヨリ5ニ至ル點數ヲ附ス照準點ヲ指示スル爲標的面上ニ中徑二珊米ノ黑點ヲ現示ス
二	一五	四〇〇 伏姿	五	
三	一五	五〇〇 膝姿	五	
四	一五	三〇〇 立姿	五	

第二十二、狹窄射擊ハ通常十五米ノ距離ニ於テ施行スルヲ可トス

第二十三、命中ヲ確實ナラシムル爲射擊前ニ於テ必ス銃腔ニ塗油スヘシ

射擊ノ際彈丸或ハ本栓銃腔ニ滯止スルコトアラハ之ヲ脫シ更ニ銃腔ニ塗油スヘシ

第四節　距離測量

第二十四、距離測量ハ兵卒殊ニ士官、下士ニ緊要ナルモノニシテ照尺ノ用法及照準ノ選定ニ關係シ其正否ハ戰鬪ニ於テ射撃ノ効力ニ影響スルコト著大ナリトス

第二十五、距離測量法中正確ニ距離ヲ測定シ得ルモノハ器械測量トス故ニ士官、下士ハ器械ヲ使用シ迅速正確ニ距離ヲ測知スルニ慣熟スルヲ要ス然レトモ最モ單簡ニシテ多クノ場合ニ適用スヘキモノハ目測法ナリ故ニ此方法ハ士官、下士ト兵卒トヲ問ハス屢々之ヲ行ヒ特ニ其熟練ヲ期セサルヘカラス

第二十六、兵卒ハ六百米以内（近距離）ノ距離目測ニ熟練シ尚千米ニ至ル迄目測シ得サルヘカラス士官下士ハ近距離ノミナラス六百米乃至千米（中距離）ノ目測ニ熟練シ尚千米以上（遠距離）ノ距離ヲ目測シ得サルヘカラス

第二十七、歩測ニ依リ距離ヲ測量セシムルニハ兵卒ヲシテ其自然ノ歩ト百米トノ關係ヲ知ラシメ其關係歩數ニ依リ距離ヲ測量セシムルモノトス而シテ歩測ニハ通常複歩ヲ用フルヲ便トス

第二十八、時機ニ依リ音響波動ノ速度ヲ利用シ距離ヲ測量シ得ルコトアリ音響ハ一秒時間ニ約三百三十三米ニ達スルモノトス

第二十九、土地ノ形狀、目標ノ位置、天候、季節其他種々ノ原因ハ目視ニ差異ヲ生セシムルモノナリ

一般ニ目測ヲ近ク誤リ易キ場合左ノ如シ

一、天氣晴朗ナルトキ

二、測手太陽ヲ背後ニセルトキ

三、目標ノ背後明瞭ナルトキ

四、平坦地、水面、遠隔セル明瞭物、波狀地

五、特ニ中間ノ土地ヲ通視シ得サルトキ等ナリ

一般ニ目測ヲ遠ク誤リ易キ場合左ノ如シ

一、炎熱ノトキ

二、測手太陽ニ面セルトキ

三、目標ノ背後暗黒ナルトキ

四、曇天、濃霧、曉暮、森林内及狹長ノ土地

五、一部分ノミ見ユル敵兵

概シテ實戰ノ場合ニ於テハ目測近キニ失シ又膝姿伏姿ニ在リテ目測スルトキハ遠キニ失スルヲ常トス

第三十、目測ハ概子左ノ方法ニ據ルモノトス

一、數回ノ演習ニ依リ記憶シタル地上ノ距離或ハ既ニ豫知シタル目前ノ其距離ヲ以テ測量スヘキ距離ニ比較シテ測定スルカ或ハ測量スヘキ距離ノ中央ニ一點ヲ認定シ此點ニ到ル距離ヲ目測シ之ヲ信シテ測定距離ト爲スコト

二、一定距離ニ在ル目標視像ノ明暗大小ヲ記憶シ以テ測量スヘキ距離ニ在ル目標及其附近ノ視像ニ比較シ距離ヲ判知スルコト

第一ノ方法ハ中間ノ土地ヲ通視シ得ルトキニ非サレハ適用シ得サルモ比較的正確ニ測量スルヲ得之ニ反シ第二ノ方法ハ何レノ場合ニモ適用シ得ヘシト雖其結果稍不正確タルコトヲ免レス蓋シ同一ノ距離ニ在ル同一ノ物體モ諸種ノ景況ニ因リ其視像ヲ異ニスレハナリ故ニ以上ノ諸法ヲ巧ニ應用スルトキハ迅速且正確ニ距離ヲ判知シ得ヘシ

通常中距離以上ノ目測ニ在リテハ最大最小ノ二距離ニ判定シテ之ヲ平均スルヲ可トス但シ兩距離ノ差ハ成ルヘク短少ナルヲ要ス

第五節　敎練射撃

其一、通則

第三十一、敎練射撃ヲ分チ基本及實習ノ二種トス

一、基本射撃ニ於テハ射撃術ノ基礎ヲ精密ニ練習シ併セテ銃器ノ特別ナル性質ヲ檢知シ之ヲ修正スルコトヲ知得セシム

二、實習射撃ニ於テハ基本射撃ニ依リ習得シタル技能ヲ漸次遠隔セル目標ニ應用シテ銃ノ用法ニ慣熟セシメ以テ士官、下士及兵卒ヲシテ射撃ニ熟達セシムルヲ目的トス

第三十二、教練射撃ニ於ケル執銃本分ノ射手ノ服裝ハ軍裝ニシテ其負擔量ヲ戰時ニ等シカラシムヘシ但シ基本射撃ニ在リテハ背嚢ノミヲ負フモノトス

其二、射手ノ等級

第三十三、射手ノ等級

一、初年兵（候補生、一年志願兵モ之ニ準ス）及未熟ナル射手ハ悉ク二等射手トスルコト

二、二等射手ノ各習會ニ合格シタル者ヲ一等射手ニ昇級セシムルコト

三、連續二箇年間一等射手ノ各習會ニ合格シタル者及第二種徽章ヲ有セル下士兵卒ヲ以テ特別射手ト爲スコト

成績不良ノ射手ト雖上級ヨリ下級ニ降スコトナシ故ニ斯ノ如キ射手ハ特ニ注意シテ教育スルヲ要ス

其三、射場ニ於ケル諸官ノ勤務及射手ノ動作

第三十四、中隊ノ射撃係助手ハ射撃掛士官ノ指示ニ從ヒ射撃演習ノ準備ニ任ス即チ彈藥、標的、所要ノ材料及教範等ヲ備ヘ其他諸當番卒ノ分任ヲ定ムルモノトス

第三十五、射場勤務ノ區分

一、毎標的ニ監視トシテ士官若クハ下士一名射手ノ傍ニ位置シ其動作ヲ監視シ特ニ裝塡抽彈及銃ノ安全裝置ニ注意シ又射場ノ記號ニ對スル監的手ノ應答不確實ナルトキハ之ヲ正スヘシ

射撃終レハ射撃成績草稿表ノ記入ニ誤謬ナキヤ否ヤヲ調査シテ之ニ捺印シ命中筆記及射耗彈藥ノ正確ヲ證明スルモノトス

二、記點者トシテ下士若クハ上等兵一名射手ノ傍ニ位置シ監的手ノ記號ヲ視テ命中成績ヲ射撃成績草稿表ニ墨汁ヲ以テ筆記シ射手ノ報告監的手ノ記號ト相違スルトキハ直ニ之ヲ射手ニ注意シ又銃及彈藥ニ故障アリタルトキハ摘要ニ記入スルモノトス

三、彈藥分配掛下士若クハ上等兵ハ彈藥ノ支給及藥莢ノ出納ヲ司ルモノトス

第三十六、中隊毎ニ各級ノ射手ヲ四名乃至六名ノ群ニ分チ各群ヲ標的數ニ配當シ逐次其標的ニ對シテ射撃セシム各群射撃ヲ始ムルニ臨ミ監視者ハ銃ヲ檢査シ特ニ銃腔内ニ外物ノ附著シアラサルヤ否ヤニ注意スヘシ

第三十七、射撃スヘキ各群ハ火線（發射スヘキ位置）ノ後方約十歩ノ所ニ整列ス

第三十八、射撃ハ各群ノ右翼ヨリ一名一發宛施行ス然レトモ膝射伏射及依托射撃ニ在リテハ要スレハ繼續シテ數發ヲ射撃セシムルコトヲ得

射手ハ始メテ發射スヘキ位置ニ出テ姿勢ヲ取リタルトキ五發（連續射撃ハ除ク）裝填スルモノトス

發射スレハ本章第十三ノ報告ヲ爲シ銃ヲ下シ遊底ヲ開閉シ銃ヲ安全裝置ニシ立銃ニ復シテ點數及彈著方向（人像的ニ在リテハ之ヲ要セス）ヲ報告スルモノトス

射撃全ク終リタル射手ハ火線ノ後方約十五歩ノ所ニ位置ス

第三十九、裝填、抽彈並ニ銃ノ安全裝置ハ火線ニ於テ標的ニ對シ施行スルモノトス

群ノ射撃終レハ監視者ハ各兵ノ銃及彈藥盒ヲ檢査シ且命中成績ヲ告

知スヘシ

第四十、彈藥發セサルトキハ徐ニ遊底ヲ開キ彈藥ヲ旋回シテ新位置ヲ取ラシメ再ヒ射撃スヘシ斯ノ如クスルモ發セサルトキハ他ノ射手ニ交付シテ射撃セシメ尚發セサルトキハ不發彈ト認定スヘシ藥莢破裂シテ瓦斯ヲ漏洩シ其他彈藥ノ故障ニ因リ射撃ノ成績不良ナルトキハ更ニ彈藥ヲ支給シ射撃セシムルコトヲ得

第四十一、一日ノ射撃ニ二習會ヨリ多ク射撃セシムヘカラス

一習會ノ彈數ハ五發ヲ規定トス

一習會ノ規定彈數ヲ以テ合格シ得サル射手ニハ其成績ト伎倆トニ由リ三發以内ノ彈藥ヲ補給シ（連續射撃ハ之ヲ除ク）合格セシムルコトヲ勉ムヘシ然ルトキハ總射彈ノ成績ヲ通算シ合否ヲ決スルモノトス

連續射撃ノ習會ハ假令合格點數ヲ得ルモ規定時間ニ五發ヲ發射シ得サル者ハ不合格トス

其四、監的手ノ勤務

第四十二、中隊ニ於テ監的長トシテ下士若クハ上等兵一名、監的手トシテ毎標的ニ上等兵一名、兵卒二名若クハ三名ヲ出ス又此勤務ハ通常二時間以上ニ亘ルトキハ交代セシムルヲ要ス

監的長ハ射撃中、監的手ノ動作ヲ監視シ之ヲシテ諸規則ヲ嚴正ニ履行セシム又自ラ隱顯的出沒ノ指揮ヲ爲スカ若クハ上等兵ヲシテ之ヲ爲サシム

上等兵ハ命中成績ノ報告ヲ正確ナラシメ兼テ監的鏡ニテ射場ノ景況ヲ視察シ其記號ニ注意スヘシ

監的手ノ一名ハ號旗手ニシテ號旗ヲ以テ命中ヲ報シ他ノ一名ハ治痕手ニシテ彈痕ヲ修理シ兼テ彈著點ヲ射手ニ示ス旋回的若クハ繰出的ヲ用フルトキハ第三ノ兵ハ標的ノ操作ヲ爲スモノトス數標的ヲ設立

スルトキハ二標的毎ニ一ノ監的鏡ヲ備フ然ルトキハ二名ノ上等兵ハ交互ニ監的鏡ヲ視ルモノトス

隱顯的ノ顯出時間ハ六秒時トス

二中隊以上同時ニ射撃ヲ行フトキハ高級古參ノ監的長ハ監的手一般ノ取締ニ任スルモノトス

第四十三、命中ヲ標示スル記號左ノ如シ

一、圈的、圈頭的及散兵的ハ標的面上ニ記ス數字ニ應スル點數ヲ報スルモノニシテ命中點數十點ナルトキハ白旗ヲ左右ニ振リ九點ハ上下シ八點ハ直立シ七點ハ標的ニ對シ右斜ニ六點ハ左斜ニ出ス五點以下ハ赤白旗ヲ用ヒ上ト同一ノ順序ニ從ヒ命中點數ヲ標示ス

二、人像的ノ命中ハ赤白旗ヲ左右ニ振ル

以上ノ標的ニ在リテハ圈外及人像外ノ彈著ニハ旗ヲ出スコトナク唯彈痕ヲ修理シ彈著點ヲ指示シタル後治痕竿ヲ左右ニ振リ命中セサルコトヲ報ス彈丸標的ニ命中セサルトキハ單ニ治痕竿ヲ左右ニ振ルモノトス

彈丸點數ノ限界線ニ命中シタルトキハ其高點ノ記號ヲ爲スヘシ

號旗手ハ彈痕ノ修理終ル迄號旗ヲ收ムルコトナシ但シ治痕竿ヲ掩蔽シテ射手ノ望見ヲ遮ルコトナキニ注意スヘシ

連續射撃ノ習會ニ在リテハ一發毎ニ命中ヲ報セス且彈痕ヲ修理スルコトナク各射手ノ射撃終ル毎ニ號旗ヲ以テ毎發ノ命中點數及彈著ノ位置ヲ報告スルモノトス

跳彈ハ彈痕ヲ修理シタル後命中セサルトキト同一ノ記號ヲ爲スモノトス故ニ監的手ハ精密ニ彈痕ノ形狀ニ注意セサルヘカラス必要ニ際シ監的手壕外ニ出ツルニハ各標的同時ニ赤旗ヲ左右ニ振リ射撃ノ中止ヲ求メ射場ニ於テ確實ニ應答シ全ク射撃ヲ中止シタル後

ニ於テスルモノトス

其五、射撃場ノ警戒法

第四十四、射撃ノ際不慮ノ危害ヲ豫防スル爲左ノ事項ヲ遵守スヘシ

一、射撃ヲ開始スル若干時間前ヨリ射撃場ニ赤旗ヲ掲ケ警戒ヲ爲スヘシ

二、射場ト監的壕トノ交通ハ特別ニ設置セル通路ニ依ルカ或ハ一時射撃ヲ中止セシメタル後ニ於テスヘシ

三、總テ喧噪ニ渉ル所爲ハ射場ニ於テ嚴禁トス故ニ射場ト監的壕トハ聲音又ハ號音ヲ以テ通信スルヲ禁ス

四、時間ヲ徒費セサル爲射撃ノ開始及停止、標的ノ變換彈著ノ疑ハシキ等ヲ通スル爲左ノ記號ヲ用フルモノトス此記號ハ記號板及監的壕内ニ掲示シ置クヘシ

射撃開始前若クハ中止間ハ標的面前ニ赤旗ヲ立テ射場ノ記號板ハ

其裏面ヲ標的ニ向ハシム

射撃開始ハ記號板ノ表面ヲ標的ニ向ケ之ヲ左右ニ振リ監的手ノ應答（赤旗ヲ左右ニ振リテ倒ス）ヲ待チテ植立ス

射撃中止ハ記號板ヲ左右ニ振リ監的手ノ應答（赤旗ヲ左右ニ振リテ植立ス）ヲ待チテ裏面ヲ標的ニ向ケ植立ス此記號板ヲ倒ストキハ射撃全ク終結スルヲ表ス

標的ノ變換ハ記號板ヲ側方ニ倒シテ標的ニ向ケ之ヲ上下スハ標的ニ對シ記號板ヲ俯仰ス

右ノ外要スレハ適宜ニ之ヲ定ムルヲ得

五、同一射撃場ニ於テ異距離ヨリ同時ニ射撃スルヲ許サス

六、裝塡セシ銃ハ手ヨリ離スヘカラス

七、裝塡シアル銃ヲ他人ニ依托スルトキハ裝塡シアルコトヲ告知スヘシ

八、射撃場ニ於テ擅ニ照準演習ヲ爲スヲ禁ス

其六、各級射手ノ射撃

第四十五、教練射撃ハ射手ノ等級ニ從ヒ左表ノ順次ニ據リ之ヲ施行スヘシ

第一表　二等射手教練射撃

基

習會順次	距離	姿勢	標的	合格點數
一	二〇〇米	依托伏姿	圈的	二十五點
二	二〇〇	伏姿	同	二十三點
三	二〇〇	膝姿	圈頭的	二十二點
四	二〇〇	立姿	同	十八點

本　實　習

射撃教範

五	三〇〇	伏姿	同	十點				
六	三〇〇	胸墻依托	膝姿的	十點	(人像二)			
七	三〇〇	伏姿	同	十點	(人像二)			
八	三〇〇	膝姿	立姿的	十點	(人像二)			
九	四〇〇	依托伏姿	散兵的	十五點				
十	四〇〇	伏姿	同	十四點				
十一	四〇〇	膝姿	同	十二點	一分時間連續			
十二	五〇〇	同	同	十二點				
十三	六〇〇	依托伏姿	同	十點				

十四	三〇〇	伏	姿	圈頭的		十二點	

備考

第一、第二習會ニ用フル圈的ニ在リテハ射手ヲシテ照準ヲ容易ナラシムル爲標的面上ニ中徑二十珊米ノ黑點ヲ適宜貼附スヘシ

第十一習會ハ連續射撃ニシテ最初二發裝填シ置キ次ニ三發裝填ス

第二表　一等及特別射手教練射撃

習會順次	距離	姿勢	標的	合格點數 一等射手	特別射手
基本 一	二〇〇米	伏姿	圈的	二十七點	三十二點
二	二〇〇立	姿	圈頭的	二十二點	二十七點
實習 三	三〇〇	伏姿	圈頭的	十三點	十八點
四	三〇〇	胸墻依托伏姿的		十點（命中二）	十五點（命中三）
五	三〇〇	膝姿	隱顯膝姿的	十點（命中二）	十五點（命中三）
六	四〇〇	依托伏姿	散兵的	十六點	十七點
七	四〇〇	膝姿	同	五十秒時間連續十三點	四十秒時間連續十五點
八	五〇〇	伏姿	同	十三點	十五點
九	五〇〇	膝姿	同	十三點	十四點
十	六〇〇	依托伏姿	散兵的	十二點	十三點
十一	三〇〇	伏姿	圈頭的	十五點	二十點

備考	第七習會ハ連續射撃ニシテ最初二發裝塡シ置キ次ニ三發裝塡ス

第六節　特別射撃

第四十六、士官、下士及兵卒ヲシテ射撃ニ益々精熟シ併セテ射撃ノ嗜好心ヲ喚起セシメンカ爲メ特別射撃ヲ施行ス

第七節　戰鬪射撃

其一、通則

第四十七、戰鬪射撃ノ目的ハ實戰ニ近キ狀況ニ於ケル射撃ヲ練習シ射撃敎育ヲ完成スルニ在リ

第四十八、戰鬪射撃ヲ分チテ各個戰鬪射撃、部隊戰鬪射撃ノ二種トシ部隊戰鬪射撃ハ更ニ分チテ擬習實習ノ二種トス

第四十九、部隊戰鬪射撃ノ擬習ハ兵卒若クハ幕的或ハ標的ヲ以テ敵兵ヲ假設シ空包又ハ擬製實包ヲ用ヒ行フモノトス

第五十、各個戰鬪射撃ハ下士兵卒悉ク之ヲ施行シ部隊戰鬪射撃ハ通常分隊、小隊及中隊ヲ以テ施行スルモノトス

其二、各個戰鬪射撃

第五十一、各個戰鬪射撃ハ實包ヲ使用スル單獨兵ノ戰鬪動作ニシテ敵棟射撃ノ應用法ヲ了解セシムルヲ目的トス

第五十二、各個戰鬪射撃ニ於テハ主トシテ左ノ諸件ヲ要求ス

一、目標發見ヲ迅速ニスルコト

二、適當ニ位置ヲ選定シ地物ヲ利用スルコト

三、目標ヲ適當ニ選定スルコト

四、速ニ距離ヲ測定スルコト

五、効力ヲ期シ得ルヤ否ヤヲ判斷スルコト

六、照尺及照準點ヲ選定シ或ハ之ヲ修正スルコト

七、如何ナル姿勢ニ於テモ据銃ヲ敏捷且確實ニスルコト
八、短少時間ニ精密照準ヲ爲シ得ルコト
九、精神ヲ沈着シ熟慮シテ發射スルコト

第五十三、單一銃ノ射撃ニ於ケル射彈散布界左ノ如シ

距離	總彈ヲ含ム方形 縦	横	約半數以上命中ヲ期シ得ヘキ標準
二〇〇	〇、六八米	〇、六八*	頭首ノミ顯シタル兵
三〇〇	〇、八〇	〇、七六	伏姿兵
四〇〇	一、〇四	一、〇〇	膝姿兵
五〇〇	一、四〇	一、二四	立姿兵或ハ密集セル（二人膝姿兵二人ノ軸身間隔六十五珊ヰトス以下同シ）
六〇〇	一、八〇	一、五二	密集セル二人立姿兵或ハ騎兵

備考　此表ハ既知距離ニ於ケル中等射手ノ平均成績ニ基キタルモノナリ

其三、部隊戰鬪射撃

第五十四、部隊戰鬪射撃ノ實習ハ小部隊戰鬪敎練ノ一時期ヲ演練シ射撃指揮及射撃軍紀ノ關係並ニ其適否ヲ事實的ニ證明シ指揮官及兵卒ノ戰鬪動作ヲ完成スルヲ目的トス

部隊戰鬪射撃ノ擬習モ亦之ニ準ス

第八節　夜間射撃及間接射撃

第五十五、夜間射撃及間接射撃ハ此種ノ射撃ノ設備及方法ヲ修習シ且其効力ヲ檢知セシムルニ在リ

第五章　檢閲射撃及名譽射撃

第一節　檢閲射撃

第一、聯隊長ノ毎年一回射撃教練ノ大部ヲ終ヘタル時期ニ於テ通常建制中隊ノ中隊戰闘射撃ヲ施行シ以テ戰闘間指揮官ノ射撃指揮ノ適否及兵卒ノ射撃熟達ノ程度ヲ檢閲スルモノヲ檢閲射撃ト謂フ

第二節　名譽射撃

第二、名譽射撃ノ目的ハ中隊ノ射撃教育ヲ奬勵シ且教練射撃ニ於ケル熟達ノ程度ヲ檢知スルニ在リ

第六章　射撃ノ褒賞

第一節　射撃ノ徽章

第一、射撃ノ徽章ヲ分チテ三種トシ左ノ區別ニ從ヒ教練射撃ノ結果優等ナル各級射手ニ授與ス但シ士官、特務曹長、曹長、候補生及一年志願兵ハ之ヲ除ク

一、第一種徽章　特別射手　聯隊ニ十五名ニ付一個

二、第二種徽章　一等射手　各大隊ニ下士十六名ニ付一個、各中隊ニ兵卒十八名ニ付一個

三、第三種徽章　二等射手　各中隊ニ兵卒二十名ニ付一個

但シ人員端數ヲ生スルカ或ハ定數ニ充タサルトキハ其人員定數ノ二分ノ一以上ニ付更ニ一個ヲ增加シ若クハ一個ヲ授與ス

聯隊ヲ編成セサル守備隊、駐劄部隊ニ在リテモ此率ニ準ス

第二、各級射手ノ優劣ハ教練射撃ノ各習會ニ合格シ尚實習射撃ノ發射彈數最少ナル者ヲ以テ最優等トス若シ同等ナルトキハ實習射撃ノ命中點數ニ因リ尚同等ナルトキハ基本射撃ノ彈數ニ因リ決定ス

第三、射撃ノ徽章ハ全服役間之ヲ佩用シ上衣左肋ノ邊ニシテ概ネ第三釦ノ高サニ佩フ若シ數個ヲ有スルトキハ其種類ノ順次ニ從ヒ右ヨリ

左ニ列スヘシ但シ之ヲ佩用スルハ制服ヲ著シタルトキニ限ル

第二節　射撃名譽旗

第四、師團内ニ於テ名譽射撃ノ成績最優等ナル中隊ニ射撃名譽旗（附圖第一）ヲ交付ス

此旗ハ次年ノ名譽射撃施行期日迄所有スルモノニシテ射撃當日ニ至ラハ之ヲ師團長ニ返納スルモノトス

第七章　試驗射撃

一、試驗射撃ハ左ノ場合豫メ銃工長ヲシテ細密ニ銃ノ各部ヲ檢査セシメ然ル後中隊ニ於テ行フモノトス

一、新ニ支給セラレタルトキ

二、大ニ修理ヲ加ヘタルトキ

三、命中不良ナルトキ

第二、此試驗ハ靜穩ノ天候ヲ選ヒ良射手ヲシテ射撃セシム

標的ハ附圖第七ヲ參照スヘシ

第三、射手ハ二百米ノ距離ニ於テ銃ヲ砂囊上ニ托シ黑點ノ下際ヲ照準シ連續五發ヲ射撃ス但シ彈著ヲ示スコトナシ

第八章　射撃ノ材料、射撃場及彈藥

第一節　標的

第一、標的ノ種類左ノ如シ

一、圈的（附圖第二參照）

二、圈頭的（附圖第三參照）

三、人像的（附圖第四參照）

四、散兵的（附圖第五參照）

五、騎兵的（附圖第六參照）

第二、人像的ノ種類左ノ如シ
一、立姿的　高サ一米六五
二、膝姿的　高サ一米〇〇
三、伏姿的　高サ〇米五〇
四、頭的　高サ〇米三五
二等射手ノ教練射撃ニ於ケル人像的ハ射撃ノ修正ニ便ナラシムル爲之ヲ高サ一米六五、幅一米ノ標的板ノ中央ニ畫ク
第三、部隊戰鬪射撃ノ擬習ニ使用スル幕的ハ前條ニ示セル立姿的ヲ布製ト爲シ數條ノ麻繩ヲ用ヒテ之ヲ横隊或ハ散兵線ノ間隔ニ連結シ二三兵卒ノ操作ニ依リ任意ニ立姿、膝姿、伏姿高ヲ顯サシメ得ル如ク製作シタルモノトス但シ標的ノ色ハ茶褐色若クハ黑色等適宜ニ著色スヘシ

第二節　射撃用具

第四、射撃場及標的ニ附屬スル射撃用具ノ種類
一、記號板（附圖第八參照）
二、號旗、一竿ニ附シタル赤色、白色及赤白色相半スル方形ノ布ヲ以テ之ヲ造ル但シ一般ノ警戒ヲ標スルニハ大形ノ赤旗ヲ用フルモノトス（附圖第九及第十參照）
三、示號標、戰鬪射撃ニ於テ射撃ノ終始ヲ表スルニ用フルモノトス（附圖第十四參照）
四、監的鏡、監的壕或ハ掩蔽内ニ在リテ射場ノ記號ヲ視ルニ供ス（附圖第十一及第十二參照）
五、治痕竿、一竿ノ端末ニ中徑二十三珊米ノ圓板ヲ附シ其背ニ彈痕ヲ補綴スル爲一器ヲ備フ（附圖第十三參照）
六、監的用具糊壺及白色、黑色ノ治痕紙等
戰鬪射撃ニ在リテハ右ノ外彈痕圖表携帶圖板等ヲ要スルモノトス

第三節　彈藥

第五、射撃演習ノ爲毎年定員ニ由リ支給スル彈藥ノ定額左ノ如シ

一、實包ハ士官、下士、兵卒各百四十五發

二、空包ハ下士、兵卒各百二十發

三、狹窄射撃用彈藥ハ毎年初年兵ノ爲八十發、二年兵ノ爲六十發ヲ支給ス

第九章　射撃ノ記錄

第一、彈著ノ登記法ハ左ノ如シ

一、圈的、圈頭的及散兵的ノ命中點數ハ亞剌比亞數字ヲ以テ記入シ其傍ニ附點シ中心ニ關スル彈著ノ位置ヲ表示スルコト

二、人像的ニ命中シタルモノハ5トスルコト

彈著ノ位置ヲ表示スル爲附點ヲ要セス

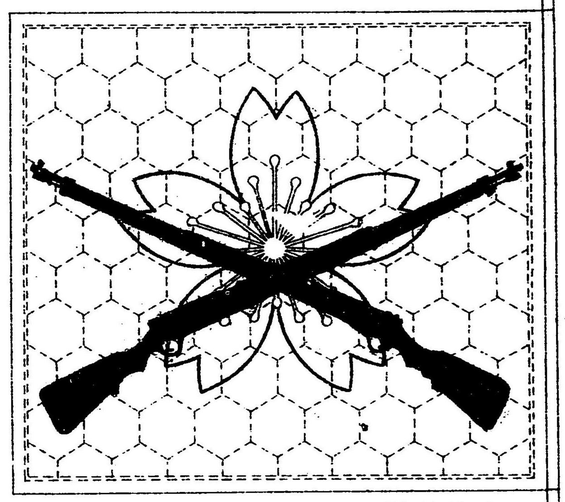
三、命中セサル射彈及跳彈ノ命中セシモノハ0ヲ以テ表示スルコト

四、合格ヲ表スルニハ十ヲ以テシ不合格ニハ一ヲ以テスルコト

中止若クハ不合格者ノ彈著ハ括弧ヲ附シ以テ更ニ施行スル同一習會ノ成績ト區別スヘシ

射撃終レハ全射彈總點數ヲ合計記入スルモノトス

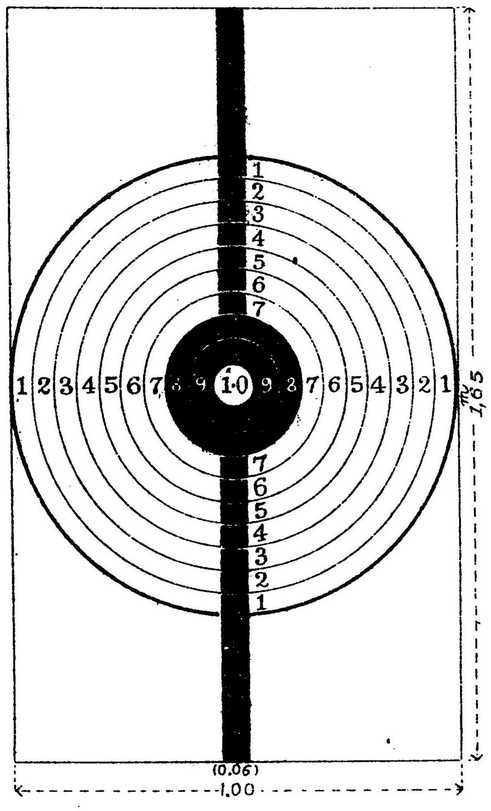
第一 射擊名譽旗



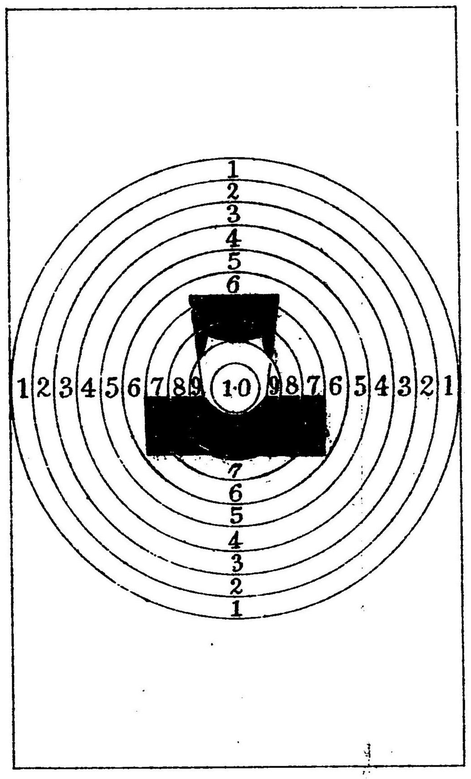
備考

一 旗章 櫻花ニ三八式歩兵銃ヲ交ユス
一 地質 飛白綿絹ニシテ絹絲ヲ以テ龜甲形ニ縫ヒ付ク
一 幅員 經壹尺四寸八分五厘横壹尺六寸五分
一 色模様及各部ノ尺度
櫻花ハ白色ノ五瓣ニシテ單瓣ト花徑中徑ヲ壹尺トシ瓣ノ上端裂部ハ壹寸三分ノ開キニ九分ノ深サヲ有ス
花心ハ中徑ヲ八分五厘トシ圓圖ヲ四十分シテ二十個ノ花蕊ヲ分出ス
花蕊ノ位置ハ横ノ中心トス
花蕊ノ長ハ其ノ大ニ二十五分中ヲ二寸小ヲ一寸五分トシ大蕊ハ中央小蕊ハ兩瓣間ニ中蕊ハ大小蕊ノ中間ニシテ雷紋ノ各尖頭ヲ各尖頭ヨリ三分五厘ノ中徑ヲ有スル丸形狀ノモノヲ付シ蕊徑花心ニ近クヨリ從ヒ漸次大ニシテ花心ノ圓圖四十分ノ一ヲ大サニモルモノトス花心共ニ黄褐色（黄金色）トシ其周圖ニ黒線ヲ畫ス
銃器ハ精巧ナル村田銃ノ形狀ヲ模ス
銃ハ原形ノ五分ノ二ヲ大ニシテ二十二度相互ニ交叉シ八銃ノ右側面ハ其ノ左側面ヲ現ハス
旗棹 中徑四分ノ圓棹ニシテ長サ四尺トシ頭ニ金箔ヲ塗リタル中徑一寸ノ球丸ヲ附ス
圖棹ハ樫木トス

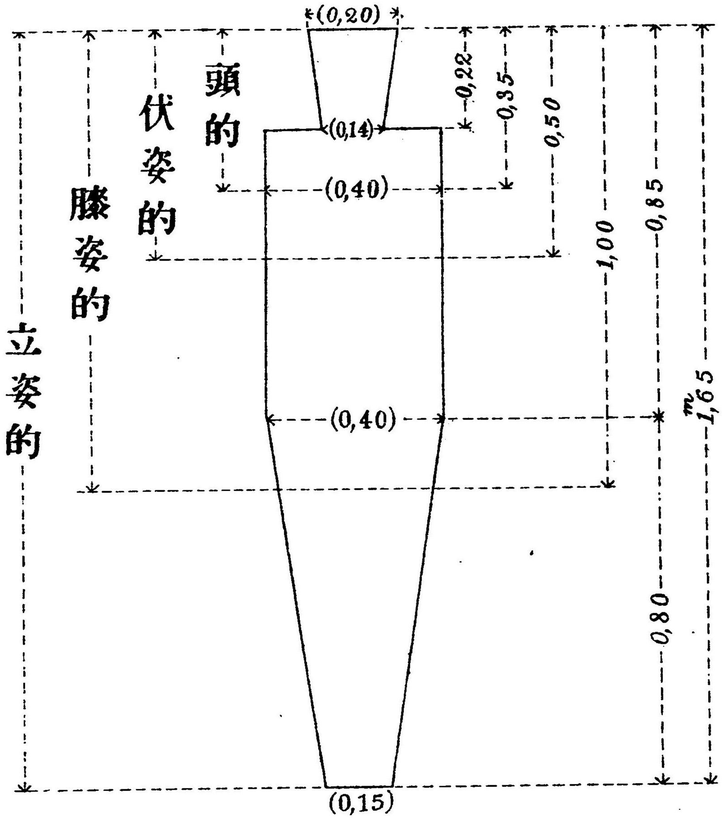
第二 的圏



第三 的頭圏



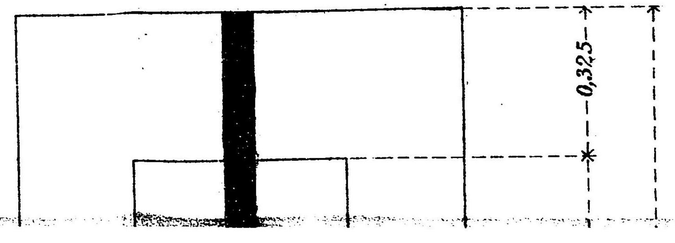
第四 人像的



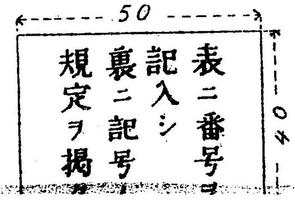
第五 照準具

第六 監的鏡

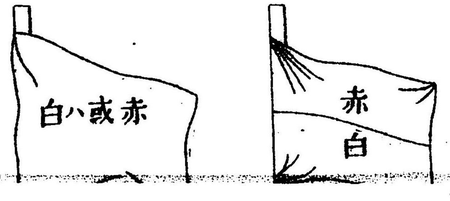
第七 試的驗



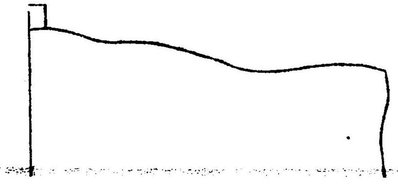
第八 記號板



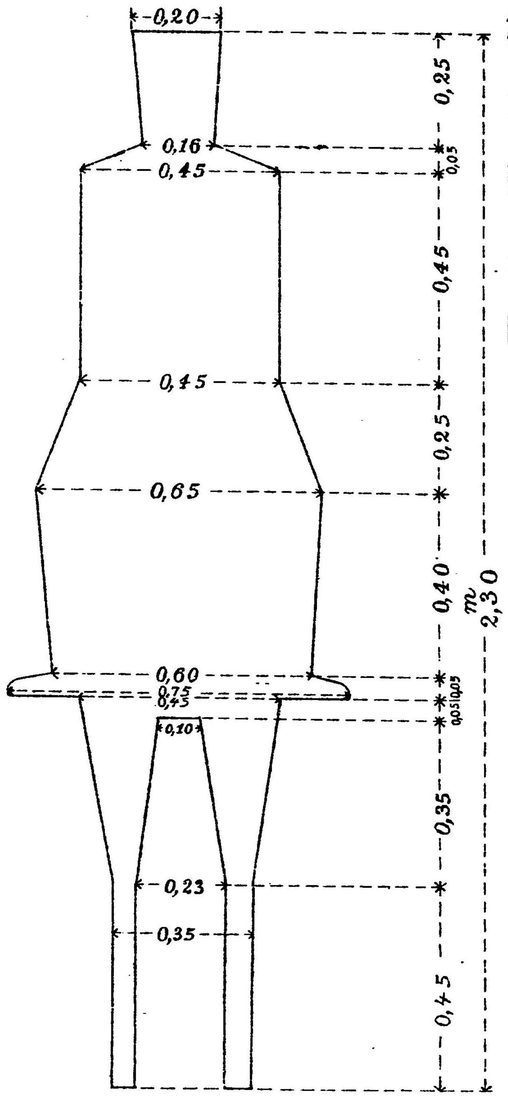
第九 號旗（小）



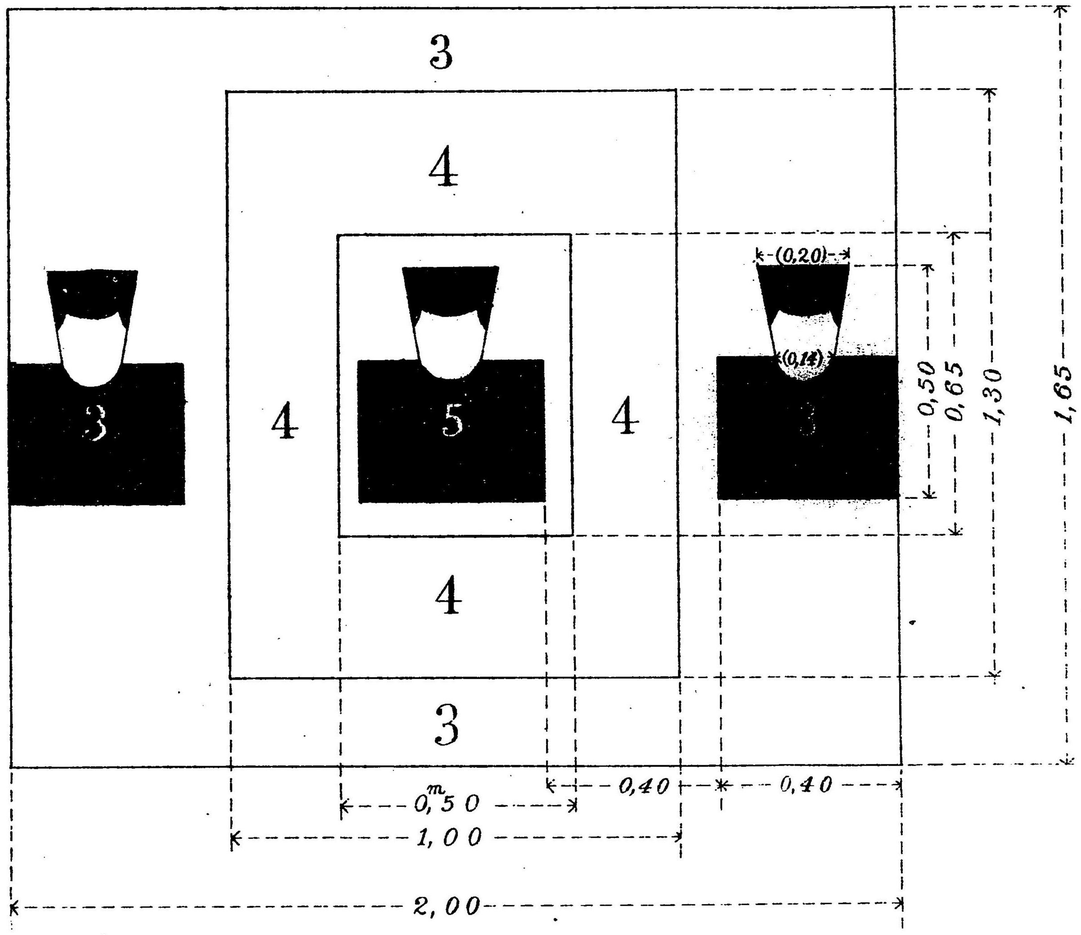
第十 號旗（大）



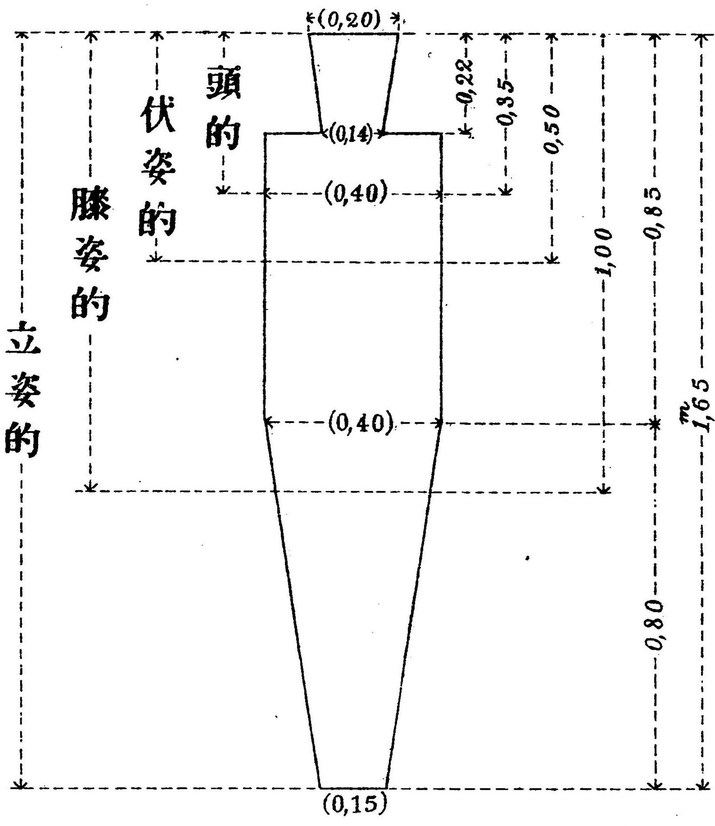
第六騎兵的



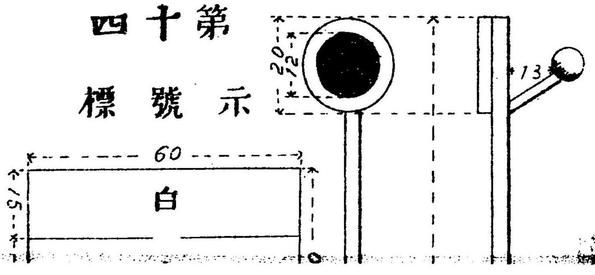
五第的兵散



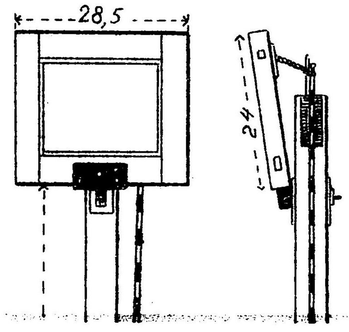
四第的像人



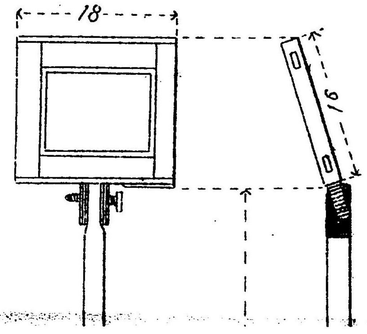
第十四標號示



第十三治痕竿

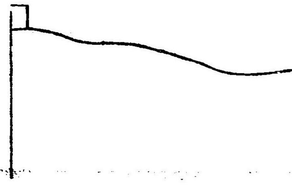


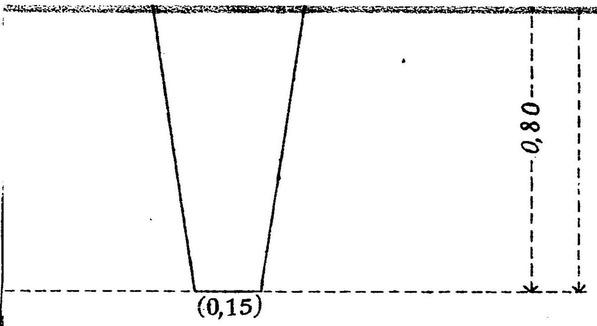
第十二複監的鏡

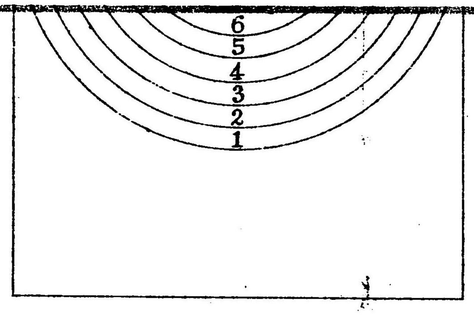


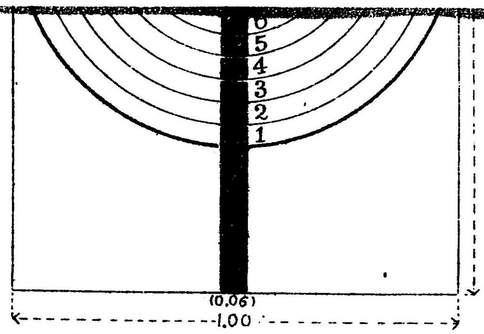
第十一監的鏡

第十號旗(大)







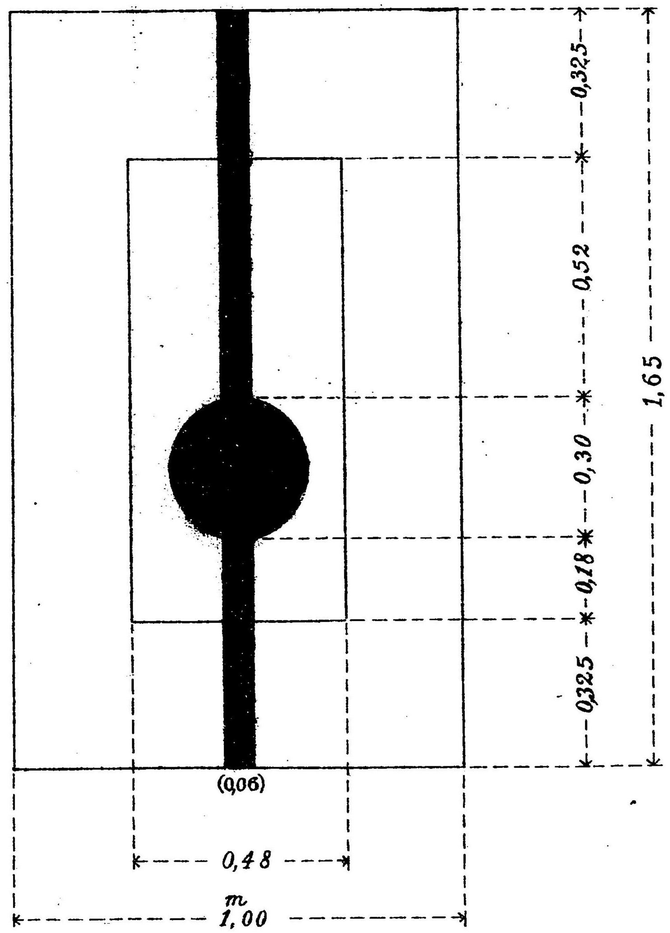


備考

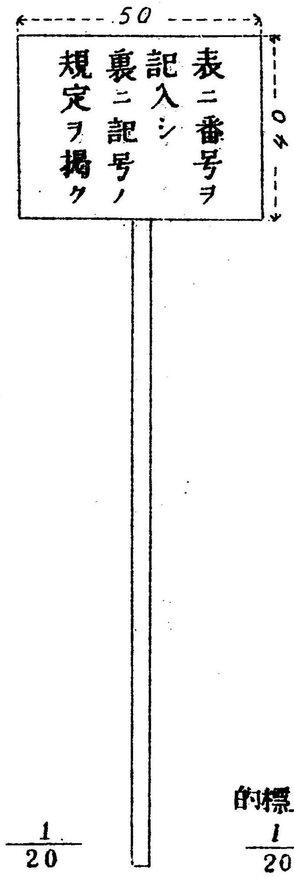
一 旗章 櫻花ニ三八式歩兵銃ヲ交ズ
一 地質 飛白織綿ニテ絹絲ヲ以テ菊形ヲ縫ヒ出ス
一 幅員 縦壹尺四寸八分五厘横壹尺六寸五分
一 色模様及各部ノ尺度

櫻花ハ白色ノ五瓣ニシテ單瓣ト花徑ハ中徑ヲ壹尺トシ瓣ノ上端裂痕ハ壹寸三分ノ闊サ二九分ノ深サヲ有ス
花心ハ中徑ヲ八分五厘トシ兩圓ヲ四十分シテ二十個ノ花蕊ヲ分出ス
花心ノ位置ハ瓣ノ中心トス
花蕊ノ長ハ其ノ大ヲ二十五分中ヲ二寸小ヲ一寸五分トシ太蕊ハ瓣ノ中央ニ小蕊ハ兩瓣間ニ中蕊ハ大小蕊ノ中間ニテ壹齊シク各尖頭三分五厘ノ中徑ヲ有スル丸形状ノモノヲ付シ葯徑花心ニ比ヘクシテ徑ハ太ヲリテ花心ノ兩圓四十分ノ太サニ充ル蕊及花心ハ共ニ黄褐色(黄金色)トシ其周圍ニ黒線ヲ畫ス
銃器ハ横掛子色トス
銃ハ原形ノ五分ニ大ニシテ二十二度相互ニ交ヌニハ銃ノ右側面ハ其左側面ヲ現ス
一 旗桿 中徑四分ノ圓桿ニシテ長サ四尺トシ上端ニ金箔ヲ塗リタル中徑二寸ノ球丸ヲ附ス
圖樣ハ縮本トス

第七 的驗試

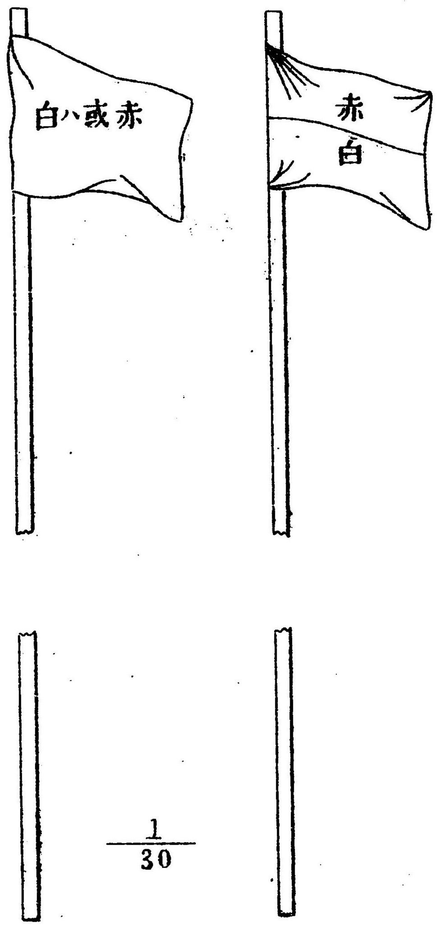


第八 記號板



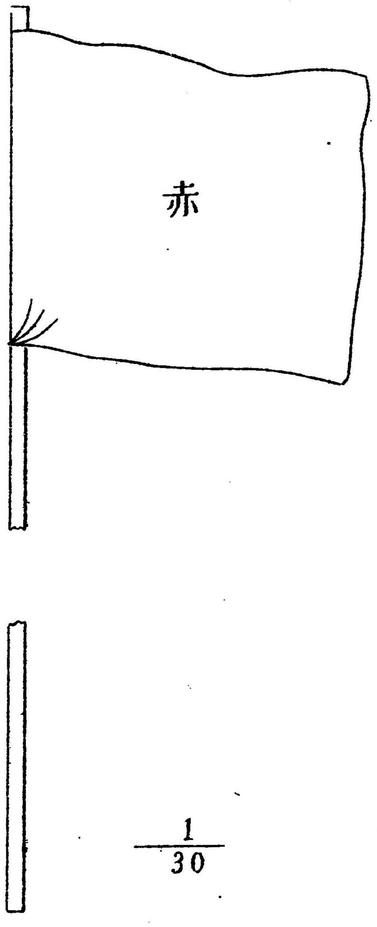
的標上尺 1/20

第九 號旗(小)



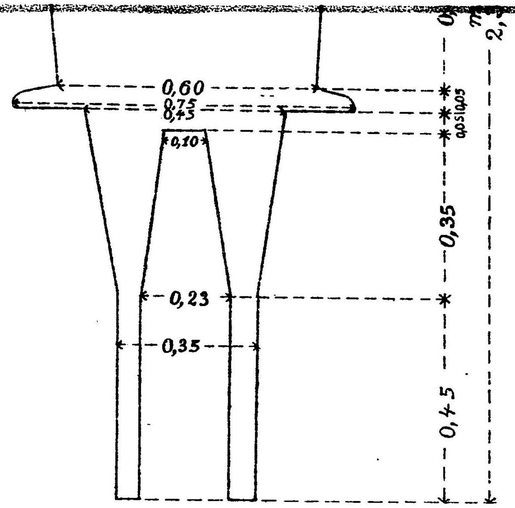
1/30

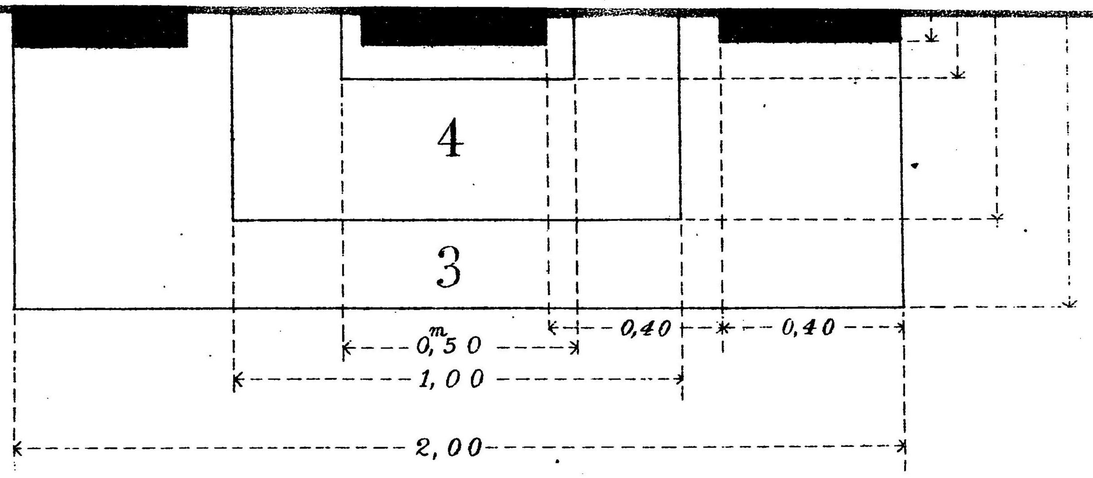
第十 號旗(大)

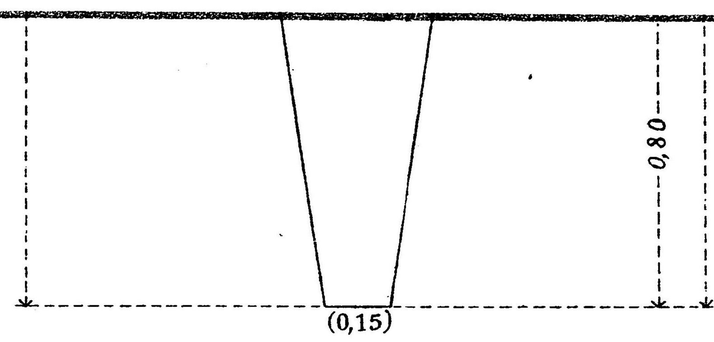


1/30

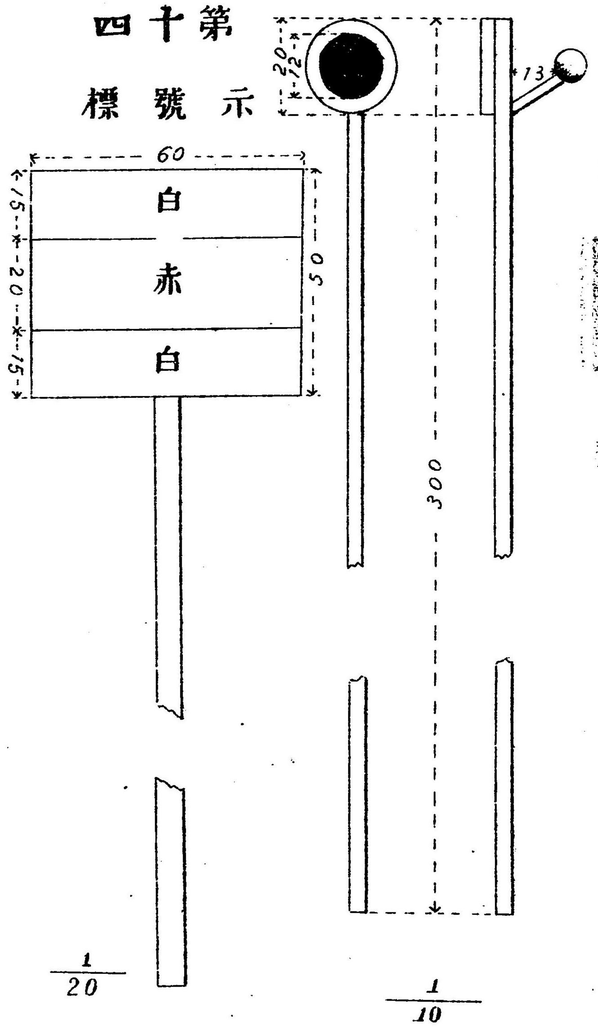
第十一 監的鏡



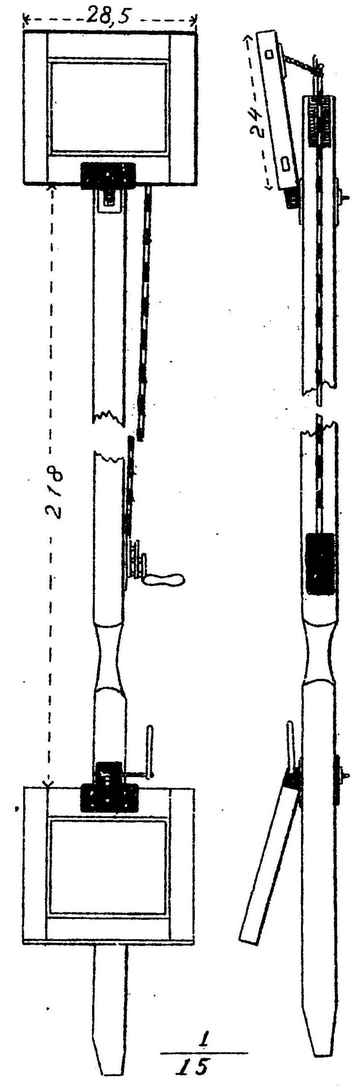




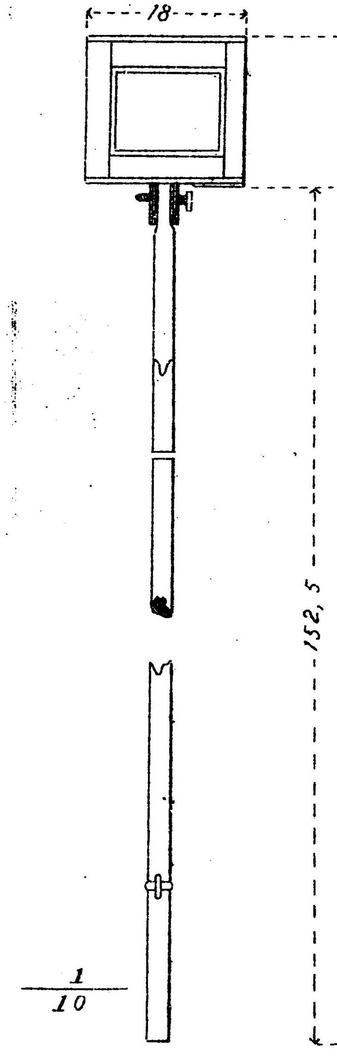
第十四 標號示



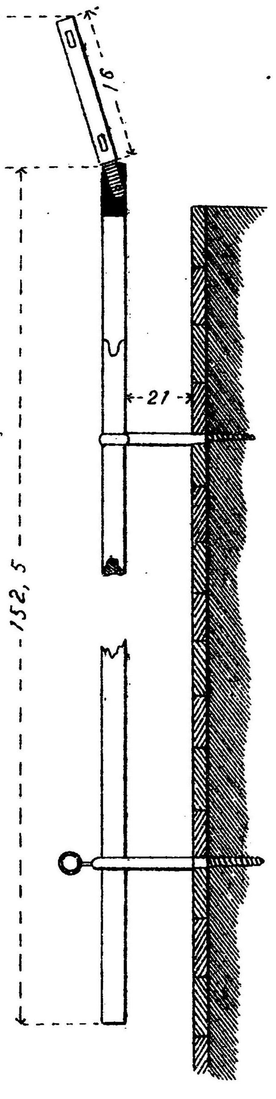
第十三 治痕竿



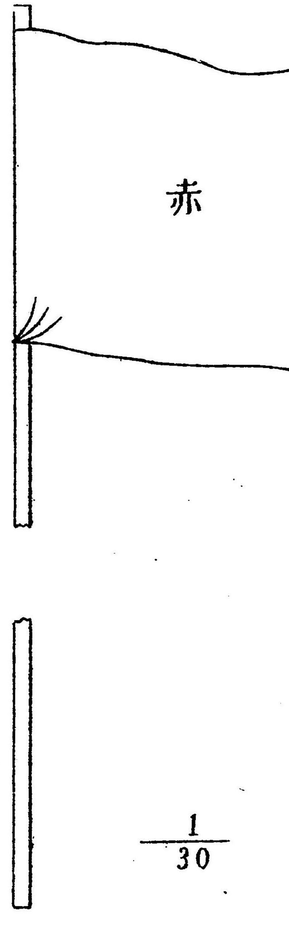
第十二 複監的鏡

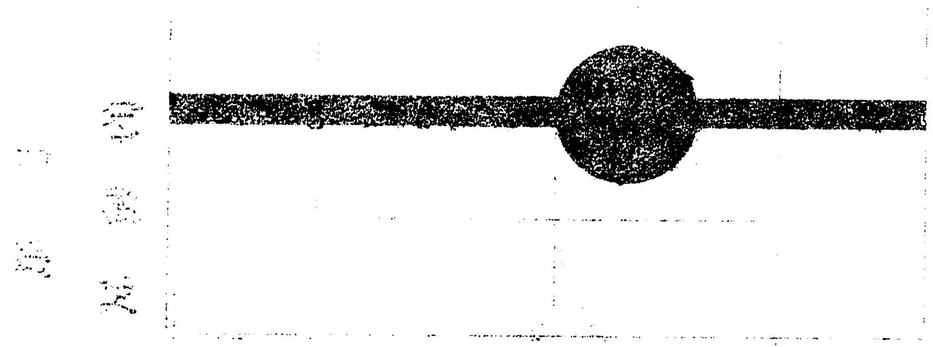


第十一 監的鏡



第十 (大)旗號





下士官兵學科教程

體操教範

目次

第一章　總則……三
第二章　第一部徒手體操……四
第一節　一般ノ規則……四
第二節　第一教……七
第三節　第二教……八
第四節　第三教……一〇
第五節　第四教……一一

第三章　第二部機械體操……一四
第一節　一般ノ規則……一四
第二節　第一教……一四
第三節　第二教……一七
第四節　第三教……二四
第四章　第三部應用體操……三二
第一節　一般ノ規則……三五
第二節　第一教……三六
第三節　第二教……三七
……四一

下士
上等兵　學科教程體操教範目次　終

體操教範

第一章　總則

第一、體操ハ體力及身力ヲ養成スルヲ以テ目的トス

第二、體操ヲ分テ三部トス

一、第一部　徒手體操
二、第二部　器械體操
三、第三部　應用體操

第三、中隊附下士ハ兵卒ヲシテ體操ノ目的ヲ知ラシメ自ラ好ミ且進テ之ヲ行フノ念ヲ喚起セシメサルヘカラス之カ爲常ニ自ラ率先シテ正確ナル模範ヲ示スヲ要ス

第四、諸規定ハ嚴確ニ之ヲ履行シ總テ巧飾ニ渉ルカ如キハ嚴禁トス

第五、身體ノ各部ハ均一ニ發育セシムルコト最必要ナリ故ニ適當ニ器械及ヒ運動ヲ交換シ又同一ノ運動ヲ行フ時間ノ適度ナルヲ要ス

第二章

第一部　徒手體操

第一部　一般ノ規則

第一、徒手體操ハ體力ヲ發達セシメ健康ヲ保全シ各機關ノ機能ヲ完全ニシ成育ノ不正ヲ矯正シテ軍人ノ姿勢ヲ得セシメ且動作ヲ敏活ナラシムルヲ以テ目的トス

第二、徒手體操ハ初メ各個ニ敎育シ習熟スルニ至リ部隊ヲ以テ行ハシムヘキモノトス

第三、運動ヲ行ハシムルニハ模範ヲ示シ豫令ヲ下シテ準備セシメ「始メ」ノ號令ヲ以テ之ヲ行ハシム又之ヲ止メシムルニハ「止メ」ノ號令ヲ下スモノトス

第四、總テ號令ヲ以テ執リタル準備姿勢ハ「止メ」ノ號令ニテ舊位ニ復スヘキモノトス

第五、「始メ」ノ號令ヨリ「止メ」ノ號令アルマテ一動毎ニ高聲且活潑ニ呼唱(一、二、三等)セシムヘキモノトス又運動ノ種類ニ由リ呼唱ヲ止メ若クハ之ニ換フルニ深呼吸ヲ以テスルコトヲ得

第六、運動ヲ行ハシムルニ當リテハ豫メ適當ノ距離間隔ヲ取ラシムヘシ

第七、臂ノ運動ニ在リテハ第一ノ擧動ト同時ニ手ヲ握リ拇指ヲ中指ノ上ニ置キ終リノ擧動ニテ之ヲ開キ諸指ヲ揃ヘテ伸シ掌ヲ股ニ接セシム但第二十ノ動作ハ手ヲ握ラサルモノトス

頭、體及脚ノ運動ニ在リテハ豫令ニテ手ノ拇指ヲ後ニ他ノ諸指ヲ前

ニ揃ヘテ臍骨上ニ接着シ肘ヲ齊シク側方ニ出サシム

第八、頭ノ運動ニ在リテハ其運動ヲ體ニ及ホササル如クセシム

第九、臂ヲ前方ニ出シタルトキハ之ヲ水平ニシテ肩幅ニ開キ爪ヲ對向セシム

第十、臂ヲ左右ニ開キタルトキハ之ヲ水平ニシテ爪ヲ下方ニ向ケシム

第十一、臂ヲ上方ニ上ケタルトキハ之ヲ垂直ニシテ爪ヲ對向セシム

第十二、體ノ運動ニ在リテハ足ノ位置ヲ變セス又膝ヲ屈スルコトナク頭ハ體ノ運動ニ從ハシム

第十三、脚ノ運動ニ在リテハ其運動ヲ上體ニ及ホスコトナク又足ヲ下スニハ足尖ヨリシ踵ヲ下スニハ地面ニ接着セシメサル如クス

第十四、運動ノ速度ヲ

一、速擧動（一分時間約六十擧動）

二、遲擧動（一分時間約三十擧動）

ノ二種ニ分ツ而シテ第一教及第二教ノ運動ハ遲擧動トシ第二教及第四教ノ運動ハ速擧動トス

未熟ノ間ハ總テ擧動ヲ遲クシテ動作ノ正確ヲ圖ルヘシ然レトモ速擧動ヲ以テ行フヘキ運動ハ其ノ動作最活潑敏捷ナルヲ要ス

第二節　第一教

第十五、第一運動　頭を右左（ミギヒダリ）に旋（マハ）せ

第一動　頭ヲ十分右方ニ旋ラスコト

第二動　頭ヲ十分左方ニ旋ラスコト

第十六、第二運動　頭を前後（ゼンゴ）に曲（マ）げ

第一動　頭ヲ十分前方ニ曲クルコト

第二動　頭ヲ十分後方ニ曲クルコト

第十七、第三運動　頭を右左（ミギヒダリ）に曲（マ）け

第一動　頭ヲ十分右方ニ曲クルコト

第二動　頭ヲ十分左方ニ曲クルコト

第三節　第二教

第十八、第一運動　臂(ウデ)ヲ前(マエ)(右左(ミギヒダリ))(上(ウエ))ニ動(ウゴカ)セ

第一動　臂ヲ伸シテ前方ニ出ス(左右ニ開ク)(上方ニ上クル)コト

第二動　臂ヲ伸シタル儘舊位ニ下スコト

第十九、第二運動　臂(ウデ)を前(マエ)(後(アト))より旋(マワ)せ

第一動　踵ヲ上ケツツ臂ヲ伸シテ前(後)ヨリ成ルヘク大圓形ヲ畫ク如ク旋回シテ踵ヲ下スコト

第二動　第一動ニ同シ

第二十、第三運動　前臂(マエウデ)を平(タイラ)に動(ウゴカ)せ

第一動　臂ヲ伸シテ前方ニ出スコト

第二動　前臂ヲ水平ニシテ臂ヲ屈シ體ニ近ク肘ヲ十分後方ニ引キ其餘勢ニテ再ヒ前方ニ出スコト

第二十一　第四運動　臂(ウデ)を屈(マ)け前(マエ)に伸(ノバ)せ

第一動　肘ヲ側方ニ張リ拳ヲ屈シ手甲ヲ内方ニ旋ラシツツ股ヨリ腋下ニ擦リ上ケ速ニ之ヲ前方ニ向ケ肘ヲ下ケテ下腋ニ接着スルコト

第二動　臂ヲ前ニ突キ伸スコト

第三動　第二十ノ第三動ニ同シ

第二十二、第五運動　臂(ウデ)を前(マエ)より屈(マ)げ

第一動　第二章第二十ノ第一動ニ同シ

第二動　臂ヲ屈シ拳ヲ十分内方ヨリ後方ニ旋ラシヲ肩ヲ兩側ニ來シ之ヲ約頤ノ高サニシ前臂ヲ垂直ニシテ兩肩ヲ退クコト

第三動　肘ヲ肩ノ高サニ上ケテ少シク退ケ拳ヲ屈シ肩ニ近ク殆ント之ト同高ニシテ下方ニ向クルコト

第四動　拳ヲ乳ノ外側ヨリ舊位ニ突キ下スコト

第四節　第三教

第二十三　第一運動　體（タイ）を右左（ミギヒダリ）に旋（マハ）せ

第一動　上體ヲ十分右方ニ旋ラスコト

第二動　上體ヲ十分左方ニ旋ラスコト

第二十四　第二運動　體（タイ）を右左（ミギヒダリ）に曲（マゲ）げ

第一動　上體ヲ十分右方ニ曲クルコト

第二動　上體ヲ十分左方ニ曲クルコト

第二十五　第三運動　體（タイ）を前後（ゼンゴ）に曲（マゲ）げ臂（ウデ）を上（ウヘ）に動（ウゴカ）せ豫令ニテ手ヲ臗骨上ニ接着セス

第一動　體ヲ十分前方ニ曲ケ臂ヲ伸シテ拳ヲ殆ント足尖前ノ地上ニ接スルコト

第二動　體ヲ起シテ十分後方ニ曲ケ臂ヲ伸シタル儘上方ニ上ケテ垂直ニスルコト

第三動　體及臂ヲ舊位ニ復スルコト

第五節　第四教

第二十六　第一運動　踵（カカト）を上（ア）げ

第一動　踵及膝ヲ離スコトナク踵ヲ十分高ク上クルコト

第二動　踵ヲ舊位ニ復スルコト

此運動ハ遲擧動ニテ行フコトヲ得

第二十七　第二運動　脚（アシ）を前（マヘ）に屈（マ）げ

第一動　左股ヲ前方ニ十分高ク上ケ脛ヲ垂直ニシ足尖ヲ下ニ向クルコト

第二動　左脚ヲ伸シテ足尖ヨリ舊位ニ復スルコト

第三第四動　右脚ニテ左脚ノ如ク行フコト

此運動ハ習熟スルニ從ヒ二動ヲ以テ行フ

第二十八　第三運動　脚（アシ）を前（マヘ）（右左（ミギヒダリ））に上（ア）げ

第一動　左脚ヲ伸シタル儘前方(側方)ニ十分高ク上ケ足尖ヲ上ニ向ケ直ニ舊位ニ復スルコト

第二動　右脚ニテ左脚ノ如ク行フコト

第二十九、第四運動　脚(アシ)を前(マヘ)(後(アト))より旋(マハ)せ

第一動　左脚ヲ伸シタル儘大圓形ヲ畫ク如ク前(後)ヨリ外方ニ旋ラシテ舊位ニ復スルコト

第二動　右脚ニテ左脚ノ如ク行フコト

第三十、第五運動　脚(アシ)を前(マヘ)に伸(ノバ)せ

第一動　左股ヲ前方ニ殆ント水平ニ上ケ脛ヲ垂直ニシテ足尖ヲ下ニ向ケルコト

第二動　左脚ヲ伸シ足尖ヲ上ニ向クルコト

第三動　左脚ヲ伸シタル儘舊位ニ復スルコト

第四第五第六動　右脚ニテ左脚ノ如ク行フコト

第三十一、第六運動　脚(アシ)を前(マヘ)より後(アト)へ伸(ノバ)せ

第一動　第三十ノ第一動ニ同シ

第二動　左脚ヲ後方ニ伸シ足尖ヲ前ニ向クルコト

第三動　左脚ヲ第一動ノ位置ニ復スルコト

第四動　左脚ヲ伸シテ足尖ヨリ舊位ニ復スルコト

第五、第六、第七、第八動　右脚ニテ左脚ノ如ク行フコト

此運動ハ習熟スルニ從ヒ四動ヲ以テ之ヲ行フ

第三十二、第七運動　踵(カカト)を上(アト)げ脚(アシ)を屈(マ)け

第一動　第二十六ノ第二動ニ同シ

第二動　脚ヲ足尖ノ方向ニ矩形ニ屈スルコト

第三動　脚ヲ伸シ勉メテ其内部ヲ接着スルコト

第四動　第二十六第二動ニ同シ

第三十三、第八運動　脚(アシ)を屈(マ)げ臂(ウデ)を前(マヘ)に動(ウゴカ)せ

豫令ニテ手ヲ膕骨上ニ接着スルコトナク足尖ヲ閉ツ

第一動踵ヲ上ケ膝ヲ接着シタル儘脚ヲ十分屈シ臂ヲ伸シテ前方ニ出スコト

第二動　起立シテ臂ヲ伸シタル儘舊位ニ下スコト

第三章　第二部　機械體操

第一節　一般ノ規則

第一、器械體操ハ筋力ヲ勒強ニシ身體ヲ輕捷ナラシメ活潑勇敢ノ氣象ヲ養成スルヲ以テ目的トス然レトモ此演習ニ於テ第一部ニ示セル目的ヲ達スヘキコトニ注意スヘシ

第二　兵卒ニ教育スヘキ科目ハ概ネ第一教及第二教トシ第三教ハ上等兵以上及候補者ニ教授スヘキモノトス

第三、器械體操ハ號令ヲ用フルコトナク模範ヲ示シテ各個ニ教育スヘキモノトス

第四、第一教中鐵棒、横木、棚、楷梯、弔鎖ニ於ケル運動ハ漸次數回續行シ得ルニ至ラシムヘシ

第五、運動ノ要領略相同シキモノハ孰レノ器械ニ在リテモ之ヲ行ハシムルコトヲ得

第六、運動ハ一動毎ニ活潑ニ呼唱セシムルモ妨ナシ

第七、教官ハ演習ヲ初ムルニ先チ敷砂ノ硬軟及器械ノ損否ヲ檢シ又演習中屢々敷砂ヲ掘リ返サシムルコトニ注意スヘシ

第八、教官ハ兵卒ヲシテ運動ヲ容易ニシ且外傷ヲ被ラシメサル爲適當ニ之ヲ幇助シ要スレハ豫メ教育シタル兵卒ヲシテ幇助ノ助手ヲナサシムヘシ

第九、幇助法ハ器械及運動ノ種類並ニ其時機ニ隨ヒ豫メ一定シ難シト

雖モ概ネ左ノ方法ニ據ルヲ良トス

幇助者ハ概ネ兵卒ノ側方ニ位置シテ脚ヲ踏ミ開キ終始其運動ヲ注視シアルヲ要ス

幇助ヲナスニハ通常手ヲ以テ兵卒臂若シクハ脚ヲ執リ成ルヘク其動作ヲ容易ナラシムヘシ然レトモ之カ爲其動作ヲ拘束セサルコトニ注意スルヲ要ス

跳越、跳下等ノ運動ニ在リテハ手ヲ其背、臂若クハ腋下ニ添ヘテ之ヲ幇助ス

器械上ニ身體ヲ上ケル運動ニ在リテハ手ヲ其腰、臀若クハ脚ニ添ヘテス之ヲ幇助ス

轉回ノ運動ニ在リテハ手ヲ其肩、襟若クハ臀ニ添ヘテ之ヲ幇助ス器械ニ弔垂シテ行フヘキ運動ニ在リテハ手ヲ其脚或ハ臀ニ添ヘテ之ヲ幇助ス

梁木上ノ通過ニアリテハ前方ヨリ誘導シ或ハ後方ヨリ之ヲ幇助ス

第十、身體ヲ器械ニ弔垂シ或ハ之ヲ支持スル運動ニ在リテハ通掌手ヲ肩幅ニシテ脚及足尖ヲ接着ス然レトモ特ニ規定シタルモノハ此限リニアラス

第十一、體ヲ飛揚スル爲脚ヲ屈シ足尖ニテ地ヲ蹴ルヲ踏切（フミキリ）ト謂ヒ又臂ヲ伸シ之ニ依リテ體ヲ器械上ニ支持シタル姿勢ヲ臂立ト謂フ

第十二、地上ニ下ルニハ足尖ヨリ地ニ着ケ第二章第三十三第一動ノ姿勢（臂ヲ殆ント伸シ肩幅ヨリ僅ニ一躍シタル後同上第二動ノ要領ニ準シテ起立シ足尖ヲ開ク第二節　第一款

第十三、懸垂（ケンスイ）　其一、鐵棒、横木、棚

第一動鐵棒（横木）（棚）ノ下ニ立チ臂ヲ後方ニ振リ眼ヲ鐵棒（横木）

（棚）ニ注キテ踏切ヲナスコト

第二動手甲ヲ後（前）ニシテ鐵棒（横木）（棚ノ邊端）ヲ握リ臂ト脚ヲ伸シ體ヲ眞直ニシテ足尖ヲ垂ルヽコト

此運動ハ習熟スルニ從ヒ一動ヲ以テ行フコトヲ得

第十四、肘（ヒヂ）屈

第一動懸垂ニアリシトキ臂ヲ屈シテ體ヲ引キ上ケ輕ク上臂ヲ腋ニ接シ脚ヲ少シク前ニ出スコト

第二動徐ニ臂ヲ伸シ懸垂ニ復スルコト

第十五、轉（テン）回（クワイ）

第一動懸垂ニアルトキ脚ヲ上ケ徐ニ兩臂間ヲ通過セシメ體ヲ十分下ケテ足尖ヲ垂ルヽコト

第二動臀部（ヅウ）ヨリ漸次懸垂ニ復スルコト

第十六、横行（コウ）

第一動鐵棒（横木）（棚）ノ一端ニ於テ肘屈第一動ノ姿勢ニアルトキ右（左）手ヲ左（右）方ニ移シテ約兩手間ノ中央ヲ握ルコト

第二動左（右）手ヲ左（右）方ニ移シテ肩幅ニスルコト

此運動ハ一端ヨリ他端ニ到リ或ハ往復ス

第十七、脚（アシ）擧（アゲ）

第一動懸垂ニアルトキ少シク臂ヲ屈スルコト

第二動脚ヲ屈スルコトナク殆ント股ノ鐵棒（横木）、棚ノ邊端）ニ接スルマデ之ヲ上クルコト

第三動徐ニ足尖ヨリ下シテ臂ヲ伸シ懸垂ニ復スルコト

第十八、降（コウ）下（カ）

第一動懸垂ニアルトキ少シク臂ヲ屈シテ體ヲ引キ上ケ脚ヲ屈シテ手ヲ放ツコト

第二動地上ニ下ルコト

其二、跳越臺

第十九、跪坐跳

第一動横側ヨリ駈ケ來リ約半歩ノ處ニテ踏切ヲナシ手ヲ臺上ニ置キ體ヲ支ヘ脚ヲ屈シテ兩手間ニ跪坐シ臂ヲ前方ニ出スコト

第二動體ヲ前ニ傾ケ臂ヲ後方ニ振リ再ヒ之ヲ前方ニ振リ上ケ俄ニ脚ヲ伸シ體ヲ飛揚シテ前方ニ跳フコト

第三動地上ニ下ルコト

第二十、跳乘

第一動縦側ヨリ駈ケ來リ約半歩ノ處ニテ踏切ヲナシ脚ヲ開キ手ヲ遠ク臺上ニ置キ體ヲ支フルコト

第二動徐ニ臀部ヲ下シテ臺上ニ跨ルコト

第二十一、腰懸跳

第一動横側ニ面シ脚ヲ伸シテ臺上ニ淺ク腰又懸ケ手ヲ股ノ側ニ置キ

脚ヲ屈シ足尖ヨリ強ク蹴リ出シ手ヲ以テ臺上ヲ押シ十分前方ニ跳フコト

第二動地上ニ下ルコト

其三、跳下臺

第二十二、跳下

第一動楷段上ニ立チ其邊端ヨリ僅ニ足尖ヲ前ニ出シ體ノ上部ヲ前ニ傾ケ臂ヲ後方ヨリ前方ニ振リ出シテ踏切ヲナシ遠ク前方ニ跳フコト

第二動地上ニ下ルコト

其四、跳繩

第二十三、幅(高)跳

第一動指定ノ距離ヨリ駈ケ來リ右(左)足尖ニテ踏切ヲナシ臂ヲ前方ニ振リ出シ(振リ上ケ)前方ニ(高ク)跳ヒ繩ヲ跳越スルコト

第二動地上ニ下ルコト
此運動ハ停止間ニ於テモ亦行ハシム然ルトキハ第二十二ノ要領ニ準ス

其五、梯　梯

第二十四、屈伸
第一動梯級ヲ握リ腰ヲ曲ケ二梯級若クハ三梯級ヲ隔テ下方ノ梯級ニ足尖ヲ懸ケ臂、腰及脚ヲ伸シテ梯級ニ近ク體ヲ引キ上クルコト
第二動、臂及脚ヲ伸シタル儘腰ヲ曲ケテ體ヲ十分低下スルコト

第二十五、登降
第一動梯柱ヲ輕ク握リ左足ニテ第一梯級ヲ踏ミ手ヲ滑走シテ上方ニ移スコト
第二動第一動ノ要領ニ準シ左足ニテ第二梯級ヲ踏ムコト
此ノ如ク連續シテ登リ又同要領ヲ以テ降ル

背面向ヲ以テ降ラシムルコトヲ得然ルトキハ少シク體ヲ反ラシ臂ヲ後方ニ伸シテ手ヲ梯柱ニ添ヘシムルモノトス

其六、弔　鐶

第二十六、振動
第一動懸垂ニアルトキ腰ヲ屈シテ脚ヲ十分前方ニ振リ上ケ足尖ヲ手ニ近ツクルコト
第二動脚ヲ十分後方ニ振リ腰ヲ反ラスコト

其七、弔棒(索)

第二十七、登降
此運動ヲ行フニハ弔棒(索)ノ側ラニ立チ高ク棒(索)ヲ握リ臂ヲ屈シテ體ヲ引キ上ケ脚ヲ伸シタル儘斜前方ニ開カシム
第一動下方ノ手ヲ移シテ他ノ手ノ上方ヲ握ルコト
第二動第一動ニ同シ

此ノ如ク連續シテ登リ又同要領ヲ以テ降ル

此運動ハ兩脚ヲ棒(索)ニ纏繞シテ行ハシムルコトヲ得

其八、梁木(ハヤアシクグリ)速歩通過

第二十八、梁木上ノ一端ニ立チ頭ヲ眞直ニシ眼ヲ他端ニ注キ速歩行進ノ要領ニ從ヒ足ヲ輕ク踏ミ着ケ成ルヘク器械ノ振動セサル如ク通過セシム初メニ在リテハ梁木上ニ跨リテ通過セシメ或ハ緩ナル速度ニ依リ臂ヲ殆ント伸シテ左右ニ開キ手ヲ輕ク握リテ通過セシムルヲ良トス

第三節　第二教

其一、鐵棒(アンカケアガリ)脚懸上

第二十九、第一動懸垂ニアルトキハ臂ヲ伸シタル儘腰ヲ屈メ脚ヲ上ケテ鐵棒ニ近ツケ右(左)脚ヲ開キ其腿ヲ右(左)手ノ外側ニテ鐵棒ト直角ニ鉤ス

ルコト

第二動腿ヲ脫スルコトナク鐵棒ヲ軸トシ他ノ脚ヲ伸シタル儘前方ヨリ後方ニ振リ體ヲ鐵棒上ニ上ケルコト

第三動右(左)脚ヲ伸シテ鐵棒ヨリ脫シ臂立ヲナスコト

第三十、肘懸上(ヒヂカケアガリ)

第一動蹈臺ヨリ踏切ヲナシ左(右)手ニテ鐵棒ヲ握リ同時ニ右(左)手ノ內肘ヲ鐵棒ニ鉤シテ體ヲ弔垂(前方ニ振出)スルコト

第二動臂ニ力ヲ加ヘ體ヲ引キ上ケ(後方ニ振リ返シ)少シク腰ヲ退ケ脚ヲ前ニ出シテ鉤シタル臂ヲ起シ爪ヲ上ニ向ケ上體ヲ眞直ニ鐵棒ニ支持スルコト

第三動腹部ヲ鐵棒ニ托シ臂立ヲナスコト

此運動ハ兩肘同時ニ鐵棒ニ鉤シテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

第三十一、尻上(シリアガリ)

第一動懸垂ニアルトキ少シク臂ヲ屈クスルコト
第二動臂ニ力ヲ加ヘ腰ヲ曲ケ脚ヲ伸シタル儘體ヲ鐵棒ノ下ニ引キ上ケ上體ヲ起シ臂立ヲナスコト

第三十二、俯下

第一動臂立ニアルトキ少シク臂ヲ屈シ徐ニ上體ヲ俯シ漸次臂ヲ伸シ脚ヲ屈スルコトナク足尖ヲ鐵棒ニ近ツクルコト
第二動徐ニ脚ヲ下シテ懸垂ヲナスコト

第三十三、後下

第一動臂立ニアルトキ徐ニ臂ヲ屈シツツ輕ク之ヲ腋ニ接シ脚ヲ少シク前ニ出シ肘屈ヲナスコト
第二動徐ニ臂ヲ伸シ懸垂ヲナスコト

第三十四、振跳

第一動臂立ニアルトキハ脚ヲ屈スルコトナク體ヲ反ラシテ後方ニ振

ルコト
第二動腰ヲ曲ケ體ヲ下ケ足尖ヲ鐵棒ニ近ツケテ蹴リ出スト同時ニ鐵棒ヲ引キ放チ體ヲ十分反ラシテ遠ク地上ニ下ルコト
此運動ハ踏臺ヨリ跳ヒ附クト同時ニ之ヲ行ハシムルコトヲ得

其二、横木

第三十五、側面上

第一動横木等高ニシテ肩ノ高サ以上ナルトキ横木ノ中間ニ立チ内方ヨリ兩横木ヲ握リ脚ヲ上ケテ腦ヲ横木ニ鉤スルコト
第二動前臂ヲ逐次横木上ニ上ケ臂ニ力ヲ加ヘ體ヲ起スト同時ニ腦ヲ脫シテ臂立ヲナスコト
此運動ハ兩横木肩ノ高サ以下ナルトキハ地上ヨリ踏切ヲ以テ直ニ臂立ヲナスモノトス

第三十六、振出

第一動側面上ニアルトキ脚ヲ前(後)方ヨリ後(前)方ニ振リ上クルコト

第二動脚ヲ前(後)方ニ振リ上ケ右(左)手ノ前(後)ヨリ横木ヲ越ユルコト

第三動右(左)手ヲ放チ左(右)手ヲ他ノ横木ニ移シテ地上ニ下ルコト

第三十七、蹴上(ケアガリ)

第一動兩横木ノ高サ不等ナルトキ高横木ニ弔垂シ少シク體及脚ヲ前ニ出スコト

第二動臂及脚ヲ屈スルコトナク腰ヲ曲ケテ引キ上ケ足尖ヲ低横木ニ懸ケ體ヲ十分下クルコト

第三動足尖ニテ低横木ヲ蹴リ臂ニ力ヲ加ヘ體ヲ引キ上ケ足尖ヲ離シテ高横木ニ臂立ヲナスコト

第三十八、振込(フリコミ)

第一動高横木上臂立ニアルトキ下腹ヲ高横木ニ托シ右(左)手ノ拇指ヲ内方ニシテ握リ換ヘ左(右)手ヲ以テ齊シク低横木ヲ握ルコト

第二動臂ニ力ヲ加ヘ脚ヲ伸シテ斜ニ振リ上ケ體ヲ左(右)方ヨリ兩横木間ニ振リ込ムコト

第三動左(右)手ノ前ヨリ低横木ヲ越エ手ヲ放チテ地上ニ下ルコト

第三十九、跳越(トビコシ)

第一動單横木ヲ上ヨリ握リ強ク踏切ヲナシ少シク體ヲ前ニ傾ケ脚ヲ屈シ右(左)方ヨリ横木ヲ越エ同時ニ右(左)手ヲ以テ横木ヲ押シ放ツコト

第二動左(右)手ヲ横木ニ添ヘテ地上ニ下ルコト

此運動ハ臂立ヨリ之ヲ行ハシメ又習熟スルニ從ヒ兩手ヲ同時ニ押シ放チ正面向ニ行ハシムルコトヲ得

其三、跳越臺（ヨコトビ）

第四十、橫（ヨコ）跳（トビ）

第一動橫側ヨリ駈ケ來リ若クハ停止ノ儘適當ノ處ニテ踏切ヲナシ掌ヲ臺上ニ置キ脚ヲ屈シ（脚ヲ伸シテ左右ニ開キ）臂ニ力ヲ加ヘテ押シ放チ遠ク前方ニ跳ヒ越スコト

第二動地上ニ下ルコト

其四、棚上（アガリ）

第四十一、尻（シリ）

第一動棚ニ背シテ懸垂ニアルトキ少シク臂ヲ屈スルコト

第二動臂ニ力ヲ加ヘ腰ヲ曲ケ脚ヲ伸シタル儘體ヲ棚ノ上ニ引キ上ケ頭ヲ起シ臂及腰ヲ伸スコト

第三動脚ヲ屈シ少シク足ヲ進メテ棚ノ上ニ立ツコト

第四十二、腰懸跳（コシカケトビ）　第二十一ニ準ス

第四十三、棒跳下（ボウトビオリ）

此運動ヲ行フニハ階段ノ一端ニ立チ僅ニ足尖ヲ前方ニ出シ臂ヲ伸シ手ヲ接シテ棒ノ上端ヲ握ラシムル儘左右ニ開クコト

第一動輕ク邊端ヲ蹴リ脚ヲ伸シタル儘左右ニ開クコト

第二動棒ノ前方ニ傾キ（約四十五度）タルトキ強ク棒ヲ押シ放チ前方ニ下ルコト

其六、跳繩

第四十四、棒幅跳（ボウハバトビ）

此運動ヲ行フニハ其跳越スヘキ幅ニ應シ右（左）手ヲ以テ棒ヲ握リ左（右）手ヲ其下方約肩幅ヲ隔テテ之ヲ握リ棒ノ下端ヲ斜ニ前方ニ出シ左（右）足ヲ一歩踏ミ出ス

第一動指定ノ距離ヨリ駈ケ來リ左（右）足尖ニテ踏切ヲナシ棒ノ下端

ヲ踏切板ノ前方ニ突キ臂ニ力ヲ加ヘ體ヲ引キ上ケ脚ヲ前方ニ伸シテ繩ヲ跳ヒ越スコト

第二動右(左)手ヲ放チ左(右)手ヲ以テ棒ヲ握リタル儘地上ニ下ルコト

其七、梁木

第四十五、駈歩通過(カケアシツウクワ)

駈歩ハ操典ノ要領ニ從ヒ第二十八ニ準シテ行ハシムヘキモノトス

第四節　第三教

其一、鐵棒

第四十六、逆上(サカアガリ)

第一動懸垂ニアルトキ腰ヲ曲ケ脚ヲ上ケ兩臂ノ間ヲ通過セシメ腦ヲ鐵棒ニ釣スルコト

第二動十分體ヲ反ラシツツ臂ニ力ヲ加ヘ徐ニ體ヲ引キ上ケ上體ヲ起

シテ鐵棒上ニ腰ヲ懸クルコト

第四十七、背摺(セスリ)

第一動體ヲ反ラシツツ臀部ヲ鐵棒上ヨリ脫シ臂ヲ十分屈スルコト

第二動逐次(同時)ニ手ヲ放チテ内肘ヲ鐵棒ニ鉤スルコト

第三動左(右)肘ヲ放チ右(左)肘ニ體ヲ支ヘ右(左)ニ旋回シ左(右)手ヲ以テ鐵棒ヲ握リ右(左)肘ヲ脫シテ鐵棒ヲ握リ懸垂ヲナスコト

第四十八、懸垂上(ケンスイアガリ)

第一動蹈臺(鐵棒ノ下)ヨリ踏切ヲナシ鐵棒ヲ握リ懸垂ヲナスコト

第二動少シク腰ヲ退ケ體ヲ引キ上ケ臂立ヲナスコト

第四十九、振上(フリアガリ)

第一動蹈臺(鐵棒ノ下)ヨリ踏切ヲナシ臂ヲ屈スルコトナク鐵棒ヲ握リ腰ヲ屈ケ足尖ヲ鐵棒ニ近ツケ前方ニ振リ出シツツ腰ヲ伸スコト

ト

第二動後方ニ體ノ來ルトキ臂ニ力ヲ加ヘテ體ヲ引キ上ケ臂立ヲナスコト

第五十、縱跳（タテトビ）　其二、跳越臺

第一動縱側ヨリ駈ケ來リ適當ノ處ニテ踏切ヲナシ掌ヲ臺上ニテ後方ニ置キ脚ヲ伸シテ左右ニ開キ之ヲ高ク上クルコト

第二動第一動ノ前進運動ヲ利用シテ姿勢ヲ變スルコトナク掌ヲ臺上ニテ前方ニ進メ臂ニ力ヲ加ヘテ押シ放チ前方ニ跳ヒ越スコト

第三動地上ニ下ルコト

此運動ハ掌ヲ一回臺上ニ置キ之ヲ行フコトヲ得

第五十一、肘懸上（ヒヂカケアガリ）　其三、棚

第一動踏切ヲナシテ右(左)前臂ヲ淺ク棚ノ邊端ニ懸ケ同時ニ左(右)掌ヲ棚ノ上面ニ置クコト

第二動右(左)前臂ヲ右(左)方ニ開クト同時ニ體ヲ引キ上ケ左(右)臂ヲ立テテ伸シ腰ヲ退ケ脚ヲ前方ニ出スコト

第三動下腹ヲ邊端ニ托シテ臂立ヲナスコト

第四動脚ヲ少シク後方ニ振リ之ヲ屈シテ腰ヲ上ケ棚ノ上ニ跪坐スルコト

第五動棚ノ上ニ立ツコト

第五十二、背摺（セズリ）

第一第二動第四十七第一第二動ノ要領ニ準ス

第三動脚ヲ前方ニ振リ同時ニ肘ヲ脫シテ地上ニ下ルコト

第四章　第三部應用體操

第一節　一般ノ規則

第一、應用體操ハ各種地區地物ニ遭遇スルモ遲躊スルコトナク諸種ノ方法ヲ應用シテ容易ニ之ヲ通過シ得セシムルヲ以テ目的トス故ニ徒歩兵ニ在リテハ殊ニ之ニ熟練セシムルヘキモノトス

第二、應用體操ハ器械體操進歩ノ程度ニ應シ新兵教育期ヨリ演習セシムヘキモノトス

第三、第一教中第六乃至第九ハ武器ヲ携ヘ漸次着裝ヲ增加シ第十乃至第十三ハ徒手ニテ之ヲ行ハシム

第二教中第十四乃至第十八及第二十ハ始メ徒手ニテ各個ニ教育シ習熟スルニ從ヒ武器ヲ携ヘテ漸次着裝ヲ增加シ終ニ部隊ヲ以テ行ハシメ第二十二ハ初メヨリ武器ヲ携ヘ部隊ヲ以テ之ヲ行ヒ漸次着裝ヲ增加スヘキモノトス

第四、銃ヲ携ヘテ跳越又ハ跳下ヲ行ハシムルニハ右手ヲ以テ照尺ノ上ヲ握リ銃ヲ提ケ踏切ヲナスヤ直ニ臂ヲ屈シ拳ヲ內方ニ旋ラシ銃ヲ腋下ニ保持シテ銃身ヲ下ニ向ケ少シク銃口ヲ上ケテ地上ニ下ク立銃ヲナス

連續シテ障碍ヲ通過スルトキハ超越スル毎ニ立銃ヲナスコトナク適宜ニ銃ヲ携ヘシメ又登降ノ動作ニ在リテハ通常負銃ヲナサシムルヲ良トス

軍刀ヲ帶ヒ跳越又ハ跳下ヲ行フトキハ場合ニヨリ軍刀ヲ鉤ヨリ脫シテ手ニ携ヘシム

第五、應用體操ノ幇助法ハ第二章第九ノ規定ニ準ス

第二節　第一教

其一、跳下臺

第六、跳　下

第三章二十二要領ニ準ス

其二、跳　繩

第七、幅(高)跳

第三章第二十三ノ要領ニ準ス

其三、弔棒(索)

第八、登　降

第三章第二十七ノ要領ニ準ス

其四、梁　木

其九、速歩通過

第三章第二十八ノ要領ニ準シ銃ハ適宜ニ之ヲ携ヘシム

第十、競爭超過

部隊ヲ梁木ヨリ若干距離ヲ距テテ之ト平行ニ位置セシメ第十二ノ要領ニ從ヒ之ヲ行ハシムヘキモノニシテ各自弔鐶(棒)(索)ニ依リ梁木ヲ超過シテ指定ノ地ニ集合ス

其五、駈　歩

第十一、駈歩ハ部隊ヲ以テ之ヲ行ハシメ歩法ハ操典ノ要領ニ從ヒ常ニ駈歩ト速歩ヲ交互ニ施行シ速歩ヨリ始メ速歩ニ終ルモノトス其時間配合ノ標準概ネ左ノ如シ

種別	時間 駈歩	回數 駈歩	回數 速歩
第一	一分時	三回	四回
第二	二分時	三回	四回
第三	三分時	三回	四回
第四	五分時	三回	四回
第五	十分時	三回	四回

其六、早駈競爭

第十二、早駈競爭ハ左ノ方法ニ依リ施行ス

部隊ヲ一列横隊トナシ「早駈進メ（ハヤアシス、アシス、）」ノ號令ヲ下ス

豫令ニテ適宜ノ足ヲ一歩踏ミ出ス

動令ニテ各自疾走シテ競爭シ指定ノ地ニ集合ス

其七、人梯

第十三、人梯ハ概ネ左ノ方法ニ依リ構成ス

一、一人梯楷梯トナルヘキ一名若クハ二名ノ兵卒ハ攀登者ヲ其肩上ニ立タシム

二、二人梯第一楷梯トナルヘキ三名ノ兵卒ハ第二楷梯トナルヘキ二名ノ兵卒ヲ其肩上ニ立タシメ第二楷梯タル兵卒ハ攀登者ヲ其肩上ニ立タシム

三、三人梯以上ニ在リテハ前項ノ要領ニ準ス

第三節　第二教

其一、障碍通過場

第十四、生離、壕、低石壁ノ跳越

第三章第二十三第三十九ノ要領ニ準ス

第十五、圓木橋ノ通過

第三章第二十八、第四十五ノ要領ニ準ス

第十六、高石壁、板塀、木柵ノ超越

適當ノ處ニテ踏切ヲナシ手ヲ其上端ニ鉤シ一足ヲ以テ其中腹ヲ踏ミ（足尖ヲ鉤シ）テ攀登シ第三章第二十二ノ要領ニ準シテ跳ヒ下ル

第十七、堡壘ノ通過

外壕ノ外斜面ハ側面向ニ降リ其餘勢ヲ以テ内斜面ヲ登リ胸墻ノ外斜面ヲ攀登セシム

第十八、各個競爭通過

第百六ノ要領ニ準シ各障碍ヲ連續通過セシム

第十九、部隊競爭通過

第十八要領ニ準シ部隊毎ニ之ヲ行フ

其二、野外障碍通過

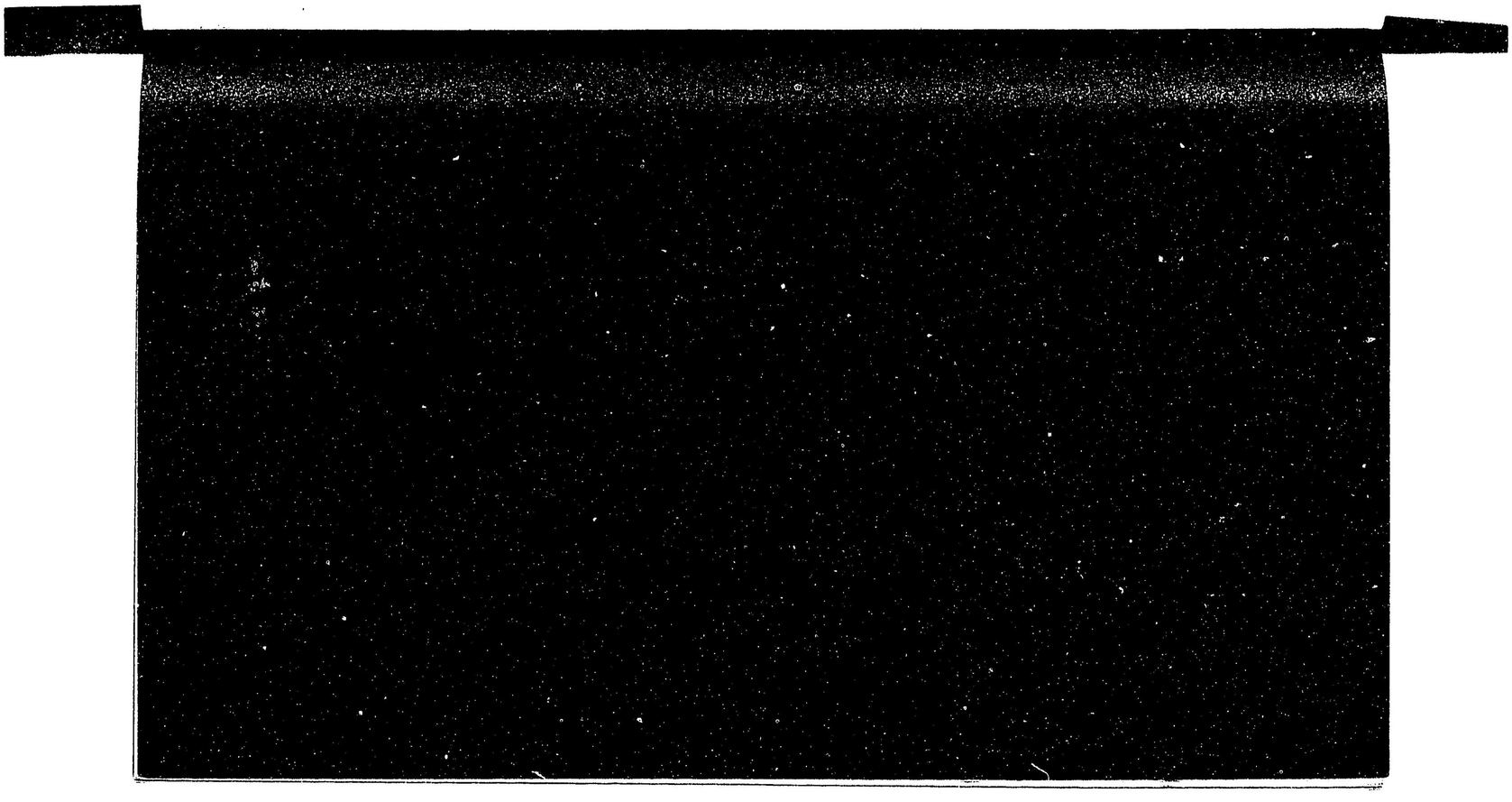
第二十、野外ニ於テ諸種ノ障碍物ヲ有スル地區ヲ撰定シ概ネ第三章第四十四及本章第十、第十四乃至第十九ノ要領ニ準シテ行ヒ漸次距離ヲ增加スヘキモノトス

第二十一、高キ絕壁ヲ登降シ或ハ大ナル樹木ニ攀登スルニハ人梯又ハ繩索ヲ用ヰ若樹枝藤蔦等ノ垂下シアルトキハ之ニ依リテ登降法概ネ第八及第十三ノ要領ニ準ス

其三、野外駈歩

第二十二、概ネ第十一ノ要領ニ準シ成ルヘク諸種ノ地形ニ於テ之ヲ行ヒ漸次距離ヲ增加シ耐忍力及持久力ノ餘成ヲ期スヘキモノトス

下士
上等兵 學科教程體操教範 終



下等兵學科教程

劍術教範

目次

第一章 總則……三
第一節 一般ノ通則……三
第二節 基本演習ノ通則……五
第三節 試合演習ノ通則……六
第二章 銃劍術……九
第一節 基本動作……九

下士
上等兵 學科教程劍術教範目次 終

第二節 試合……六ノ二
……一四

下士
上等兵 學科教程

劍術教範

第一章 總則

第一節 一般ノ通則

第一、劍術ノ目的ハ白兵ノ使用ニ習熟シ且體力殊ニ氣力ヲ養成シ攻撃精神ヲ發揚スルニ在リ

第二、劍術ヲ分チテ左ノ二トス

一、軍刀術　二、銃劍術

第三、劍術ハ各個ニ教育スヘキモノトス之カ爲習技者ノ性質ト體格トヲ審ニシ漸次姿勢ノ正確動作ノ確實ト快速及氣勢ノ充實ヲ得セシムル如ク綿密ニ意ヲ用キテ教授スルヲ要ス

最初ノ教授不完全ナルトキハ不良ノ姿勢技癖ヲ生シ遂ニ固着シテ除去シ難キモノトス

第四、習技者ヲシテ自ラ進ンテ剣術ヲ行フノ念ヲ換起セシムルハ剣術ヲ進歩セシムルニ有効ナルモノトス之カ爲教官ハ剣術ノ目的ト効力トヲ知ラシメ懇切ニ教授スルヲ要ス

第五、銃剣術ノ演習ニハ木銃ヲ用ヰ且防具ヲ著用スヘキモノトス

第六、基本動作ニ習熟スルニ至リ假標ヲ設置シ遠距離ヨリ各種ノ歩度ニテ前進シ撃突ノ動作ヲ行フハ頗ル價値アリトス故ニ時機ヲ得ル毎ニ之ヲ行ハシムヘシ又單ニ敵手ヲ假想シ軍用銃ヲ用ヰテ以上ノ演習ヲ行ハシムヘシ

第七、教官ハ演習ヲ始ムルニ先タチ演習用具ノ損否ヲ檢シ且其ノ裝ニ注意スヘシ

第八、基本及試合演習ノ前後ニ於テハ互ハ嚴肅ニ敬禮ヲ行フヘキモノトス

剣術ニ於ケル敬禮ハ相對シテ姿勢ヲ正シ互ニ其ノ眼ニ注目シ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾クルモノトス

第二節　基本演習ノ通則

第九、基本動作ハ剣術ノ基礎ニシテ最精確ニ教授スルヲ要ス

第十、基本演習ハ同一ノ刺突、防拂、返突、等ヲ數回連續シテ之ヲ行ハシムヘシ此ノ時ニ方リ教官ハ習技者ノ氣勢ヲ誘致シ且次ノ動作ニ自由ヲ得セシムル爲習技者撃突或ハ返突ヲ行フ毎ニ其ノ機ニ應シテ適當ニ退却スルヲ要ス

第十一、演習ヲ始ムルトキ構備ノ姿勢ヲ取ルニハ通常四五歩ノ距離ニ於テス此ノ規則ハ試合演習ニモ亦適用スルモノトス

第十二、基本演習ハ一動作毎ニ木銃ヲ交叉シテ行フモノトス

第十三、教範ニ掲クル號令ハ必ス遵用ヘキモノニシテ常ニ明瞭活潑ニ

發唱スルヲ要ス然レトモ同一ノ基本動作ヲ數回連續シテ行ハシムルトキハ次回ヨリ規定ノ號令ニ代フルニ「同シ」ヲ以テスルコトヲ得

第三節　試合演習ノ通則

第十四、試合ハ劍術ノ目的ヲ達成スル主要ノ演習ニシテ殊ニ其ノ習熟ヲ圖ルヲ要ス

第十五、試合演習ヲ左ノ二種トス

一、教習試合　二、互格試合

教習試合ハ基本動作ヲ習得セシメタル後施行スルモノトス

互格試合ハ教習試合ニ依リ略々使術ノ應用ニ慣レ判斷ノ能力ヲ得セシメタル後施行スルモノトス

第十六、教習試合ニ於テ教官ハ習技者ニ適當ノ虛隙又ハ機會ヲ與ヘテ之ヲ擊突セシメ或ハ習技者ノ虛隙ヲ擊突シ之ヲ防拂シテ返突セシメ以テ適實ニ使術ノ應用ヲ教授スルト共ニ其ノ攻擊精神ヲ誘發スル如クスヘシ

第十七、互格試合ハ習技者相互ノ試合演習ニシテ互ニ攻防ノ術ヲ盡シ勝敗ヲ決セシメ以テ使術ノ應用ニ精熟シ自信力ヲ增シ氣勢ヲ發揚セシムルモノトス

第十八、互格試合ニ當リ教官ハ機ヲ失セス其ノ各時機ニ於ケル相互ノ意志動作ノ經過ヲ說明シ乘スヘキ機會過失技癖等ヲ懇篤ニ教示スヘシ

第十九、敵ニ先スルハ勝ヲ制スルノ要訣ナリ故ニ敵手ノ意志動作ヲ察知シ其ノ乘スヘキノ機ヲ失ハサルコト肝要ナリ

第二十、擊突ハ勇壯果敢己ヲ捨テテ施行シ若擊突功ヲ奏セサルモ尙敵手ヲ壓伏スルノ氣力ヲ以テ再ヒ擊突スルヲ要ス縱ヒ擊突功ヲ奏シタリト信スルモ決シテ氣勢ヲ弛ムヘカラス是レ嗣後ノ變ニ應センカ爲

ナリ

第二十一、總テ防拂シタルトキハ直ニ返突ヲ行フヘシ若シ防拂スルノ餘裕ナキトキハ寧ロ己ヲ捨テテ擊突ヲ行フヘシ蓋シ其ノ氣勢ノ如何ニ依リテ敵手ヲ躊躇セシメ反テ我カ擊突ノ功ヲ奏スレハナリ

第二十二、互格試合ハ敎官之カ勝敗ヲ審判スルモノトス

第二十三、擊突ヲ行フ際氣勢ニ伴フ自然ノ發聲ハ頗ル價値アリトス然レトモ之カ爲故ラニ發聲スルヲ禁ス

第二十四、木銃ヲ放墜セシモノハ敗者トシ之ニ對スル敵手ハ擊突ヲ行ハサルモノトス但シ其ノ瞬時ニ於ケル一回ノ擊突ハ此限ニアラス

第二十五、試合ノ勝敗決スル毎ニ互ニ距離ヲ復シ立銃ノ姿勢ヲ取リ更ニ試合ヲ始ムヘシ

第二十六、規定セル擊突部ノ外決シテ擊突スルヲ許サス若シ過テ規定外ヲ擊突セシトキハ「過リ」ト謝スヘシ

第二十七、敎官試合ヲ始メシムルニハ「始メ」之ヲ止メシムルニハ「止メ」二時中止セシムルニハ「待テ」ト令ス又習技者敎官ニ對シ或ハ相互ノ試合中事故ニ依リ中止ヲ要スルトキハ「暫ク」ト請フヘシ

第二章　銃劍術

第一節　基本動作

其一、刺突部

第一、刺突部ヲ定ムルコト左ノ如シ

胴

喉（基本動作ニ於テハ通常刺突セサルモノトス）

其二、立　銃

第二、立銃ハ操典ノ規定ニ準ス

其三、構備

第三、立銃ヨリ構備

號令　構ヘ銃（カマヘ ツヽ）

頭ヲ正面ニシタルママ左足尖ヲ正面ニ向クル如ク右ニ向キ右足ヲ約矩形ニ開キ同時ニ右手ヲ以テ銃ヲ上ケ左手ニテ概ヲ下帶ノ下部ヲ握リ直ニ右手ヲ下ケテ銃把ヲ握ル

左足ヲ前方約半歩ノ所ニ出シ體重ヲ齊シク兩足ニ托シ僅ニ兩膝ヲ屈シ同時ニ兩手ヲ以テ銃ヲ前ニ倒シ銃身ヲ上ニシ僅ニ左方ニ傾ケ右手ヲ臍骨ノ附近ニ置キ左肘ヲ僅ニ屈シ劍尖ヲ凡ソ敵手ノ眼ニ向ケ上體ヲ眞直ニシテ喉ノ上ニ落付ケ眼ヲ敵眼ニ注ク

第四、構備ヨリ立銃

號令　立テ銃（タテ ツヽ）

右手ヲ以テ照尺ノ上部ヲ握リ正面ニ向キツヽ右踵ヲ左踵ニ引キ著ケテ立銃ノ姿勢ニ復ス

其四、前進及退却

第五、前進及退却ハ敵トノ距離ヲ伸縮スル場合ニ用ユル動作ニシテ構備ノ姿勢ノマヽ兩脚共ニ硬固ナラサル如ク快速ニ之ヲ行ヒ足ハ地ヲ近ク過キテ輕ク踏ミ著クヘシ

前進ハ左足ヲ前方ニ進メ直ニ右足ヲ定距離ノ所ニ送ル退却ハ之ニ反ス場合ニ依リ前進ハ右足ヲ左足ノ前方ニ進メ直ニ左足ヲ右足ノ前方定距離ノ所ニ進メ退却ハ之ニ反シテ行フコトヲ得

其五、劍ノ交叉

第六、劍ノ交叉ハ劍ノ尖端ヨリ約一握ノ所ニ於テシ劍ノ右方ヲ以テスルヲ通常トス

其六、刺　突

第七、刺突ハ構備ノ姿勢ヨリ一歩快速ニ進出シ同時ニ兩手ヲ以テ銃ヲ敏活ニ突キ出ス

刺突ヲ行ヒタルトキハ直ニ構備ノ姿勢ニ復スルモノトス

第八、直　突

號令突ケ

敵手ノ左拳ノ右上方ヨリ刺突ス

若シ劍ノ左方ヲ以テ交叉スルトキハ左上方ヨリ刺突ス

第九、脫　突

號令脫セ

兩手ニテ劍尖ヲ下ケ敵手ノ劍下ヲ近ク經過セシメツツ敵手ノ左拳ノ左上方ヨリ刺突ス

若劍ノ左方ヲ以テ交叉スルトキハ右上方ヨリ刺突ス

第十、下　突

號令下ヲ突ケ

兩手ニテ劍尖ヲ下ケツツ敵手ノ左拳ノ下方ヨリ刺突ス

其七、防拂及返突

第十一、防拂ハ構備ノ姿勢ヨリ銃劍ヲ以テ敵ノ銃劍ヲ敏活ニ擊拂ス

第十二、返突ハ敵手ノ刺突ヲ防拂シ直ニ其ノ虛隙ニ乘シテ刺突ス

第十三、右ノ防拂及返突

號令右ヲ防ケ突ケ

左拳ノ右上方ヨリ刺突ヲ受クルトキハ兩手ヲ以テ銃ヲ右前方ニ進メツツ斜下方ニ防拂ス

返突ハ直突ノ要領ニ準ス

第十四、左ノ防拂及返突

號令左ヲ防ケ突ケ

左拳ノ左上方ヨリ刺突ヲ受クルトキハ兩手ヲ以テ銃ヲ左前方ニ進メツツ斜下方ニ防拂ス

返突ハ直突ノ要領ニ準ス

第十五、下ノ防拂及返突

號令下ヲ防ケ突ケ

左拳ノ下方ヨリ刺突ヲ受クルトキハ兩手ヲ以テ銃ヲ前方ニ進メツツ右拳ヲ約右乳ノ高サニ上ケ用心鐵ヲ殆ト右方ニ向ケテ右下方ニ防拂ス

返突ハ直突ノ要領ニ準ス

第二節　試　合

第十六、試合ハ試合演習ノ通別ニ準據シテ行フモノトス

左拳ノ左上方ヨリ刺突ヲ受クルトキハ兩手ヲ以テ銃ヲ左前方ニ進メツツ斜下方ニ防拂ス

返突ハ直突ノ要領ニ準ス

第十五、下ノ防拂及返突

號令下（シタ）ヲ防（フセ）ケ突（ツ）ケ

左拳ノ下方ヨリ刺突ヲ受ケルトキハ兩手ヲ以テ銃ヲ前方ニ進メツツ右拳ヲ約右乳ノ高サニ上ケ用心鐵ヲ殆ト右方ニ向ケテ右下方ニ防拂ス

返突ハ直突ノ要領ニ準ス

第二節　試合

第十六、試合ハ試合演習ノ通別ニ準據シテ行フモノトス

下士
上等兵

學科教程劍術教範終

下士
上等兵 學科教程

軍隊内務書

目次

第一章 綱領……五
第二章 服從……六
第三章 敬稱及稱呼……七
第四章 大隊本部諸官ノ職務……八
第五章 中隊附諸官ノ職務……八
第六章 兵營……一四

第七章　工　場……一五
第八章　週番勤務……一五
第九章　火災豫防消防及非常呼集……二一
第十章　風紀衞兵……二六
第十一章　營　倉……二四
第十二章　當番卒及從卒……三六
第十三章　檢　査……三八
第十四章　起居及容儀……三九
第十五章　休日及外出……四五
第十六章　衞　生……五一
第十七章　浴　室……五二
第十八章　酒　保……五二

下士
上等兵

學科教程

軍隊內務書

第一章 綱領

第一、兵營ハ難苦ヲ共ニシ生死ヲ同フスル軍人ノ家庭ニシテ其起居ノ間ニ於テ軍紀ニ慣熟セシメ軍人精神ヲ鍛錬セシムルヲ以テ主要ナル目的トス

第二、兵卒ハ一意專心上官ノ敎訓ヲ迎ヘ勅訓ノ御趣意ヲ遵奉シ命令規則ヲ嚴守シ諸勤務演習ニ勉勵シ兵器ヲ遵重シ馬ヲ愛護シ官物ノ取扱ヲ丁寧ニシ新參者ヲ慈ミ古參者ヲ敬ヒ陰日向ナク內務ノ規定ヲ守リ上官ニ仕フルコト猶ホ父母ニ事フルカ如クシ衛生ヲ重ンシ筋骨ヲ鍛ヒ因苦缺乏ニ堪ヘ百折不撓ノ心ヲ養ヒ

以テ軍人ノ面目ヲ完クスルコトヲ瞬時モ懈ルヘカラス

第二章　服從

第一、凡ソ部下タル者其上官ニ服從スルハ如何ナル場合ヲ問ハス必ス嚴重ナルヘシ

部下ニアラサル受令者ニ對スル場合モ亦同シ

第二、同級者ニ在リテハ各其停年ノ新古ニ應シ服從ノ道ヲ得ルコト恰モ階級ノ上官ニ於ケルカ如クナルヘシ

第三、凡ソ命令ハ謹テ之ヲ行フヘシ決シテ其當不當ヲ論シ其原因、理由等ヲ尋ヌルコトヲ許サス然レトモ其命令不明瞭ナルトキハ徐ニ之ヲ尋ヌルハ妨ケナシ新ニ受クル處ノ命令ト齟齬スルトキハ其趣ヲ申述ヘ然ル後之ヲ行フヘシ

第四、犯行アリテ處分ヲ受クルトキハ假令不當ト思フトモ決シテ辨解スルコトナク必ス之ニ服從スヘシ又上級者ノ取扱假令不條理ト考フルモ決シテ之ヲ爭ヒ論スルコトヲ許サス但シ徐ニ順序ヲ經テ之ヲ訴フルハ妨ケナシ若シ勤務中ナレハ勤務終リテ後之ヲ訴フルモノトス

第三章　敬稱及稱呼

第一、凡ソ下タル者上タル者ヲ呼フニハ直接ト間接トヲ問ハス必ス左ノ敬稱ヲ用フヘシ

天皇、太皇太后、皇太后、皇后ニハ	陛下
皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王ニハ	殿下
將官同相當官ニハ	閣下
上長官以下ニハ	殿

第二、上級者ニ對シテ自己ヲ呼フニハ多クノ場合ニ於テ自分、私等ト云ハスシテ氏若クハ氏ト官(職)ヲ稱フルヲ良トス

第三、公文書ノ宛名ニハ身分、階級ノ如何ヲ問ハス殿ノ敬稱ヲ記スルモノトス

第四章　大隊本部諸官ノ職務

第一、大隊書記ハ大隊副官ノ命ヲ承ケ聯隊書記ノ爲規定シタルモノニ準シ事務ニ服スルモノトス

第五章　中隊附諸官ノ職務

第一、內務班長ノ職務ハ多般ナリト雖其大概ヲ列記スルコト左ノ如シ

一、班長ハ班內ノ儀表ト爲リ班員ヲシテ　勅諭ノ御趣意ヲ心肝ニ銘シ言行必ス之ヲ遵奉セシムヘシ又上等兵ヲ敎導誘掖シテ其職務ヲ行ヒ易カラシメ古參兵ト新參兵トノ間柄ニ注意シ相互友弟ノ道ヲ盡シ和睦一致軍隊生活ヲ樂ムノ心ヲ盛ナラシメ意思ヲ堅確ニシ又諸規定ヲ嚴守シ演習、勤務ニ勉勵セシムヘシ是則品性ヲ謹嚴ニシ勞苦ニ耐ヘ勤勉ニ慣ルルノ道ニシテ人生幸福ノ基礎ナルコトヲ能ク理解セシムヘシ又古參ノ者ニ對シテハ言語擧動自ラ敬意ヲ表シ徒ラニ我意ヲ張ルコトナク古參者ニ從フヘキコトヲ敎ヘ遂ニ喜テ上官ノ命令ニ從ヒ水火且辭セサル第二天性ヲ作ルコトニ努力スルコト

二、班長ハ班內ノ雜談ニモ能ク注意シ苟モ誹謗猜疑虛僞ニ渉ルコトナク常ニ班員ヲシテ快活無邪氣ナラシメ以テ自然ニ性行ヲ改善セシムルコトヲ期スヘシ又居常姿勢動作ヲ快活ニシ軍人ノ面目ヲ揭クルコトニ心掛シムヘシ其他單簡活潑且明瞭ナル言語ヲ用ヒ漸次

地方ノ訛ヲ除キ軍人ノ用語ニ熟セシムルコト

三、班長ハ能ク班内兵卒ノ性質、行狀、技能、經歷ヲ熟知シ特ニ金錢ノ遣ヒ方外出先ノ擧動ニ注意シ常ニ儉約ヲ守リ成ルヘク外出ノ度數ヲ少クシ都市華奢ノ風ニ感染スルコトヲ避ケシムヘシ又父兄等ニ金錢ヲ請求スレハ獨立自營ノ心ヲ害シ放蕩遊情ノ途ヲ開クモノナレハ軍人ノ面目トシテ之ヲ愼マシムルコト

四、班長ハ班員ヲシテ武士ノ嗜トシテ兵器ヲ尊重シ之ヲ大切ニ取扱ヒ朝夕、愛撫シテ心膽ヲ練リ競フテ其技ニ長セシメントスルノ心ヲ盛ナラシムルコト

五、班長ハ給與ニ關シテハ曹長ノ指圖ニ從ヒ支給、修理、交換、返納等一切ノ事ヲ取扱フモノトス是等ヲ各員ニ分配スルトキハ先ツ其用法、保存法ヲ綿密ニ敎ヘ總テ官物ヲ大切ニスルト否トハ其人ノ公德如何ヲト知スヘキモノナレハ私物ヨリモ一層大事ニ取扱フヘキモノナルコトヲ示シ一々之ヲ事實ニ現ハサシムルコト

總テ支給品ヲ破損紛失セシモノアルトキハ能ク其原因、破損ノ有樣等ニ留意スヘシ是多クハ其本人ノ性質、行狀ヲ察知スルニ足ルモノナレハナリ

六、班長ハ被服ニ付テハ常ニ注意ヲ怠ルヘカラス被服諸品ノ分配ニ當リテハ能ク各人ニ適合セシメ常ニ清潔ニシテ正シク著裝セシムヘシ演習、勤務、檢查等ニ出ルトキ又ハ外出ノ際ハ自ラ之ヲ檢查シ些少ノ不正過誤ト雖之ヲ矯正スルコト猶ホ慈母カ愛兒ノ着裝ニ注意スルカ如クナルヘシ又其修理ハ小破ノトキニ於テ各自ヲシテ之ヲ爲サシメ被服類ニ記シアル隊號、年月等ハ常ニ明ナラシメ洗濯ハ時々自ラ之ヲ行ハシメ殊ニ襦袢、袴下、靴下等ノ不潔ナラサルコトニ注意スヘシ靴ハ稍々寬裕ナルモノヲ選ミ革質ヲ常ニ柔カナラシメ踵ヲ歪メサルコトニ心掛ケシムルコト

七、班長ハ班内舎室ノ保存掃除及諸物品ノ装置整頓ニ注意シ外形ヨリスル精神修養ノ手段トシテ斷ヘス兵卒ヲ督勵シ規則正シク確實ニ施行スルコトニ慣レシムルコト

八、班長ハ其班備付ノ物品監守者ト爲リ其定數ヲ明ニシ又兵卒ヲシテ公共物ニ對スル取扱ヲ一層丁寧ナラシムヘシ若シ原因不明ノ破損紛失アルトキハ班長自ラ其責ニ任スルコト

九、班長ハ懇ニ火災ノ恐ルヘキ所以ヲ說キ示シ火ノ元ヲ大切ニスルノ習慣ヲ養フコト

十、班長ハ週番士官立會ヒノ上班員ノ日朝日夕點呼ヲ行ヒ特ニ日夕點呼ノトキ曹長ヨリ傳達スル命令ヲ承知シ確實ニ履行セシムルヲ以テ重要ナル責任トス故ニ命令ノ大要ハ手牒ニ筆記シ置キ時々兵卒ニ申シ聞ケ其實行ヲ確認スルニ至リテ止ムルコト

十一、班長ハ兵卒ヲシテ個人衛生ヲ事實ニ履行セシムルコトヲ勉ムヘシ其最モ必要ナルハ外出ノ際暴飲暴食ヲ愼ミ花柳病感染ノ原因ヲ避クルニ在リ是等ニ付テハ班内ノ德義トシテ品行ヲ愼ムノ風ヲ漸次養成スルコト

十二、班長ハ金錢時計等ヲ所持スルモノアルトキハ各自ヲシテ確實ニ保管セシメ相互貸借ヲ禁セラレタル規定ヲ守ラシムルヘシ若シ班内ニ紛失物又ハ犯行者アルトキハ週番士官ニ届出ヘシ專斷其取調ニ從事スヘカラス茌苒届出ヲ稽緩スヘカラス固ヨリ同僚相互糺問等ノ事アラシムヘカラス總テ是等ノ事件發生ノ上ハ隱蔽セス庇護セス有ノ儘ノ事實ヲ表白シテ速ニ處分ヲ仰クハ森嚴ナル軍紀ノ要求スル所ナルコトヲ普ク銘心セシムルコト

十三、班長ハ班内ニ患者ヲ生セシムルトキハ日朝點呼ノ際其他隨時週番下士ニ通知シ診斷ヲ受ケシメ其病狀ヲ承知スルコト

十四、班長ハ臨時外出又ハ休暇ヲ願出ル者アルトキハ能ク其事情ヲ

詮議シ許可ヲ請ヒ外出證又ハ外泊證ヲ受ケ本人ニ下付シ歸營後之ヲ返納スヘシ又外出ヲ願出ル者ニハ曹長ヨリ軍隊手牒ヲ受ケ之ヲ交付スヘシ歸省入院其他事故ノ爲一週日以上不在者ノ諸給與品ハ品目ヲ添ヘ曹長ニ預ケ置クコト

第二、班附下士ハ同心協力班長ヲ補助シ班内ノ成績ヲシテ善良ナラシムルノ責ニ任ス班長營内ニ在ラサルトキハ別命ヲ待タス高級古參ノ者其職務ヲ代理スルモノトス

第六章　兵營

第一、兵營内ノ各室諸倉庫等ハ編制ノ順序ニ從ヒ業務ノ連繫監視ノ便否ヲ圖リ配置スルモノニシテ通常之ヲ本部、兵舍、廠（車）廠、倉庫、工場、炊事場（スイジバ）等ニ分チ浴室、洗面所、洗濯所、風紀衛兵所、營倉、面會所、酒保、集會所等ヲ附屬ス

第七章　工場

第一、工場（コウジョウ）ハ兵器被服ノ製作修理彈藥ノ塡實及裝蹄、造鐵、剔毛ヲ行ヒ兼テ工卒ヲ敎育スル所トス

第八章　週番勤務

第一、週番諸官ハ營内ノ取締ニ任シ軍紀風紀ノ維持諸法則ノ實施如何ヲ警視スルヲ任トス而テ之ヲ分チテ聯隊週番勤務、中隊週番勤務トス

第二、週番勤務交代ノ際上番者ハ下番者ヨリ所要ノ申送及物品ノ引繼ヲ受クヘシ又申送終レハ上番者ハ週番勤務上直屬ノ上官ニ申告スヘシ

第三、週番勤務ノ爲定メタル事項ハ日直勤務ニ準用スルモノトス

第一節　聯隊週番勤務

第四、聯隊週番勤務ハ中隊長及聯大隊附大尉ヲ通シ一名（之ヲ週番大尉ト云フ）特務曹長一名ヲ以テ之ニ服セシム

第二節　中隊週番勤務

第五、中隊ノ週番勤務ハ中隊附中少尉（士官勤務ニ服スル見習士官ヲ含ム）一名（之ヲ週番士官ト云フ）軍曹伍長（伍長勤務上等兵ヲ含ム）二名（之ヲ週番下士ト云フ）上等兵二名トス

第六、週番下士ハ週番士官ノ旨ヲ承ケ週番上等兵ヲ指揮シ細務ニ從事ス

週番下士日常ノ勤務概ネ左ノ如シ

一、人員及狀況ヲ承知シ患者アルトキハ患者名簿ニ其官等級、氏名ヲ記シ定時限ニ之ヲ率ヒ診斷ヲ受ケシメ患者名簿ニ所要ノ記入ヲ爲シ軍醫ノ一閱ヲ受ケ其結果ヲ中隊長、週番士官、特務曹長及曹長ニ報告スルコト

不時診斷ヲ要スル者アルトキハ週番士官ニ届出テ其指圖ヲ受クルコト

入院ヲ要スル者アルトキハ軍醫ノ指圖ニ依リ之ヲ取扱フヘシ退院ノ場合モ亦同シ

二、週番士官ヨリ定メラレタル時刻ニ所定ノ場所ヲ巡視シ諸規定ノ確實ニ行ハルヤ否ヤヲ監視シ消燈後ハ特ニ火ノ氣ノ消滅ヲ確ムルコト

三、朝夕及臨時點呼ノ際ハ週番士官ニ隨行スルコト

四、日々演習出場ノ人員ヲ調査シ演習時間前ニ之ヲ中隊長及週番士官ニ報告スルコト

五、特務曹長ヨリ下士以下ノ勤務割ヲ承知シ之ヲ本人ニ傳ヘ又内務班長ニ通スルコト

六、上番衞兵ノ軍裝ヲ檢査シ定時限ニ之ヲ率ヒ集合所ニ至リ（衞兵司令週番

下士ヨリ高級古參ナルトキハ同官ハ直ニ集合所ニ至ルヘシ）週番特務曹長ノ指揮ヲ受クルコト

但シ週番下士ノ服裝ハ上番衛兵ニ同シ只背嚢（外套）ヲ負ハサルヲ異ナリトス

七、炊事準備ノ爲毎日朝食ハ前日夕食後、晝食ハ當日朝食後、夕食ハ當日晝食後直ニ週番士官ノ認證ヲ得タル食需傳票ヲ炊事掛ニ送付スヘシ若シ傳票ヲ發シタル後人員ニ增減ヲ生シタルトキハ速ニ其旨ヲ炊事掛ニ通報スヘシ

外出スル下士以下ニシテ兵營ニ歸リ食事セサル者ノ人員、辨當ヲ要スル人員及不食料ノ支給ヲ受クヘキ者ノ官等級、氏名ヲ內務班長（聯、大隊本部日直下士）ヨリ承知シ其辨當數ハ炊事掛ニ不食料ノ支給ヲ受クヘキ者ノ氏名ハ曹長及炊事掛ニ通報スルコト

八、下士以下多數外出シタルトキハ歸營時限後各班ヲ巡視シ異狀ノ有無ヲ週番士官ニ報告スルコト

九、入寢後ハ脫衾者ナキヤ室內換氣法適當ナルヤ等總テ衛生ニ關シ注意ヲ怠ルヘカラス氣候激變ノ際ハ殊ニ然リ

十、下士以下延燈ヲ願出スル者アルトキハ之ヲ週番士官ニ申出テ其許否ヲ本人ニ通知スルコト

十一、犯行者アルトキハ其事ノ輕重如何ヲ問ハス直ニ週番士官ニ報告スルコト

十二、營倉入ノ者アルトキハ其著裝携帶品ヲ檢查シ罰目、日數、隊號、官等級、氏名ヲ記シタル覺紙ト共ニ風紀衞兵司令ニ引渡スヘシ又營倉ヨリ出ル者アルトキハ之ヲ同司令ヨリ受取ルコト

十三、面會人アルコトヲ風紀衞兵ヨリ通知シ來ルトキハ之ヲ本人ニ告ケ且特務曹長ニ報告スヘシ若シ本人不在ナルトキハ其行先キ、歸營時刻等ヲ同衞兵ニ通知スルコト

第七、週番上等兵ハ週番下士ノ旨ヲ承ケ細務ニ從事ス其日常ノ勤務概

ヲ左ノ如シ

一、毎朝室内、廊下、窓、物置、銃架、机、腰掛、燈器、火鉢、煖爐等ノ掃除ヲ監視シ當番卒ヲ集メ中隊受持ノ場所ヲ掃除セシメ常ニ兵舍内外ノ清潔ヲ保チ又掃除器具ノ保存ニ任スルコト

二、屢々兵舍ノ内外ヲ巡視シ諸規定ノ確實ニ行ハルルヤ否ヲ監視シ日夕點呼後ハ特ニ各室ヲ見廻リ火鉢、煖爐等ノ火ヲ確實ニ消サシメ週番下士ノ檢査ヲ受クヘシ

演習、勤務等ノ爲舍内人少ノトキ又ハ烈風ノ際ハ巡視ノ度數ヲ增シ盜難火元ノ取締ニ注意スルコト

三、食事分配ノトキハ週番士官ノ指圖ヲ受ケ食事番ヲ率ヒ炊事場ニ至リ食事ヲ受ケ取リ之ヲ分配シ食事後ニハ食器ノ員數、破損ノ有無ヲ調ヘ之ヲ炊事掛ニ返納スルコト

四、營倉入ノ者ニ食事、寢具等ヲ差入ルルトキハ檢査ノ上風紀衛兵所ニ送リ衛舍掛ニ引渡スヘシ食器、寢具等返納ノトキハ衛舍掛ヨリ之ヲ受取ルコト

五、苦役ニ處セラレタル者アルトキハ週番士官ノ指圖ヲ受ケ之ヲ指揮シテ苦役ニ從事セシムルコト

第九章　火災防豫、消防及非常呼集

第一、凡ソ火災ハ人畜ニ危害ヲ及ホシ國帑ヲ糜シ軍隊ノ敎育及衛生ヲ害スル等其幣枚擧ニ遑アラス而シテ多クハ疎虞ヨリ生スルモノトス上下一致全幅ノ注意ヲ以テ其危害ヲ未然ニ豫防セサルヘカラス之カ爲嚴守スヘキ規定概ネ左ノ如シ

一、喫烟ハ舍内ニ在リテハ所定ノ場所外ニ於テスルヲ禁ス舍外ト雖彈藥庫、火藥庫、氣球庫、兵器庫、被服庫、廐、馬糧庫、薪炭庫等ノ近傍ニ於テスルヲ禁スルコト

二、「マツチ」ノ燃殻煙草吸殻ニハ火ノ氣ノ殘ラサルコトニ注意シ火鉢其他火災ノ恐ナキ場合ニアラサレハ之ヲ棄ツヘカラサルコト

三、蠟マツチノ如キ發火ノ早キモノヲ所持スヘカラス普通ノ「マツチ」ト雖成ルヘク一箱ヨリ多ク所持スヘカラス酒保等ニ於テモ餘分ニ貯藏スヘカラサルコト

四、倉庫内等ニ餘分ノ油紙又ハ油雜巾類ヲ置クヘカラサルコト

五、擅ニ火ヲ點スヘカラス裸燈火ヲ使用スヘカラス燈火ヲ所定ノ場所外ニ持行クヘカラス又將校以下提燈ヲ使用セサルコトヲ勉ムルコト

六、不完全ナル火取ニハ火ヲ運フヘカラス舍外ニテ火ヲ運フニハ蓋ノアル火取ヲ用フルコト

七、彈藥其他爆發ノ恐アル物品ヲ舍内ニ置クヘカラサルコト

八、煖爐、火鉢等ニ接近シテ薪炭、紙屑籠類ヲ置クヘカラサルコト

九、煖爐ノ蓋ヲ取リ又ハ焚火口ヲ開ケ放スヘカラス又煖爐火鉢等ハ室ノ壁ヨリ相當ノ距離ヲ隔テ要スレハ金屬板ヲ以テ壁ヲ被フコト

十、煖爐ヲ過度ニ焚クヘカラス又煖爐ニテ紙屑類ヲ焚クヘカラス火鉢ニ多クノ火ヲ入ルヘカラス演習出場、諸官退營及消燈後ハ火ヲ消シ餘燼ヲ止ムヘカラサルコト

十一、火鉢ハ消火後其定數ヲ表記シアル場所ニ集メ併ヘ置クヘシ火鉢ノ灰ハ七分目ナルヲ度トスルコト

十二、公務又ハ修學ノ爲延燈ヲ許サレタル者ハ其室内ニ於ケル總テノ火ヲ消スノ責ニ任シ火ノ氣ナキコトヲ確認シタル後ニアラサレハ就寢スヘカラサルコト

十三、烟突ノ裝置ニハ火ノ氣ノ漏レサルコトヲ注意シ毎週一回掃除シ煤烟ヲ除クコト

十四、營内各部ニ付火元取締ノ責任者ヲ定メ置クモノトス
又中隊毎ニ不寢番一二名ヲ置キ火元取締ニ任シ兼テ盜難及衛生ノコトニ注意セシムルコト
十五、工場、集會所、酒保、炊事場、浴室、當番卒ノ居室、倉庫、薪炭及燈油ノ格納所ニ於テハ用事ヲ終リ之ヲ閉ツル前火元取締ニ關シ聯隊長ノ指定スル擔任者ハ各受持毎ニ火ノ始末ヲ爲シ火ノ氣ナキコトヲ確認シ其ノ責ニ任スルコト
十六、營内緊要ノ場所ニハ輕便消火器ヲ備ヘ常ニ一定ノ位置ニ置キ下士以下ヲシテ普ク其使用法ヲ知ラシメ又其藥液ハ種類ニ依リ期限ヲ定メテ交換スヘシ水道、消火栓ノ位置並其使用法モ亦熟知セシムルコト
十七、彈藥庫ノ傍ニハ目塗土ヲ備ヘ置クコト
第二、出火ノ際ハ大事ニ至ラサル前之ヲ消止ムルヲ以テ第一ノ目的トス故ニ火元若クハ其近傍ニ居合セタルモノハ服裝等ノ如何ヲ顧ミス速ニ之ニ駈付ケ諸種ノ手設ヲ盡シテ消防ニ勉ムヘシ
出火ノ際ニ於ケル處置ハ其地ニ現在スル者ノ臨機ノ取計ニ任シ遺策ナキコトヲ期スルヲ本旨トス然レトモ一般ノ場合ニ於ケル動作ヲ示スコト左ノ如シ
一、消防隊ハ現時ノ衣袴ノ儘所定ノ場所ニ集合シ消防隊司令ノ指揮ヲ受クヘシ委員附下士、工卒當番卒ハ各々受持ノ場所ニ至ルコト
其他ノ下士以下ハ兵器ヲ携ヘ所定ノ位置ニ集合シ高級古參者ノ指揮ヲ受クヘシ
二、其舍室ヨリ出火ノトキハ集合スルコトナク各自兵器、非常持出書類、公用書類、被服等ノ順序ニ之ヲ舍外安全ノ地ニ持出スヘシ
機密秘密圖書ニハ特ニ監視者ヲ付シ其散逸ヲ防クコト

三、軍旗、御眞影、勅諚等ニ延焼スルノ虞アリテ上官ノ指圖ヲ持ツノ遑ナキトキハ當該歩哨ハ勿論其附近ニ居合ス者ハ之ヲ他ニ奉移スルコト

四、營倉入ノ者ヲ出スヲ要スルトキハ風紀衞兵ハ其處置ヲ爲スヘシ若シ逃走ノ恐アル者ニハ監視ヲ付スルコト

第十章　風紀衞兵

第一、風紀衞兵ハ兵營毎ニ之ヲ設ケ週番大尉ノ指揮ニ屬シ營内ノ取締ニ任シ營門出入ノ者ヲ監視スルヲ以テ任務トス

第二、風紀衞兵服務ノ爲ニハ本章ノ外衞戍衞兵ニ關スル規定ヲ準用スヘキモノトス

第三、風紀衞兵其ノ歩哨ヲ出スハ通常軍旗、營門、營倉、彈藥庫等トス其服務ハ通常二十四時間トシ一哨所ノ爲ニハ兵卒三名ヲ以テ之ニ充ツ單哨ニシテ概ネ一時間毎ニ交代スルモノトス但シ必要ニ應シ兵數ヲ增加シ哨所ノ數ヲ增シ又ハ複哨、下士哨ト爲スコトヲ得

第四、風紀衞兵司令ハ通常下士ヲ以テ之ニ任ス但シ衞舍掛、歩哨掛ハ上等兵ヲ以テ之ニ任シ衞舍掛ハ上等兵一名ヲシテ此ノ兩勤務ヲ兼ネシムルコトヲ得

第五、風紀衞兵ノ服裝ハ軍裝トシ雜嚢、水筒脊負袋、器具、手旗、飯盒、豫備靴、携帶天幕、毛布ヲ除クモノトス但シ銃ヲ携ヘサル者ハ背嚢ヲ負フコトナシ

第六、風紀衞兵衞兵所ニ在ル間ハ銃及背嚢ヲ順序正シク整頓シ置クヘシ敬禮ノ爲整列スルトキ及巡察ノ際ハ背嚢ヲ負ハサルモノトス

第七、風紀衞兵所ニハ必要ノ場合ヲ除ク外通常彈藥ヲ備付ケサルモノトス

第八、風紀衞兵ハ書見スヘカラス又許可ナクシテ衞兵所ヲ離ルヘカラ

ス衛兵司令若シ衛舎ヲ離ルルヲ要スルトキハ代理者ヲ命シ置クヘシ

第九、風紀衛兵司令ハ週番大尉ノ命ヲ承ケ衛兵ヲ指揮シ營倉ヲ監守シ日課ノ諸號音ヲ定時限ニ吹カシメ且衛兵所、營倉、及備付物品ノ清潔保存ノ責ニ任スヘシ日常ノ勤務概ネ左ノ如シ

一、上番衛兵司令ハ下番衛兵司令ヨリ必要ノ申送ヲ受ケ衛舎掛ヲシテ諸物品ヲ受取ラシメ歩哨掛ヲシテ歩哨ヲ交代セシムヘシ又營倉ニ在ル者ノ人員、著裝、所持品等ハ自ラ之ヲ檢査スヘシ

二、衛兵交代後直ニ各哨所ヲ巡視シ歩哨ニ其守則ヲ試問スヘシ爾後屢々巡察シ歩哨ノ勤情ヲ監視スルコト

三、週番大尉ヨリ命セラレタル時刻其ノ他必要ト認ムルトキ營内ヲ巡察シ非違ヲ戒メ殊ニ火災豫防ニ注意スヘシ其他部下ノ營内巡察ヲ定ムルコト

四、衛兵所ノ時計ハ營内時刻ノ標準ナレハ毎日正午之ヲ正スコト

五、表門ハ通常起床號音ニテ開キ夕食號音ニテ閉チ其他ノ諸門ハ聯隊長ノ定ムル時刻ニ於テ開閉スルコト

六、將校又ハ廉アル巡視ノ爲上官來營スルトキハ速ニ週番大尉ニ報告スルコト

七、外來人ニ對シテハ左ノ手續ニ依ルコト

（イ）准士官以上ニ面會ヲ求ムル者アルトキハ名刺ヲ求メ若クハ氏名ヲ尋ネ之ヲ該官ノ許ニ案内シ又ハ通報シテ其指圖ヲ待ツヘシ

（ロ）下士以下ニ面會ヲ求ムル者アルトキハ面會所ニ案内ノ後面會ヲ求ムヘキ者ノ隊號、官等級、氏名及本人ノ身分、氏名ヲ面

會簿ニ記入セシメ若クハ代筆シ聯、大隊本部附ハ其本人ニ中隊附ハ週番下士ニ通報スヘシ

（ハ）面會ヲ求メラレタル者不在ナルトキハ成ルヘク其行先キ歸營時刻等ヲ告ケ知ラスヘシ若シ入院中ノ者ニ面會ヲ求ムル者アルトキハ病院所在地經路等ヲ敎ユヘシ

（ニ）面會人傳染病流行地ヨリ又ハ其地ヲ經過シ來リタルトキハ週番大尉ノ指圖ヲ受ケ之ヲ取扱フヘシ

（ホ）營內參觀ヲ請フ者アルトキハ週番大尉ノ指示ヲ受クヘシ

（ヘ）面會人中風紀ニ害アリト認ムル者アルトキハ週番大尉ニ申出テ其指圖ヲ受クヘシ

（ト）總テ外人ニハ相當ノ禮意ヲ表シ言葉ヲ叮寧ニシ懇切且速ニ取扱フヘシ

八、淮士官以上及之ニ準スヘキ者並ニ其隨行者ノ外營外ニ物品ヲ持出サントスル者アルトキハ其持出證ト物品トヲ照合スヘシ若シ持出證ナキ者又ハ證明外ノ物品ヲ携フル者アルトキハ之ヲ止メ週番大尉ニ届出ヘシ

九、表門ノ出入ヲ許スヘキ者左ノ如シ

（イ）指揮官ニ依リ引卒セラレタル者

（ロ）淮士官以上及其隨從者並制服ヲ著ケタル陸軍高等文官

（ハ）下士以下ニシテ軍隊手牒、公用證、外泊證ヲ所持スル者

（ニ）憲兵、傳令使及郵便電信ヲ配達スル者

（ホ）門鑑ヲ所持スルモノ

（ヘ）特ニ聯隊長ノ許可セル者

十、兵卒ニ在リテハ夕食時限後、下士ニ在リテハ日夕點呼後營門ヲ出入スル者アルトキハ自ラ之ヲ檢スヘシ

公用又ハ外出許可ヲ得テ臨時ニ營門ヲ出入スル下士兵卒アルトキ

モ亦自ラ其證ヲ檢スルコト

十一、歸營遲刻者アリタルトキハ隊號、官等級、氏名及入門時刻ヲ記シ週番大尉ニ報告シ且本人所屬部隊ノ週番下士ニ通報スルコト

十二、衛兵所、營倉、及備付物品中破損紛失等アルトキハ其事由ヲ糺シ破損品ニ在リテハ自然ト過誤トヲ區別シ紛失品ニ在リテハ其理由ヲ修理申立帳ニ記入シ週番特務曹長ノ認證ヲ受ケ聯隊本部ニ申出ルコト

消耗品ハ衞舍掛ヲシテ聯隊本部ヨリ受領セシムヘシ

十三、營倉入ノ者アルトキハ週番下士ヨリ之ヲ受領シ著裝、所持品等ヲ檢査シ營倉ニ錮シ隨時巡視シ營倉ノ清潔及換氣ニ注意スルコト

演習、入浴其他取調等ニテ營倉入ノ者ヲ連レ出ス爲週番下士來ル

トキハ本人ヲ引渡スヘシ

營倉ノ開閉ハ自ラ之ヲ爲シ物品出入レノ際ニハ之ニ立會フモノトス但シ衛舍掛ヲシテ代理セシムルコトヲ得

十四、衛兵及營倉入ノ者診斷ヲ願出ルトキハ週番大尉ニ屆出テ所屬中隊ノ週番下士ニ通報シ診斷ヲ受ケシムルコト

衛兵中若シ疾病事故等ニテ服務セシメ難キ者アルトキハ週番大尉ニ報告シ所屬中隊ニ代人ヲ請求スヘシ

十五、非常又ハ火災アルトキハ衞兵ヲ整列セシメ週番大尉ニ急報シ其指揮ヲ受クヘシ若シ火災ニシテ瞬時モ猶豫スヘカラサルトキハ號音ヲ吹カシメ營倉入ノ者ヲ他ニ移シ其他臨機ノ處置ヲ爲スコトヲ得ルコト

十六、起床時限前ニ起床ヲ要スル者ノ呼起シヲ依托セラレタルトキハ之ニ應スルコト

第十、衛舍掛ハ風紀衛兵司令ノ命ヲ承ケ衛兵所、營倉、面會所等內外ノ清潔保存ニ任シ備付諸物品ヲ監守シ火元取締ニ任スヘシ其日常ノ勤務概ネ左ノ如シ

一、當番卒ヲ割出シ營門、衛兵所其他受持場ヲ掃除セシメ又窓硝子、燈具其他備付諸品ノ手入ヲ爲サシムルコト

二、營倉內ノ掃除ハ營倉入ノ者アルトキハ毎日之ヲシテ掃除セシメ否ラサルトキハ當番卒ヲ使用スルコト

第十一、步哨掛ハ風紀衛兵司令ノ命ヲ承ケ步哨ノ交代ヲ掌リ哨舍ノ清潔保存ニ任シ步哨ヲシテ服裝ヲ正フシ守則ヲ熟知シ之ヲ嚴密ニ實施セシムルヲ以テ任務トス

第十二、步哨一般ノ守則ハ衞戍衛兵步哨ノ爲定メタルモノヲ適用シ其特別ノ守則ハ聯隊長之ヲ定ムヘシ

第十一章 營倉

第一、營倉ハ重(輕)營倉ニ處セラレタル者ヲ錮シ又犯罪者ニシテ處分未決ノ者及一時營倉入ヲ必要トスル者ヲ留置ク所トス

第二、營倉各房ノ入口ニハ營倉入ノ者ノ隊號、官等級、氏名重(輕)營倉、等其他必要ナル件ヲ記シタル札ヲ揭クヘシ

第三、輕營倉入ノ者ニハ消燈時限ヨリ起床時限マテノ間蚊帳、毛布ヲ與ヘ食物ハ平常ニ異ナルコトナシ又必要ノトキ入浴ヲ許スヘシ重營倉入ノ者ヲ輕營倉ニ移シタルトキハ前項ニ準シ之ヲ取扱フヘシ

第四、營倉入ノ者ニハ著用スル被服ノ外物品ヲ所持スルコトヲ許サス但シ用紙若干及勤務書ノ內一本ヲ限リ之ヲ許スコトヲ得

第五、營倉入ノ者ニハ公務ノ外面會スルコトヲ許サス又營倉入ノ者ヲ出ストキハ監視者ヲ付スヘシ

第六、滿罰者ハ營倉ニ入リタル時刻ニ係ラス滿罰翌日ノ起床時限ニ之

ヲ出スモノトス

第十二章　當番卒及從卒

第一、傳令其他諸雜役ニ充ツル所ノ兵卒ヲ當番卒ト稱ス

第二、徒歩兵ノ當番卒ハ通常脚袢ヲ著クルモノトス

當番卒若シ引卒者ナクシテ營外ニ出ルトキハ公用證ヲ携ヘシムヘシ

第三、從卒ハ主トシテ第三(第二)年兵中品行方正、勤務勉勵、技藝熟達ノ者ヲ選拔スヘシ

從卒ノ任務ハ軍隊手牒ニ記入シ外出等ニ當リ其證據トスヘシ

第四、從卒ハ將校ノ傳令、兵器被服ノ拭淨ニ任スルモノトス但シ檢査演習等ニハ必ス出場セシムヘシ

同一ノ兵卒ヲ三ケ月以上使用スヘカラス

第五、從卒ハ兵營出入ノ際ハ週番下士及內務班長ニ届出ヘシ若シ日夕點呼後ナルトキハ其使用者ヨリ證明書ヲ受ケ出入ノ證トスヘシ

第六、當番卒一般ノ心得左ノ如シ

一、服務スヘキ室內倉庫等ハ常ニ清潔ナラシメ備付物品ハ其數ヲ明ニシ破損紛失等ナキ樣丁寧ニ取扱ヒ且妄ニ定メラレタル位置ヲ變ユヘカラス又特ニ火元取締ニ注意スルコト

二、自己ノ用便ノ爲許可ナクシテ其服務ノ場所ヲ離ルヘカラサルコト

三、傳令ヲ命セラレタルトキハ其届先キヲ能ク承知シ若シ口上ヲ以テ傳達スヘキトキハ出發前其要旨ヲ復唱シ又用事ヲ終ヘタルトキハ速ニ復命スヘシ往復途中ニ於テ私用ヲ辨スル等ノコトアルヘカラス

四、當番卒ノ交代ハ定メラレタル時刻ニ於テ上下番ノ者立會ノ上申

繼ヲ爲シ監督主任者ニ報告スヘシ又諸物品ノ受渡ヲ爲スニハ品目表ニ照シ破損紛失ノ有無ヲ改ムヘシ若シ破損品アルトキハ自然ト過誤トヲ分チ又紛失品ニ在リテハ其理由ヲ取調ヘ之ヲ監督主任者ニ報告スルコト

五、當番卒中高級古參若シクハ年長者ヲ取締ニ任シ他ノ當番卒ヲ指揮シ之ト共ニ命セラレタル業務ニ服スルコト

第十三章　檢査

第一、軍裝檢査トハ各隊長ノ兵器被服ノ整備保存ノ良否ヲ檢スル爲行フ檢査ヲ謂フ

第二、細密檢査トハ各隊長ノ兵器、被服、器具、材料、建物、陣營具、其他諸物品ノ整備及各部分ノ手入保存ノ良否ヲ檢スル爲行フ檢査ヲ謂フ

第三、清潔檢査トハ中隊長毎週土曜日午後其管理ニ屬スル諸物件ノ保存、手入、修理ノ良否ヲ檢スル爲行フ檢査ヲ謂フ而シテ必ニ兵器ヲ分解シ其細部ヲ檢査スルトキハ之ヲ兵器分解檢査ト謂フ

第十四章　起居及容儀

第一、下士以下ハ毎朝起床ノ號音ニテ床ヲ離レ著裝ヲ正シ日朝點呼ノ號音ニテ兵卒ハ所定ノ位置ニ於テ週番士官監視ノ下ニ內務班長ヨリ人員檢査ヲ受クヘシ下士ハ其所屬班ノ檢査ニ立會フモノトス但シ曹長ハ此限ニ在ラス

當日診斷ヲ受ケントスル者ハ此際其旨ヲ內務班長ニ届出ツヘシ內務班長ハ其官等級、氏名ヲ週番下士ニ通報スヘシ

起床ノ後窓戸ヲ開キ毛布敷布ヲ振ヒ丁寧ニ疊ミ枕ヲ蒲團ト寢臺トノ間ニ挿ミ顏ヲ洗ヒ兵器ヲ拭ヒ被服ノ整頓ヲ爲スヘシ

第二、寢具ハ午食後之ヲ展ヘ蚊帳ハ通常夕食後寢臺ニ掛ケ日夕點呼後之ヲ張ルモノトス

第三、日夕點呼ハ消燈時限前三十分ニ於テ行フモノニシテ其方法ハ日朝點呼ニ同シ命令訓示等ハ通常此際授ケラルヽモノトス

第四、臨時點呼ノ方法ハ日朝點呼ニ同シ

第五、營內ニ於テハ左ノ規定ヲ遵守スヘシ

一、室內ニ在リテハ靜肅ヲ旨トシ粗野ノ言行ヲ愼ムヘシ消燈後ハ他人ノ安眠ヲ妨クル所爲アルヘカラサルコト

二、總テ官物ハ丁寧ニ取扱ヒ保存ヲ第一トシ紛失セサル樣注意スヘシ又特ニ定メラレダルモノノ外官給物品ニ自己ノ氏名、符號等ヲ記入彫刻シ又ハ私ニ革條ニ孔ヲ穿ツヘカラサルコト

三、室內ニ入ルトキハ必ス靴ノ泥土ヲ丁寧ニ拭フコト

四、室內ハ常ニ淸潔ニシ能ク整頓シ物品ヲ亂雜ニシ又ハ定メラレタル場所外ニ持行クヘカラサルコト

五、濕氣アル被服ハ物干場ニ出シ乾カスヘシ成ルヘク室內ニ置クヘカラサルコト

六、定メラレタル時間外又ハ場所外ニ於テ妄ニ食事スルコトヲ許サス又食事中特ニ他人ノ感情ヲ害シ若クハ鄙陋ニ渉ル言行ヲ愼ムコト

七、階子段ノ昇降及戶ノ開閉ハ靜カニスルコト

八、烟草ハ定メラレタル場所外ニ於テ吸フヘカラス又特ニ許サレタル飮食品ノ外室內ニ於テ飮食スヘカラサルコト

九、室內及廊下ハ勿論窓ヨリ痰唾ヲ吐クヘカラサルコト

十、紙屑ハ必ス紙屑籠ニ投スヘシ營內ニ散ラシムヘカラサルコト

十一、窓、戶、壁、机、腰掛煖爐其他ノ諸器具ヲ汚シ、傷ケ、落書シ又ハ妄ニ釘ヲ打付クヘカラサルコト

十二、窓ヨリ流動物其他ノ物品ヲ投ケ又ハ窓ニ物ヲ干スヘカラサルコト

十三、私ニ鳥獣ヲ飼フヘカラサルコト

十四、大小便ハ厠ノ外ニ於テスヘカラス塵芥ハ塵捨場ノ外捨ツルヘカラス又厠塵捨場ハ特ニ清潔ニスルコト

十五、兵器、被服其他諸物品ノ掃除ハ定メラレタル場所外ニ於テスヘカラサルコト

十六、炊事場、浴室、工場、倉庫、砲廠、廠等ニハ妄ニ立入ルヘカラサルコト

十七、許可ナキ物品ヲ營内ニ持入リ又ハ妄ニ官給品ヲ營外ニ持出スヲ禁スルコト

十八、金錢ハ聯隊長ノ制限セシ以上ヲ所持スヘカラス且互ニ之ヲ貸借スルヲ禁スルコト

十九、新聞雜誌類ハ聯隊長ノ許可シタルモノニアラサレハ讀ムコトヲ許サス又許可ナク自己ノ發意若クハ他ノ依頼ニ依リ印刷物ヲ配布スルコトヲ禁スルコト

第六、起床後ヨリ日夕點呼マテハ寢臺上ニ横ハルコトヲ許サス然レトモ一般休日、夜間勤務ヲ爲シタル翌日及暑中等聯隊長ヨリ午睡ヲ許サレタル場合ハ此限ニ在ラス

第七、消燈後公務、又ハ修學ノ爲延燈ヲ要スル者ハ中隊ニ在リテハ週番士官、其他ニ在リテハ副官委員等ノ許可ヲ受クヘシ

物品ヲ遺失シタルトキハ直ニ内務班長ニ届出ヘシ其之ヲ發見シ又ハ拾ヒタルトキ亦同シ

第八、服裝ハ斷ヘス軍人ヲ監視スルモノニシテ其不正、不締ナルハ心性ノ不確實ナル反應ナレハ服裝ニ付上官ヨリ注意ヲ受クルハ軍人ノ恥辱ナリト心得ヘシ其注意スヘキ事項概ヲ左ノ如シ

一、頭髪ハ短ク剪ルヘシ帽ヲ冠ルニハ左右ニ歪ミ又ハ仰向ニセス其徽章ヲ正シク鼻ノ線ニ一致セシムヘシ若シ頤紐ヲ用フルトキハ適度ニ之ヲ緊ムルコト

二、釦（ホック）「ピショウ」ハ之ヲ脱シ置クヘカラス袴ニ在リテハ特ニ注意スヘシ又磨クヘキ金物ハ常ニ光澤アラシムルコト

三、下襟布ハ上衣ノ襟ヨリ適度ニ現ハスヘシ其他ノ物ヲ頸ニ巻クヘカラス若シ病身ノ爲之ヲ要スル場合ニ在リテモ成ルヘク外ニ現ハスヘカラス又襦袢ノ袖口ハ上衣ノ袖口ヨリ多ク出スヘカラサルコト

四、上衣ハ釦ノ線ヲ正シク體ノ中央ニ置キ袴ハ下ラサル樣著スヘシ脚絆ヲ用フルトキハ袴ノ皺ヲ外側ニ正シク集ムルコト

五、上衣若クハ外套ノ上ニ刀剣ノ帶革ヲ締ムルトキハ其皺ヲ正シク體ノ兩面ニ集ムルコト

六、衣服ノ表面ニハ鎖紐其他布片等ヲ現ハスヘカラス

七、靴ノ踵ヲ踏ミ歪メサルコトニ注意スヘシ長靴ノ釣紐ヲ外ニ現ハスヘカラサルコト

八、被服寢具等ハ兵卒各自清潔ニ洗濯スヘシ然レトモ屢〻之ヲ行フトキハ地質ヲ弱クスルモノナレハ成ルヘク汚ササル樣注意スルコト

第十五章　休日及外出

第一、大祭祝日、年末年始、靖國神社大祭日、陸軍始、陸軍紀念日、日曜日其他定メラレタル休日ニハ通常演習ヲ休ミ營内ニ於テ休養セシム但シ下士以下勤務ニ差支ナキ限リ本人ノ希望ニ依リ外出セシムルコトヲ得然レトモ成ルヘク兵營ニ歸リ食事セシムルヲ例トス

第二、兵卒ノ外出ハ朝食後ヨリ夕食時限マテトシ下士ノ外出ハ日夕點

呼時限マテトス

練兵休、以上ノ患者及處罰中ノ者ハ外出ヲ許サス

第三、公用ノ爲下士以下ヲ外出セシメントスル者ハ中隊長、同官不在ナルトキハ週番士官（本部附ハ副官同官不在ナルトキハ週番大尉）ノ許可ヲ得公用證ヲ受ケ本人ニ交付ス本人ハ內務班長及週番下士（本部附ハ日直下士）ニ届出テ外出スヘシ歸營シタルトキハ公用證ハ之ヲ受ケタル職員ニ返納シ內務班長及週番下士（本部附ハ日直下士）ニ届出ヘシ

第四、中隊ノ一般休日（本部ニ在リテハ本部ノ休日）ニアラサル日ニ外出セントスル者日夕點呼後ニ歸營セントスル者若クハ日夕點呼後外出セントスル者ハ內務班長ヲ經テ中隊長（本部附ハ副官同官不在ナルトキハ週番大尉）ニ願出テ外出證ヲ受ケ週番下士（本部附ハ日直下士）ニ届出テ外出スヘシ歸營シタルトキハ外出證ハ之ヲ受領セシ職員ニ返納シ週番下士（本部附ハ日直下士）ニ届出ヘシ

第五、一般休日ニ外出スル者ハ內務班長（本部附ハ副官同官不在ナルトキハ週番大尉）ヨリ軍隊手牒ヲ受ケ外出スヘシ歸營シタルトキハ軍隊手牒ヲ受領セシ職員ニ之ヲ返納スヘシ

第六、下士以下營門ヲ出入スルトキハ外出ヲ許サレタルヲ證スル爲軍隊手牒、公用證外出證、又ハ外泊證ヲ歩哨ニ示スヘシ但シ日夕點呼後ヨリ翌日日朝點呼マテノ間ニ營門ヲ出入スルモノハ自ラ風紀衞兵司令ニ届出テ外出免許ノ證據ヲ示スヘシ

第七、下士以下物品ヲ營外ニ持出サントスルトキハ中隊ニ在リテハ週番士官聯、大隊本部付ハ副官其他ハ關係准士官以上ニ物品持出證ヲ請求シ營門ヲ出ルトキ歩哨ニ渡シ物品トノ照合ヲ受クヘシ出入商人其他ノ者物品ヲ持出サントスルトキ亦同シ

第八、外出先ニ於テ守ルヘキ規定概ネ左ノ如シ

一、外出ノ際ハ特ニ服裝ヲ正シクシ姿勢動作ヲ嚴確ニシ活潑ナル歩法ヲ用ヒ凛乎侵スヘカラサル威儀ヲ備フルヲ要ス凡ソ聯隊ニ於ケ

ル軍紀ノ張弛、敎育ノ精粗ヲ觀察セント欲スルモノハ下士以下ノ營外ニ於ケル擧動ニ注意スルモノナレハ外出先ニ於ケル各自ノ一擧一動ハ聯隊ノ名譽ヲ代表スルモノト心得常ニ軍人ノ名譽ヲ發揚スルコトニ心掛クルコト

二、公衆ニ對シテハ穩和謙讓ヲ旨トスヘシ決シテ粗暴野鄙ノ言行アルヘカラス老幼婦人ニ對シテハ道ヲ避ケ座席ヲ讓リ諸事親切ヲ旨トスヘシ總テ公園、劇場其他群集ノ場所ニ在リテハ特ニ容儀ヲ愼ムコト

三、街路ハ左側ヲ通行シ人道車馬道ノ別アル所ニ於テハ其區別ヲ守リ數人同行スルトキ狹キ道路ニ在リテハ二人以上廣キ道路ニ在リテモ三人以上併列スヘカラス街路ニ於テハ高聲談話スヘカラス行進中ハ上級古參者ノ步調ニ倣フヘシ雨雪天ニアラスシテ外套ノ頭巾ヲ冠リ又ハ衣服ノ「カクシ」ニ手ヲ入レ居ル等惰弱ノ行爲アルヘカラス凡ソ活潑ナル動作ハ軍人精神ノ充實ヲ表スルモノナレハ假令用事ナキトキト雖放心徐行スヘカラス況ヤ醉步蹣跚ハ心術ノ野鄙ヲ表スルモノナレハ酒氣ヲ帶フルトキハ一層軍人ノ容儀ヲ正フスルコトニ注意スルコト

四、禁止セラレタル飮食店遊戲場等ニ立入ルヘカラス又軍人ノ品位ヲ害スルカ如キ不體裁ノ品物ヲ携フヘカラサルコト

五、外出中非常其他兵營ノ近傍ニ火災アルコトヲ知リタルトキハ直ニ歸營スルコト

六、外出先ニ於テ事故アリシトキハ歸營後直ニ報告スヘシ又差支アリテ定メラレタル時日ニ歸營スルコト能ハサルトキハ其事由ニ從ヒ市(町)(村)長、憲兵、警察官、驛長、船長等ノ證明書若クハ醫師ノ診斷書ヲ受ケ歸營後届出ッルコト

第九、公用證、外出證、外泊證ノ樣式左ノ如シ

表

第　號
○公用證
（乘馬公用證）

二寸
一寸五分

裏

○何兵第何聯隊

表

○外出證

二寸
一寸五分

裏

○何兵第何聯隊

用紙半紙罫紙

外泊證

何兵第何聯隊（大）隊第何中隊
官等級　氏　名

何年何月何日午前（後）何時ヨリ何年何月何日午前（後）
何時マテ何々ノ爲外泊ヲ許可シタルコトヲ證ス

年　月　日

聯（大）（中）隊長　何　某　認證

第十六章　衞生

軍隊内務書

第一、醫務室ニ患者ノ診斷、治療、身體檢査、種痘、見習醫官、軍醫生、衛生部下士以下ノ敎育其他衛生ニ關スル一切ノ事務ニ服スル所ヲ謂フ

第十七章　浴室

第一、浴室ニ於テ守ルヘキ規定概ネ左ノ如シ

一、被服ノ著脫ハ浴室內ニ於テシ他人ノモノト混同セサル樣注意スヘシ金錢、時計等貴重品ハ浴室ニ持チ行クヘカラス

二、入浴中ハ靜肅ヲ旨トスヘシ吟歌、高聲其他他人ノ妨ケトナルヘキ行爲アルヘカラス浴槽內ニ於テ石鹼ヲ使用シ又ハ被服等ノ洗濯ヲ爲スヘカラス

第十八章　酒保

第一、酒保ハ之ヲ聯隊ニ置キ下士以下ニ質素ニシテ品質良好且廉價ナル日用品及慰安ニ必要ナル飮食物等ヲ賣リ其便利ヲ圖ル所トス

第二、酒保ハ通常每日晝食後ヨリ日夕點呼マテ開クモノトス但シ一般休日ニハ朝食後ヨリ開クコトヲ得

第三、飮食物ハ下士ニ在リテハ其集會所、兵卒ニ在リテハ酒保內ニ於テ飮食スルヲ例トス

第四、處罰中及犯行取調中ノ者衛兵勤務中ノ者、軍醫ノ診斷ニ依ルヘキ者、其他上官ヨリ禁セラレタル者ハ酒保ニ就キ飮食物ヲ買フコトヲ得ス

第五、酒保ニ於テ守ルヘキ規定概ネ左ノ如シ

一、靜肅ヲ旨トシ禮讓ヲ重ンスヘシ決シテ風紀ヲ亂リ他人ノ妨ケトナルヘキ言行アルヘカラス又武裝ノ儘飮食スヘカラサルコト

二、物品又ハ切符ノ購入ニ前後ヲ爭フヘカラス紙片、飮食物ヲ棄テ場內ヲ不潔ナラシムヘカラサルコト

三、器具並備付器ヲ所定ノ場所外ニ持行クヘカラス若シ破損紛失セシメタルトキハ委員附下士ニ届出ルコト

四、代價ハ其都度支拂フヘシ若シ切符ヲ用フル場合ニ於テ當日使用セサルモノアルトキハ酒保閉鎖前現金ト引換ヲ請求スルコト

下士官兵學科教程軍隊内務書 終

三、器具並備付器ヲ所定ノ場所外ニ持行クヘカラス若シ破損紛失セシメタルトキハ委員附下士ニ届出ルコト

四、代價ハ其都度支拂フヘシ若シ切符ヲ用フル場合ニ於テ當日使用セサルモノアルトキハ酒保閉鎖前現金ト引換ヲ請求スルコト

下士
上等兵

學科教程

野戰築城教範

目次

第一章　一般ノ要領……二
第一節　目的及用途……二
第二節　陣地ノ設備……三
第三節　掩體ノ厚サ……五
第四節　工事ノ爲軍隊ノ使用法……五
第五節　器具及材料……六
第二章　作業ノ實施法……六

第一節　前地ノ設備……六
第二節　散兵壕、掩壕、及交通壕……六
第三節　掩蔽部……一四
第四節　障碍物……一六
第五節　地物ノ應用……二一
第二章　被覆及編束物……二三
第一節　被覆……二三
第二節　編束物……二四

下士
上等兵　學科教程野戰築城教範目次　終

下士
上等兵　學科教程

野戰築城教範

第一章　一般ノ要領

第一節　目的及用途

第一、野戰築城ノ目的ハ敵火ノ効力ヲ減殺シ我射撃効力ヲ増大シ以テ我軍隊ノ戰鬪力ヲ保持増進シ常ニ我軍ヲシテ有利ノ形勢ニ在ラシムルニ在リ

第二、野戰築城ハ防禦ニ在リテハ勿論攻撃ニ在リテモ屢々適用スルモノトス

第二節　陣地ノ設備

第三、一般ノ場合ニ在リテ第一ノ注意ヲ射界ノ清掃ト射距離ノ測定ト

ニ置カサルヘカラス

第四、防禦工事ハ若シ敵ヲシテ陣地ノ識別ヲ容易ナラシムルトキハ其價値ノ大部ヲ沒却シ且敵砲兵ノ害ヲ被ルコト大ナリ故ニ注意シテ土地ノ狀態ニ適合セシメサルヘカラス

第五、步兵ノ陣地ハ通常散兵壕、後方部隊用ノ掩壕及要スレハ此兩間ノ交通壕ヨリ成ルモノトス

第二節　掩體ノ厚サ

第六、掩體ノ厚サハ彈丸ノ威力及所用ノ物質ニ依リ決定セラル

即チ銃砲彈丸ノ最大侵徹力ニ其三分ノ一ヲ增加セシモノヲ以テ掩體ノ厚サトス

第七、小銃彈ニ對スル掩體ノ厚サ左ノ如シ

一、砂　〇米七五

二、土囊ニ容レタル砂　〇米四〇

三、尋常土　一米〇〇

四、重疊シタル糾草　二米〇〇

五、混土　二米〇〇

六、踏固メタル雪　二米五〇

第四節　工事ノ爲軍隊ノ使用法

第八、步兵ハ簡易ナル工事ヲ自ラ實施スルモノトス

第九、工兵ハ大ナル又ハ困難ナル工事ニ從事ス他兵種ト連合スルトキハ他兵種ノ爲スヘキ作業ニ干與スルコトナク專ラ困難ナル工事技術ヲ要スル作業又ハ大ナル作業力ヲ要スル工事ニ從事スルモノトス

第五節　器具及材料

第十、作業ハ通常各隊ノ携行器具ヲ以テ之ヲ實施ス

第十一、步兵一大隊ノ携行器具ノ員數左ノ如シ

	土工			木工	
	圓匙	方匙	十字鍬	小十字鍬	斧	十斧	疊鋸
携帶		二七二		六八		三二	二〇
駄載	四八		一六		八		

第二章　作業ノ實施法

第一節　前地ノ設備

第一、前地ニ在ル地物ニシテ我射撃ノ妨碍トナルモノハ爲シ得ル限リ之ヲ除去スヘシ之ヲ射界ノ清掃ト謂フ

第二、射界ノ清掃ト同時ニ前地ノ要點ニ至ル距離ヲ測量シ之ヲ火線ニ標示シ若シ要スレハ前地ニ距離ノ標點ヲ設クヘシ

第三、散兵壕ハ地形、土質及狀況ニ依リ適宜ニ斷面ヲ決定スルモノナレトモ左ノ尺度ハ常ニ準據セラルヘキモノトス

一、正面幅　各散兵ノ最少限一歩

二、照準高　一米三〇（膝射用ハ〇米八〇）

三、臂座　高サ〇米二〇幅〇米三〇

四、踏堺　一列射撃（〇米四〇乃至〇米五〇（被覆スレハ〇米四〇）
二列射撃（〇米六〇乃至〇米七〇（被覆スレハ〇米六〇）

第四、火線ハ射撃ニ妨ケナキ限リ第一、第二圖ノ如ク低ク設クルヲ利トスルモ作業困難ナリ第三圖ハ工事最モ容易ナリ第四圖ハ第三圖ヲ掘擴シ散兵ノ後方ニ通路ヲ設ケタルモノ第五第六圖ハ要塞戰ノ歩兵陣地等ニ用ユル最モ強硬ナルモノナリ

圖 五 第

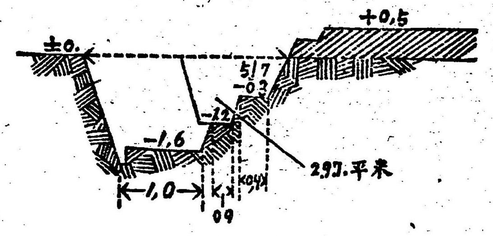


圖 六 第

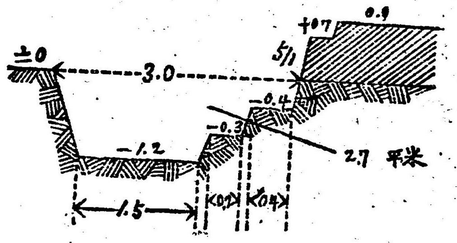


圖 七 第

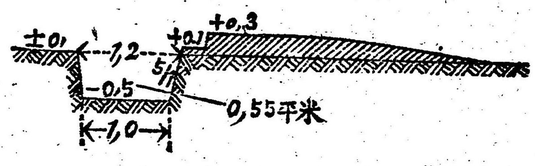


圖 一 第

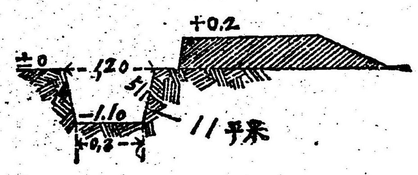


圖 二 第

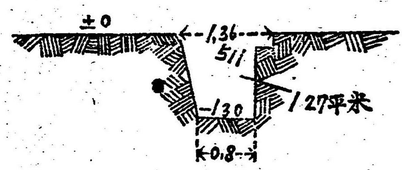


圖 三 第

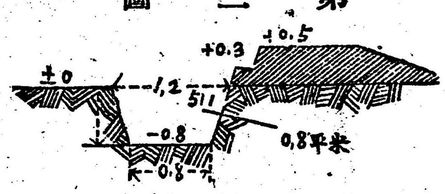
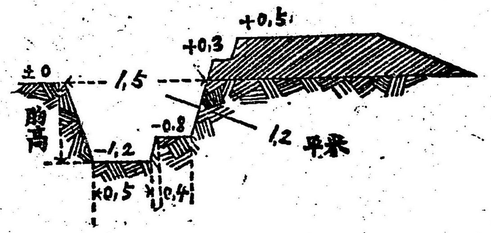


圖 四 第



第五、散兵壕ハ立射ニ構築スルヲ原則トスルモ時間ナキ等已ムヲ得サル時ハ第七圖ノ如キ膝射用ヲ造ルコトアリ然ルトキハ狀況ノ許スニ至リ直ニ立射用ニ改築スヘキモノトス

第六、散兵ハ各自其位置ヲ裝塡及射撃ニ便ナル如ク設備シ且ツ前進ニ便ナル樣「足掛リ」ヲ內斜面ニ設クルモノトス

第七、胸墻ノ內斜面ハ力メテ急峻ナラシムルヲ利トス故ニ要スレハ臀座下ヲ被覆スベシ

第八、援隊豫備隊ノ爲メニ設クル掩壕ノ構築法ハ概子散兵壕ニ同シ但シ射撃ノ設備ヲ要セス掩壕高(壕低ヨリ掩體頂マテノ高サ)ヲ約一米七〇トス

第九、交通壕ハ底幅ヲ少クモ〇米五〇トシ一米七〇ノ掩護高ヲ與フ敵火ノ方向ニヨリ一側又ハ兩側ニ掩體ヲ設ケ尙ホ橫墻ヲ構築スルモノトス

第十、散兵壕ヲ掘開スルニ先チ中隊長ノ指示ニ依リ若干ノ將校下士ハ火線ヲ決定シ所要ノ標兵若クハ杭、土嚢、繩等ヲ以テ之ヲ標示ス

第十一、經始終ル後中隊長ノ命ニ依リ標線上ニ兵卒ヲ配置ス其ノ方法左ノ如シ

一、散兵ヲ以テ前進シテ其線上ニ停止セシムルコト

二、豫メ其位置ニ導キテ其線上ニ散開セシムルコト

三、(夜間等ニアリテハ)側面縱隊ヲ以テ前進シ逐次先頭ヨリ其線上ニ散開セシムルコト

散開ノ間隔ハ將校ノ指示ニ從フモノトス

第十二、散兵壕掘開中岩石若クハ湧水等ニ出會セハ適宜ニ壕深ヲ減シ幅ヲ增加シ或ハ內外兩側ニ壕ヲ掘開シテ胸墻ヲ設クヘシ

第十三、作業ハ最モ靜肅ニシテ秩序正シク施行スルヲ要ス夜間ニ於テハ殊ニ然リ故ニ火光談話ハ固ヨリ殊更ニ音響ヲ發スル如キ動作ハ嚴

禁スヘキモノトス

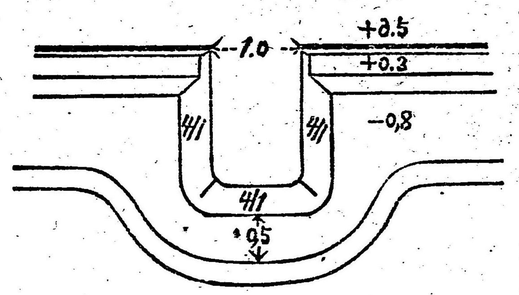
第十四、胸墻ハ高サト厚サヲ同時ニ增ス如ク積土スルヲ要ス又土ハ毎匙成ルヘク多ク盛ラシムヘシ然ルトキハ縱令動作緩徐ナルモ尙ホ頻繁ニ小量ノ土ヲ投クルニ比シ作業速ニシテ且ツ疲勞少ナケレハナリ

第十五、掘開ヨリ得タル糾草若クハ土塊ハ急峻ナル胸墻ノ內斜面ノ被覆ニ應用スヘシ又胸墻ハ其積土ヲ行フ間屢々之ヲ踏ミ固ムヘシ

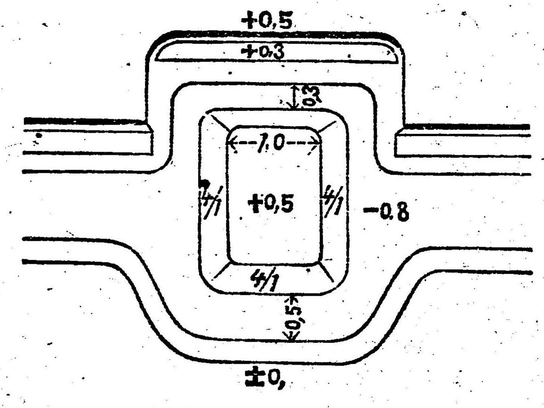
第十六、敵火中ニ在リテ作業スルトキハ散兵ヲシテ銃ヲ後方身邊ニ置キ伏臥シテ先ヅ自己ノ伏射用ニ供スル爲メ〇米三〇ヨリ高カラサル個々ノ掩體ヲ設ケ次ニ之ヲ左右ニ堀延ヘ以テ一連ノ掩體ヲ形成セシムヘシ

第十七、散兵壕、掩壕、及交通壕內ニハ敵ノ縱射、斜射ヲ防止シ且ツ敵彈破壞ノ威力ヲ制限セン爲メ屢々第八圖若クハ第九圖ノ如キ橫墻ヲ設クル必要ヲ生ス

第八圖



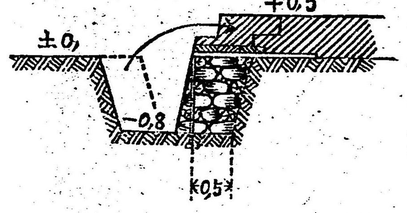
第九圖



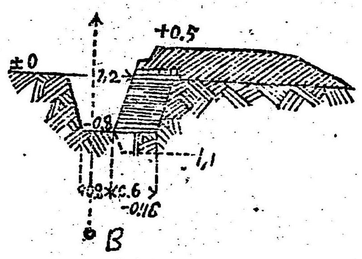
第十八、横墻ハ其高サヲ火線ニ長サヲ壕幅ニ等シカラシメ幅ハ火線ノ所ニ於テ一米トス

第十九、歩兵戰鬪開始前徒ラニ敵砲火ノ損害ヲ避クル爲メ散兵壕及掩蔽部壕ニ掩蔽部ヲ設クルコト緊要ナリトス

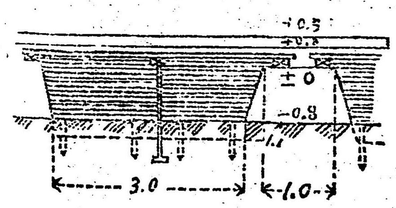
第十圖



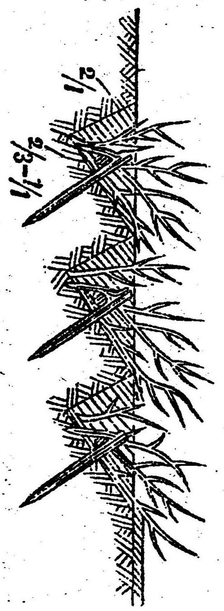
第十一圖



A B ノ斷面



第十二圖



第二十、掩蔽部ハ得タル材料其他狀況ニ應シ適宜構設セラルヽモ左ノ尺度ハ常ニ準據セラルヘキモノナリ

一、一人ノ座幅　〇米五〇

二、腰掛、高幅共　〇米三〇

三、腰掛ヨリ掩蓋下ニ至ル高サ　〇米九〇

第二十一、掩蔽部ハ少數ノ堅固ナルモノヲ設クルヨリ單簡ナルモノヲ多數ニ分設スルヲ利トス又其位置ヲ敵ニ發見セラレサルコトニ特ニ

注意スルヲ要ス

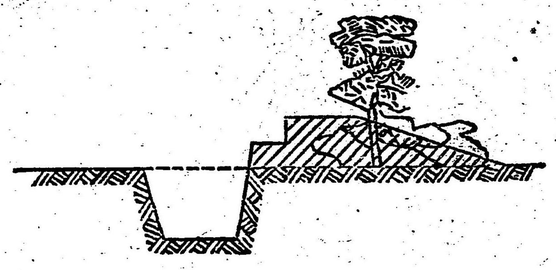
第二十二、第十圖ハ第三圖散兵壕ノ壕内ニ第十一圖ハ同胸墻下ニ第十二圖ハ掘擴散兵壕（第四圖）ノ胸墻下ニ設クル掩蔽部ノ例ヲ示スモノトス

第四節　障碍物

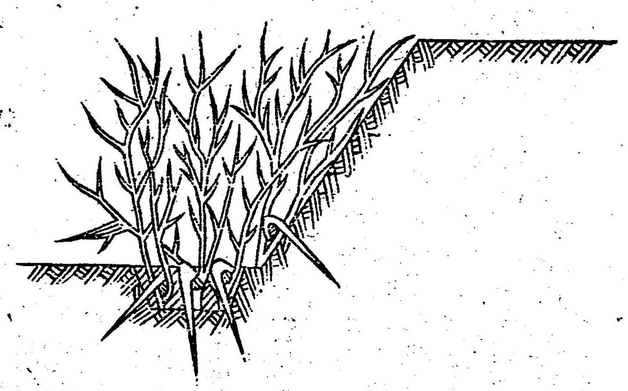
第二十三、障碍物ノ目的ハ最モ有効ナル射程内ニ在リ敵ノ驀進ヲ阻止シ又奇襲ヲ防遏スルニ在リ

第二十四、人工障碍物中最モ多ク用フルモノハ鹿砦鐵條網及拒馬トス

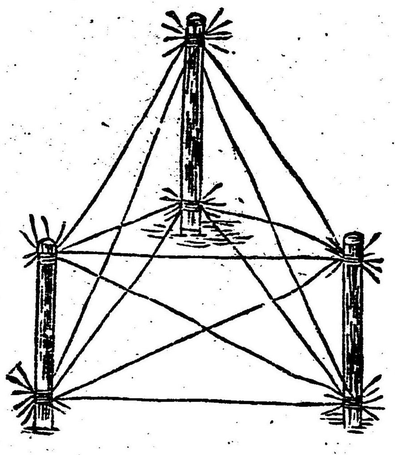
第十三圖



第十四圖



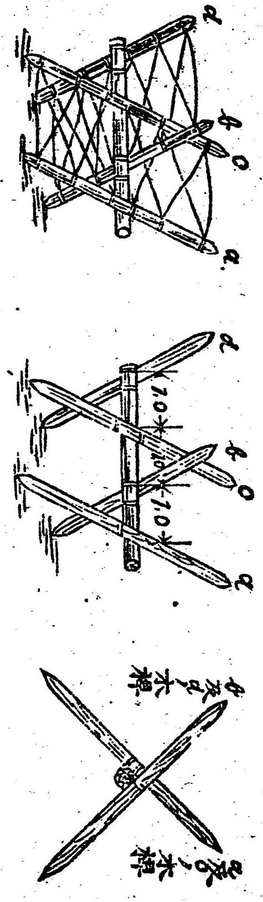
第十五圖



備考

杭ノ上下兩端ヨリ出ツル八本ノ短キ線ハ各其位置ヨリ他杭ニ引張スヘキ太キ鐵線ノ數ヲ現ス

第十六圖



第二十五、鹿砦ハ樹幹又ハ大ナル樹枝ノ梢端ヲ尖銳ニシ敵方ニ向ケ重子合テ地上ニ固定シタルモノニシテ第十三第十四圖ノ如シ

第二十六、鹿砦ヲ分チテ其ノ二トス

一、樹幹鹿砦

二、樹枝鹿砦

第二十七、鐵條網ハ不同ノ高サ（平均一米二〇）不等ノ間隔（平均二米）ヲ以テ堅固ニ深ク地中ニ打込ミタル杭間ニ諸方向ニ大小ノ鐵線ヲ張リタルモノナリ（第十五圖但シ圖ハ大ナル鐵線ノミヲ示ス）

鐵條網ヲ作ルニ用フル杭ハ長サ一米八〇乃至二米五〇太サ〇米一五トシ鐵線ハ太キモノト細キモノトノ二種ヲ用ユ其太キモノハ約五密米トス

第二十八、拒馬ハ太キ木桿（長三米）ニ十字形ニ尖桿ヲ固定シ其間ニ大小ノ鐵線ヲ張リタルモノニシテ通路ヲ閉塞スル等ニ用フ若シ數個ヲ配列スルトキハ鐵線ヲ以テ彼此連結スルモノトス

（第十六圖）但シ圖ハ太キ鐵線ノミヲ示ス

第二十九、其他撲林中ニ鐵線ヲ張リ或ハ壕内ニ小杭ヲ植ユル等時ノ狀況ニ應シ又現地ニ於テ發見スル物件ヲ利用シ以テ有効ナル障碍物ヲ設クルヲ得ヘシ

第五節　地物ノ應用

第三十、防禦工事ニ應用シ得ヘキ地物ハ到ル所ニ存在ス是等ノモノヲ巧ニ應用スルトキハ工事ノ時間ト勞力ヲ省クノ利アリ

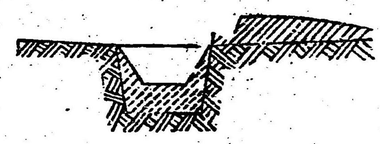
第三十一、溝、壕、凹道、築堤ハ其形狀ニ應シ切取掘下ヲ行ヒ之ニ踏塚階段斜坂等ヲ設クヘシ（第十七第十八第十九圖ノ如シ）

但シ狹キ築堤ニ在リテハ敵ニ反對スル一側ニ火線ノ設備ヲナスヘシ（第二十圖）

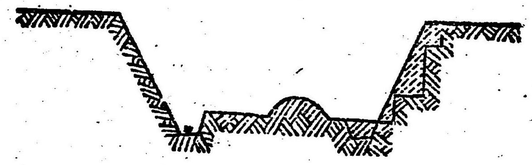
第三十二、生籬、板塀、等ハ良好ナル障碍物又ハ有利ナル遮蔽物トナルモノナリ其防禦設備ハ背後ニ散兵壕ヲ設ケ第二十一圖ノ如クスヘシ

第三十三、墻壁ハ其高サニ應シ其内側ヲ切下ケ或ハ踏臺ヲ設クヘシ（第二十二、第二十三、第二十四圖ノ如シ）

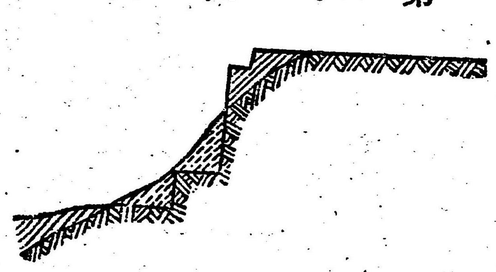
第十七圖



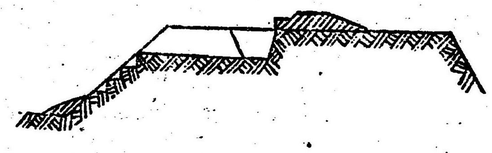
第十八圖



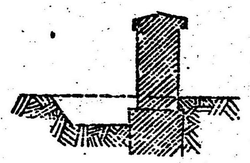
第十九圖



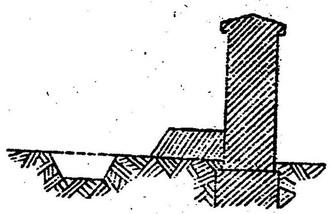
第二十圖



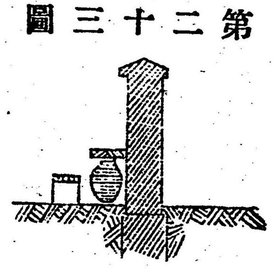
第二十一圖



第二十二圖



第二十三圖



第三章　被覆及編束物

第一節　被覆

第一、土砂ノ自然傾度ヨリ急峻ナル斜面ヲ築クニハ通常之ヲ被覆ス假令除土部ニ在リテモ其使用頻繁ナルカ或ハ長時日之ヲ使用スル場合ニハ斜面ノ被覆ヲ必要トス

第二、糾草ノ被覆ヲ爲スニハ長幅共ニ約〇米一〇ニ截リ取リタル糾草ノ草面ヲ下方ニシ各層其接合部ヲ交叉スル如ク重疊シ而シテ其内側ニ土砂ヲ塡實スルモノトス

但シ最上層ノ糾草ハ草面ヲ上ニス

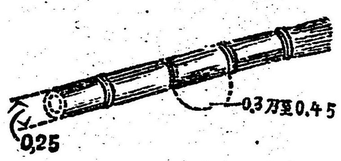
第二節　編束物

第三、束柴ハ樹枝或ハ竹ヲ集メ尚ホ要スレハ之ヲ接續シ〇米三〇乃至〇米五〇毎ニ結束シテ製作スルモノニシテ長サ四米太サ〇米二五ヲ超エサルヲ以テ使用上便ナリトス（第二十五圖）

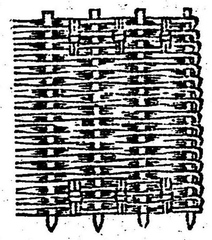
第四、編條ハ木或ハ竹ノ杭ヲ約〇米四〇ノ間隔ヲ以テ地上ニ植立シ枝又ハ割竹ヲ以テ之ニ編タルモノニシテ長サ二米高サ一米以上トセサルヲ使用上便ナリトス（第二十六圖）

第五　保籃ハ編條ヲ中徑約〇米六〇ノ圓筒形ニ作リタルモノヲ謂フ（第二十七圖）

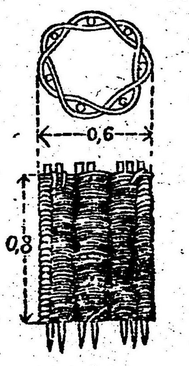
第二十五圖



第二十六圖



第二十七圖



下士
上等兵

學科教程野戰築城教範　終